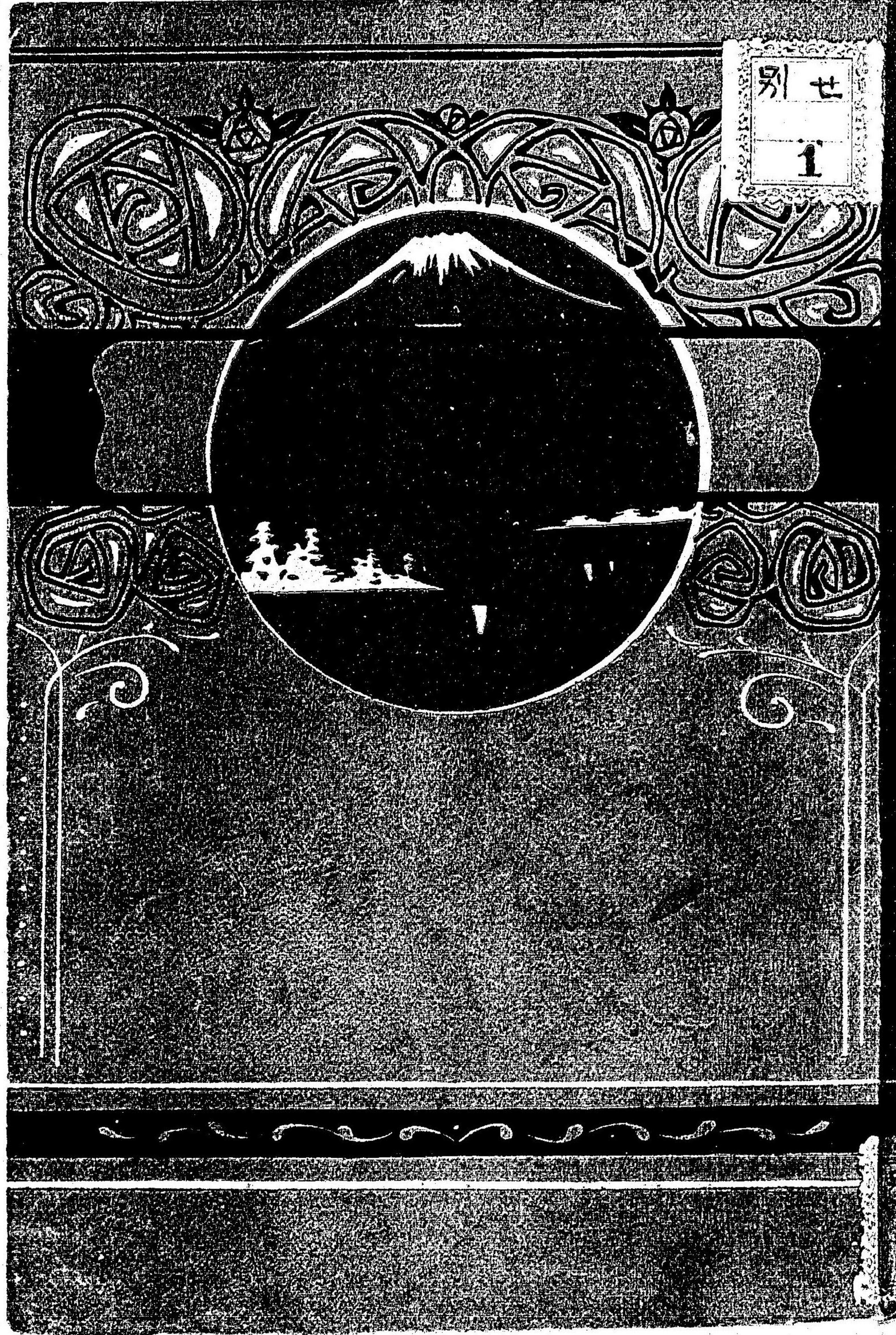


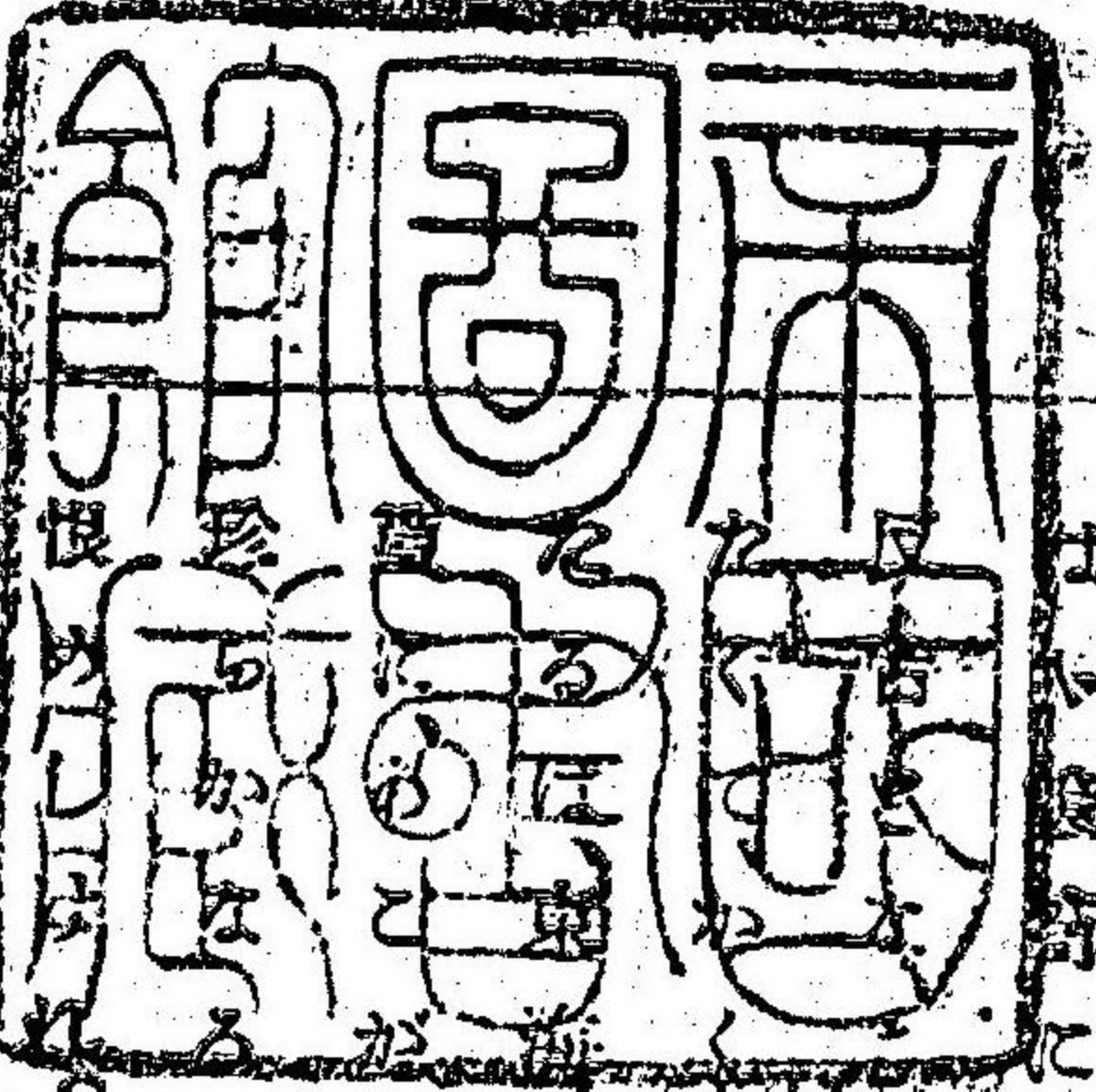
別世

1



NANYODO BOOK-STORE
MOTOMACHI HONGO
TOKYO
店本堂陽南

序



かづくの旅日記をえりぬきて、紀行文にもものしたるを、い
は、度、新に
蔵して、自ら怡まば足りぬべきを、さすがに未は
むも口をし、かつは同好の士に願ちまゐらせ
は冊子に纏めけるなり。今まで、草鞋の痕を印し
の一隅に過ぎねば、人訪はぬ。隠阪、僻邑の、露柳
る、よすがもなく、さなきだに、拙き水壘の、あ
海味の魚と、山登の熊掌とを、併せ有せざるこそ。

明治そのの年初夏

戸太村舎に於て

鳥水老るす



別世一

烏水を憶ふ

秋 曉

秋風通ふ關の月に
いぼゆる駒は古の
武蔵野わたり露はく
笛吹草すさひては
寒かるらめや旅衣
信濃路近き山々の
朝な朝なに霜あらは
煙りは深き金洞の
緑のみみと葉なごてに
から紅ぬに染まざらむ
鎌倉山に跡ふりし
つはしものごもる路をば
ものゝ夫たらは弓杖の
竹もて迎るまふ人に

まみえざらむる立田姫
硯が 甕文人の
暫しの筆を待ちつけて
さながら寫す岩々の
それにも雲の聚ありて
仰けは高し石の門
叩きて醒されこゝに又
管てはめぐる糸々の
奇しく壯きく恠しきに
折るゝ我儘のまが角の
組きかひな断たまくと
愧ぢつ恨みつ閑えけん
なにがし男なかりしかき

目次

多摩川を溯る記	一
丹波山を踰ゆる記	一
昇仙峽	一七
靱骨記	四一
富士川を下る記	四九
伊豆めぐり	五八
函谷の冬夜	六三
刈萱日記	七四
殘芳記	一〇一
神武寺の秋夕	一一三

妙義山の秋	湘南臥雲録	大磯驛	幽寂	南船北馬
.....三〇二九三八二五一五八

扇頭川景

小島島水伝



多摩川を溯る記

富士川に名だする倭岩、屏風岩など、つれなの人は利に敏く、庭の敷石欲しければ
 練絹の曲より柔き嫩草を踏み、羽翳き蝶を這ひて、そらありくもいと興あり。殊に
 さかりを過ぎたれど、藍より青き雪代水、弓の如くなる崖に沿ひて流るゝあたり、
 き荷物、それも梅の葩ならぬはうれしからず、多摩川のほとり、桃は未だし、梅は
 のごとくなれば、吹雪罷をなぐつて晴きは鶴こそよけれ、吾物ながら傘の上の重た
 本よりみの甲斐路に大らむかど、友なる人に語りしに、木曾は寒きこと、今も臘月
 かる下り宿濃路の友を訪ひて、木曾より飛驒に入らむか、多摩川を溯りて、

にや、今ごろ馴して眠きつゝありと聞く。今行かずして後にむかしを回想せむは、
紋扇を擧げて西山に没せむとする日を招くよりあろかなるべしといふ。

さらば多摩川こそ善ければ、三月十六日、品川より新宿行の列車に乗かへ、立川
にて青梅線にうつる。客車の狭く、小さく、低く、且つ汚れたる、はや田舎に入ら
る心地す。動搖劇しく、軌る音殊に噴すければ、車中酔を詰めたることく、膝を交
へて語らふ人も、聞く人もいと惱むめり。

横濱を出立するときより、降りしきる雪、風に蒲の穂と狂ひしが、國分寺あたり
より、綿をちぎつて抛つごとく、山家の風貴銀千鶴といひけむ、田も畑も雪の厚さ
をかつきて、御嶽大嶽、暗黙たる大空にいつことも辨へがたし。青梅にて急車を下
り、傘をさぼめて雪を衝けど、今より知らぬ山路に分け入らむは難澁なり、かゝる
ときは上戸のこと、熱燗一杯を傾けて國爐裏の側にくろりとなるに如かすと、坂上
屋といへる宿に投ず、時に午後二時頃、夕に至りて雪止む。

この町に田舎芝居の興行あり、大門小陣といふが座頭なりとぞ、行かず、半夜夢

をめて、小暗き行燈の下に蕪村句集を誦す。

十七日早起すれば、星垂澄空に淡く、御嶽にやあらむ、巨人のごとき奇峰層崖の
間に峙立して天を撃けたり。飯を急がせて立出づ。金剛寺には、世に比ひ難なる梅
の名木あり、實常にあをくして翌年花咲くときに及ぶとも標落せず、子を結ぶとき
に至りて始めて枝を辭す、この里を青梅と名くるは、このゆゑなりと聞きしかど、
知らぬ間に十町ほど行過したれば、元の路を戻るも懶くて見ざりき。

凡そ武州より甲州に行くに二道あり、八王子よりするを本道とし、青梅より十里
の山道を越えて甲州鴨澤村に達するを裏道とす。青梅道の方、二里あまり近しい
へど、路險しければ、大切の用を帯ひたる旅人は、昔よりこゝを避けたりきとぞ。

景色をあけつるは、八王子道に桂川あり、青梅道に多摩川あり、かれに小佛峠、
笹子峠あり、これに大菩薩峠、丹波山あり、いづれ伯仲の間にはあれど、幽邃にし
て奇峭なるはこの道をすぐれたりとす。こゝより多摩川に沿うて、甲州都留郡の山
北に入る路は、嵯峨たる岩嶺連亘して秩父に墾し、三峰、武甲山など遙く峻嶒玉立

せり『武藏風土記』の作者、このあたりを記していつらく『西(多摩郡の)によりたる山谷の地は、男女常に山中に入て樹木など伐り、薪とするを以て生業となし、女も賃布の短衣を身にまとい、うち混したるさまは、さながら男女をも別たす、只その鬘髪を以て知れり、言語應對に至ては最野鄙なり、これらの風俗は頗る東方の諸郡に異なり』と。

町を離れて六町ばかり、日向和田に至る路すがら、竹藪を繞りて多摩川の離頭に出づ、川を隔てたる向ひを日影和田といふとぞ。二俣尾は桃の名所なり、今は昔尙ほ堅けれど、絳雲たなびくさまを心に書きて、奥澤橋といへるを渡れば、路岐れて左は甲州の大菩薩に通ひ、右は秩父へ行く、二俣尾とはこれより唱へたらむかし。土地平坦なれば人戸軒を列ねて小市を成す、將門の位牌を祀れるなにかし寺は、門前より瞥見したるばかり、入らずして過ぐ。村家の梅花、白きは大方翻へりて竹の籬に玉簪を懸けたれど、賤の伏屋の乙女が唇にさしたる口紅の、動りけるを野末に捨てられて、これぞこのくれなるの梅の花とはなりにけむ、蘭麝にあらぬかをりを

衣に浴びて機織るぬしや誰れ、牛の鼻麿の淡紅なるを、肩に絡けむはかりにして曳きながら、鄙びたる唄うたふ少女、こぞかしけれど書趣あり。先づ頃雨滋かりけるに加へて、昨日の雪解に路は泥ふかり、草鞋はさすがに重けれど、貝のごとくに鋪ける梅の葩を踏まむは、月夜に帽を冠れる男と、天秤にかけていづれ不風流の極みなるべき、など心に嘲みて、下澤井より上澤井へと進む。向岸に御嶽山あり、万年橋といへるを架すれど、今修繕中にて度ることを許さずれば、崖を半ば下りて眺る。長さ二十間にあまるべく、幅は四五尺もあらむ、水を距ること五尺の高さにあれど、箭を射る流れは、林に震ひ、石を轉はし、千曳の大巖をも揺がさむはかりなれば、橋下に柱を樹つべくもあらず、兩岸より大材をさし延へて頭を組み合せ、そが上に桁を渡し、板を敷きあり。村の人に聞くに、この橋、洪水にも流さるゝ思なければ、万年橋と名けにき、このあたりに架けたる橋、別に三四あれど、昔より皆同名なりと。

御嶽に上らまくおもひしかど、けふは小河内の鏡泉に浴したければ、路を急がで

はど、愛を割きて去る。大嶽の頂き、老女の化粧の、それにはあらねど、御嶽と白頭唱和して、残んの雪は淨地に白蓮の影を落したることく、裾より下は枯槎より濃かなる紫色に包まれて、穩かに、靜に、安らげく大空に倚りかゝれり。棚澤に入るころ、迢々たる白雲は、樵夫の斧を繞りて、伐木丁々の音のみ、向ひの山に高し。渦く水に捲かれて、流れ下る材木は、岩に堰かれて横はれるを、ついでに衝き來れる材木と闘ひ、一字形は丁字となり、十字となり、米字となり、租滞して流れも敢へざるを、盲縮の筒袖襦袢と同一股引着たる男、甲斐々々しく裾を端折りて、岩より岩を飛ぶが如くに傳ひありき、丸木の棹延へて之を衝くに憂として聲あり、さながら米俵の口繩の釋けたらむやうに、沸々たる急湍に先を争ひ、輾轉して流れ行く、これを素流しといひて、一二本づゝ漂ひ行くを、御嶽に近き丹三郎村あたりにて筏に編み、川を下すといふ。こゝより六郷まで乗出だすに、早くとも四五日、晚ければ十日を費やす、多摩沿岸に多かる筏宿は、この男どもを泊らすなりとか。さなきだに溶くるに易き春の雪、ひふは眩きまでに、朗かなる紅日に蒸されて、屏風を

盛てたる山々より頽れ落ち、この川俄に一箇の水嵩を増したるらし。尙ほ行く、穂花はらくと足許に落ちて古籬の袴を地に乾したるやうなり、幼きわらべの、早卒の手して拾へるを、姉らしきが傍らにありて、誰を縫ひ合せ、輪なりにして下げたる、その糸は白かりき。

小丹波、白丸、いづれも上流に沿ひたる寒村なり、青梅より町外れたる拜島あり、川幅いと濶く、積白く晒されたる中を水はゆるやかに流るれど、このほどりは勾配急にして崩崖水を避くこと三四丈なるが、弓のごとくに彎曲し、川幅窄きは甘間に足らず、ひろきもあそらく五十間を出てざるべし。奇怪なる岩石、疊み合へる間を激越し、盤渦し、迂折して奔る、葡萄より青く透れる水の、木片を噛みて沸きかへるや、白鷺躍るがごとき泡沫を噴き、石に觸れて鏗然たる響あり。行く路は、朝の如く、瘴の如くなる小山を負ひて、眼下に急湍を瞰る。

多摩川海苔賣れる氷川橋畔の一茅屋に憩ひて、密柑を購ひけるに、蠶豆よりわづかに大なるもの、一個一錢、皮を剥けば、肉は敗絮の如く乾からびて、酸味だにあ

らず、山中食を搬ぶに、便悪しければにや、總して高價なり、今鐵砲にて撃留めたるらしき雉三羽を柵に吊したり。羽はちと用あれど、肉のみならば賣るべしといふ旅の身に欲しくもあらねば止めつ。

橋を渡れば左に氷川神社を祀る、右に日原道岐れたり、日原は秩父の峻峰に連れる僻阪の地にして、皿道峻しく牛馬も通はず、他村よりこの里に入らむは、往くも還るも、逢阪の關ならぬ一筋道のみなれば、盜賊の患なく戸を鎖さずと誇る。山上の雜木を伐り倒し、やゝ乾きたるをりを覗ひて焼き拂ひ、その跡へ稗、粟、大豆、蕎麥などを植うるに、糞培を待つことなくして生熟するより、焼畑の名ありとぞ。男は山に入て木を伐り、炭を焼き、女はそを俵に造りて、一二俵づつ背負ひ、氷川まで下りて歸ぐなり。この村には大日谷の岩窟ありと聞けど、こゝを距ること二里あまりなれば行かず、橋下、日原川の末流、多摩川と合するところなれば、水音喧すきこと、犬牙錯綜せる危磯を搖かさむばかり、春の日永の暖き蝴蝶の夢を覺ますに足りぬべし、氷川は日原、小河内、青梅の三路交叉せるところなれば、人戸も多く、木

履、白箸など、山中の材木より造り出せる品をはじめ、青菜を齧ぐも見えたり。

これより路益す窄く、仰き視るかきり、北は名にし負ふ秩父の山郷、浦山名栗は列障壁を作りて兀爾たるその頂き、雪白天に參し、南は境、檜原の山ついき、坡堤の柳のそれならぬに、松、杉、檜、梅、栢、榎、白檀の良材、雜糵して天を刺せるが、川を隔て眼のあたり見ゆ。崖に沿へる皿道、片日影うすければにや、昨日ながらの雪溶けずして、堅きこと張りつめたる氷の如かり、いくたひか既らんとして、辛くも踏み止まりつ、炭俵負ひたる馬の手綱かいとれる男と挨拶して友となり行く、旅は樂しきものにこそあれ、乙女がかさす驢籠の扇、いつまでか玉匣の中に藏せらるべき、たをやめが曳く簇蝶の裾、今はた金泥の色褪せたるをいかにせむ。犬の吠ゆる竹戸荆扉、そこに何巻の詩あり、鶏鳴くなる石田茅屋、そこに幾軸の畫あり、野衣には蔭葉を裁し、山飯には松花を晒す袖人の生活は、げに鄙びたれど、樂しからぬかは。我や、一たび都門に入りてより、粒米に追はれ、東新に迫られ、あらはには小兒の如くに、平和を装ひて笑へども、陰に白刃を礪きしこと、いくそたび。

所詮正覺はおぼつかなき我なり、むしろ大俗に墮して名利の狗たらんと、嘆患の焰、
苦雨凄涼、胸安からざりしげふこのころ、山水吾累を成す、一に何ぞ酷だしまで、
おぼえず涙下る。

小河内まで一里の急湍、山盛りて水吼ゆ、崖の嘴、灌木生茂りて人馬をかくすよ
と見えけるが、頬冠りせる手拭の白きより先づ現はれて、夕日に向ふ人の顔猿より
赤し、水旋折して躪のごとき石を洗へるを踏きて、虹のごとき長橋の、わが脚下五
尺ばかりの崖腹に懸れるを、薪荷へる山賤の家世にやあらむすらも、晚れ咲きの梅
を、手折りて渡りけるが、欄干に杖を觸れけむ、雪籠二三片、風に伴はれて瑠璃の
もてを掠めしが、おはや氷肌を濡く水に葬られたんぬ。

小河内の鶴屋といへるに宿す、他の旅舎は戸を閉ぢて人のけはひなし、川に面し
て新築せる二階の一室に導かる、壁も粗く、屋根裏は木を伐り組みたるまゝにて天
井板を張らず、まばらしく、川を覗みて沈黙せるごとき我は、さながら枯木にひとし
かりき。

丹波山を踰ゆる記

煎餅布團の温とい心地、放れどもなけれど、吾家ならぬは、庭の紅梅に來啼く鶯
の聲も聞えず、やをら立上りて障子を開くに、露を含める青柳は、二三本纏れて欄
干にまだれかかり、絲より細き春の雨、未だ新らしき張かへ傘に音訪れて、裳か
げたる村の乙女、手桶片手に提げて行くおと、二の字の下駄の齒、泥に深きは宵よ
り降りしきれるにやあらむ、けふは終日、句など考へてあるへしとあもひしが、そ
れも暫し、雨收まりて雲の脚を遠くの山にとめしが、やがて雪となり、ほうけし菜
花の舞さが如くに降り來ぬ。これほどの雪にぞち怖れて、大菩薩峠踰されぬものか
と、俄に草鞋を着くれば、今一日御逗留なされ、山は雪で通られませぬばと、宿の
女が眞心こめて諫むるをも肯かで、傘一本を頼みに立出でぬ。

原より河内まで、多摩川の眺め、昨日の路に勝れるが中にも、赤松あもしろき崖

の上に、さしやかなる石祠を祀れるは、蓬萊山と唱へて、旱魃のとき、土人雨を祈るなりとぞ。水は石根を洗ひて、蟬の羽の一重より透れる。秋にはあらねど肌寒ければ、急き足になり、崖上をさすらひて、これより花もなき山中を踏み分けんする我や、送り火のあとに映れる影法師の寂しきもかくや。

鶴野にて郵便切手の賣捌所の看板かけたる家を訪つれ、印紙賣りてよといふに、無しといふ。立去らんとせしに後より聲かけて、一枚ばかりありといふ。昨夜認め置きたる手紙を投函す、毎日正午に一回開函するのみなりとぞ。

路は愈よ高くなりゆきて、川底を眼下に瞰る、このあたり畑多けれど、葉の花の黄なるは見えす、水は飛瀉奔騰して雷のごとくなるを、吹雪巴と狂ひて過き林より、一白瀬れ墜るや、水煙颯ること高く、飛沫は葉を篩ひつくしたる雑木にさわきて、雀一文字に飛びゆく。一老婆に遇ひて路を問ふ、甲府に二道あり、一は小菅道とて昔は大菩薩峠を踰えて通ひしなれど、今はその麓に沿ひて新道を築きたり。一は丹波山道とて、始終多摩川の上流に沿ひて、これも新道を拓きしなりと。後の方、や

や遠けれど眺望はすぐれたりといふ、先を急がぬ旅にしあなれば、遠くとも丹波山道を撰ひてこそ風流ならめど、丹波山にかゝる、これより甲斐國なり。

窅然たる深壑、流れ愈よ急にして、崖は肉を削られ、骨を露はし、峻刻高く聳へたる下を、白蛇のごとくに溯洄せる水は、目も遙なる底に蜿蜒として、草をも木をも、その舌に舐らすんは止まじとぞおもはれける。山路狭くして屏風を繞ぐらせたるごとく、満屋僅に一戸ありたれど、こゝにも赤子の啼く聲せるは、仙客の藥を練るところにはあらじな。さるほどに、人の罵りわめくけはひ、雷ならずと見えしが、泣くが如き笛の音聞ゆる間もなく、雪を蹴立て獵士一人、章駄天走りに駆け來れるに遇ふ、何なりやと問ふに鹿を撃つなりと答へて、姿は早くも雜木林に隠れて見えすなりぬ。

阪いくたびか、曲折して爪先愈よ上る、危橋川に架すること凡そ十五六はありぬべし。そが中にも、親川橋に佇立したるとき、急湍濤々、石に激して板屋にたはしる霞のごとく、衣袂を濡ほし、山嵐横さまに嶺上の松を掠めて山鳴り谷應へ、落花

にあらぬ雪の粉を吹くや、雪達磨のそれにはあらぬぞ、骨は舍利と淨化して、この山中に真皮袋を白盡せむかともはれぬ。

午に近きころ、雪はやうやく止みにき、獸の吼ゆる聲いと凄きを聞きぬ。狼にあらぬかと疑ひしが、耳を澄ましてよく聞くに犬に近し、犬にもあれ、人に蓄はれたるものならずは、咬まぬともいひがたし、人戸もなき山中、まかも語らふ友なき一人旅なり、要こそあれど、護身の短刀を袖にして、油断なく進み行きけるに、犢牛はどなる牝犬、つと走り出て、今にも躍りかいらむさまして、聲高く吠へぬ。すはやと降めく胸を鎮めながら、睨み合ひけるに、人の還音近きて犬を叱る聲す、立出たるは獵夫なりしが、我に會釋して犬を曳き去りぬ。眼いて一二町ほど行きけるに、今驟ち留めたりとおぼしき大鹿の屍を峠道狭しと遣はせながら、雪に閃く山刀振り上げて獵夫四五人ばかり、まどるしてその肉を割く、くれなるの雪凄くもあるかな、前に劣らぬ大さの狗ども四五疋、おのが功に誇り顔に、喘きながら尾を掉り來りしが、我を視るとひとしく競ひて吠へかゝる、容顔頗る猥惡なり。

このあたりの洞窟、拳石をもて屋を覆ひたる茅屋七八戸を瞰たり、獵夫の起臥するところなるべし、屋おまりに高くして流緩なるか、急なるか、水聲は耳に入らざなりぬ。只た深碧の色ののみあざやかなり。

山を下りて丹波山村に入る、こゝは甲斐國都留郡にして、武州河野を距ること山路四里なり、摺鉢の底のごとき土地にして、山嶽塙を圍みたれば、朝は日の出ること遅く、夕は没すること早し、霧常に深けれど、水田はいと少く、燒畠のみ多かり、郡内織に名の高きところなれど、この村は男女只た山持ぎをのみ専とし、わづかに太布を織るに過ぎず、古より甲斐に編入されたる土地なれど、何故か、このほどりは別に部落を成して、他郡に交通するときは『甲州へ行く』といふこと、さながら他邦の人の如しと。元祿中、岐路に建てたる石標に『是より左、甲州道』と刻みおかしよし、松平定能の撰せる『甲斐國誌』に見えたり。

郵便局と、旅人宿と兼ねたる家にて晝食認めけるに、葱を交へたる麥飯と、別に乾からびたる鯛の目とし三頭を膳に添へて、これは客人のために、特別の馳走なり。

といふ。喉に通らねば一錠にて善を棄てぬ。この村より、鹽山の鏡泉まで五六里あり、その間に落合、神金などの荒村あれど、柳澤峠の險を越えねばならず、橋は墜ちたりとも、繕ひたりとも噂すれど、とにかく路なきことばあらざり、されど雪の積れることは、今までの路にも倍して多かるべければ、けふはこゝに宿りたまへと勧められたれど、肯かす。草鞋は旅人の甲冑なりといへる曲亭翁の言葉をちもひ出て、二雙はかり購ひたるに一雙は信州草鞋と名けて堅固なるものなり。一村凡そ廿戸ばかり、朴訥仁に近き里人の、毎戸言ひ合せたらむ如く、杖よ、懐爐灰よど、知らぬ他人をいたはりくれたる辱さ、氣を注げて行かつしやうと、我を見送る老若の、情けは羽織に散りかゝりたる梅の葩より拂ふに惜しく、親切はこの村に流る、丹波川の、水の色と共に骨に浸みて忘れがたし。

火を戀ふ青蛾は燭に焼かるといひけむ、見ぬ柳澤峠の雪景色にめこがれたる我は、この日一生涯に又あるまじき辛き目にあひたりき。

昇 仙 峽

(一)

行李の中に地圖二三枚を藏したれど、風土記一部携へたりしところかき、雪降らぬうちにと急くほどに、武田信玄の菩提所なる惠林寺を、草鞋の底の地つゝまの、そことも知らず鹽山より幌馬車に乗りうつりたる不覺は今仍忘れられず。鞭下ること茶碗に落つる箸よりも繁くして、骨立せる瘦馬の嘶く聲、天目ちろしに吹戻されて腹に沁む。膝を埋めたる乗合六人、いづれも罪作らざるはなかりける。

日下部より笛吹川をわたる。鹽山の磯といふはこゝなり。愛らしき小松五六本、蒲伏して、さゝがにの絲を流るゝ水にからめる、相摸の酒匂川に似て、水の潔らざるが劣れり。路に猪の肉を吊しあり、一昨日の丹波山越えもちもひ出られつ、隣りて座せる商人らしき男に話しかくれば、我も用ありて米川まで旅せしとき、雪に降りこめられて、かしこに九日許逗留せしことありしが、やうやく人足二名を雇

ひて路を拓き、山を下りたり、そのときの無聊、獄中の人のごとくなりしといふ。
甲府の入口、酒折にて八王子街道と合す、城屋、和田平を過きり、山田町にて馬車
を下る、名さへ床しき柳町櫻町には離の市賑ひて、車鬧しきまでに轎を列ね、練り
ゆくや鄙珍らしき花の一簇、山國ながらさすがに都の寛濶はありけり。柳町の遊廓
は俚言に『山』といふ、信玄の城ありしところ、土地の高きをそのまゝに、呼びな
らはせしと、口紅馨る艶女の舌に昔がたりを聴く人もありとか。

こゝに恵林寺を尋ねて、今來し路を四里戻らてはと、知りたるとき、そゝろに木
曾殿と背中合せの寒さおぼえたる古人の風流羨ましく、幸うすかりし吾行脚や、遙
に古人を訪ね來て古人吾夢に入らざりし。石塔は涙の偶像とかよ、縁あらばせめて
は、形ばかりの土饅頭へなりとも、一杯の關伽水手向けて、この水願はくは地下の
白骨を潤せかしと祈らましを、それもよしなし、鬮體に肉つけて小町、案山子に弓
持たせて與市とはならぬものを。あはれこの公と豊太閤と一たび逝きてより、坤輿
を呑むの氣永へに餒へぬ。金扇馬標關ヶ原に眩ゆきときや、大阪城の豊にさす日の

影うすく、世は花の都の大江戸に徳川の流れ酒れぬべうなりては、ぞべらくと京
男めきたるが俄に多くなりぬ。余の二公を想ふこと久し。かなたの空に向ひて菅笠
脱き、恭やしく小腰屈めて去りぬ。

甲府城趾、今は獄舎となれるを右に視る、風あもむろに殘濼に枕せる松をわたり、
遺の骨をその狼藉せるまゝに詆ふり、やがて一味の温を黄葉花に吹きつくれば、蝶
の羽脆しといふと、春を載せて飛ぶこと輕し。即かず、離れず、蝶に伴ひて上府中
の癡墟に入る。信玄の在はししところなり。あもひぞ出づるそのむかし、衣手寒き
秋の風に、葦毛の駒の鬣吹き分けさせ、星を閃く白銀兜、霜と牙ゆる金塔の大刀佩
き、威風あたりを靡かせたる新羅三郎が末裔、武田家一門の若殿原、この陣營につ
どひて軍の門出吉かれと祈りたる、今まのあたり見るやうなり。天正九年、勝頼城
を新府にうつせしより、今は僅に壁遺石壁をかたみに存するのみ。斷腸の館といふ
名はありながら、滿地錯落の寶劍玉鉞、いつ誰か手に掃かれたる。春やむかしの春
ながら、いかなれば人のみぞ、かくは常なき、柴焚く煙に塗られて、あやしきまで

に煤無き軒先に、いと古びたる行燈掛けたるが、『そはうんとん』とぞ讀まれける、
哀なりき。新府もその翌年三月、武田氏亡ひて再び大菱の旗を見ざりき。今の都な
る甲府は、文祿三年、邊野長政が古府の民戸を遷せしに盪蕩せしどか。土人のいふ
『太閤繩』も、そのころ打置せしとき、張りしなるべし。
疎林を穿ち、草澤を渉り、行くこと猶半里、野中の細徑に藪屋四五戸、食の家
にも佐保姫は宿りたまふよ、廁の垣をかこみたる荒蕪に、白梅の瓣舞はれかゝりて
螺鈿を散めぬ、このどころ小便無用と立札ありたかりし。

(二)

暫くは平沔の田疇に沿ひて和田村に入り、和田峠を上る。削れる壁の中腹より、
根こそぎになりて、嵐にたふれたる松の路を塞げる、さながら巨蟒の横はれるかと
見えて、髮墜つおもひあり。

磯碓の石漕を踏き上れば『ひばり鳴く中の拍子や雉の聲』と、翁が句を彫みたる
塚のほとり、こゝ甲府を離れて山中に入るの門。やまら手を幌子に加へて、ふりこ

け見れば、あらあもしろの眺めやな、笛吹川や富士川や、田疇墟落、瀟茫幾里の間
を汪洋として流れ、峽中の十二岳嶺峭高聳、峻峰雲を截り、崇嶽天に接す。凝眸多
時、余今にして初めて長安名利の境を離れたるを知りぬ。

桃の節句とぞいふなるこの月、空は氷のうす板を張りつめたらむ如く、どうでも
ひきは雪なるべしとおもふものから、いづれかといへば、性來餅好む余の、村醜一
酔の暖買はむ由もなし。初めて和田峠を仰ぎしときは、これより山又山と疊なりゆ
きて、御嶽はその奥にこそと、おもひるたりしが、頂にいたれば田懸平曠、鄙ひた
る予守頭をへ聞ゆ。路やがて二岐す、『左みたけ』と石に標す。阪すこしく下りて千
代田村のはづれ、さゝやかなる流に水車しかけたる民家を訪ひて御嶽へ嚮導願む。
主人は畑へ行きけむ見えず、こさかしげなる童一人、爐に櫛をさし燻へ、釣竹に古
びたる藥罐をかけて湯を滾らせるけるが、余送らむとて、手早く杉の太箆にて火を
掻き消し、隣は林より行き抜けの畑なれば、留守願まむ人なきに、戸を引き寄せた
るまゝ、鏡一つ御さぬも、山家の長閑さよ。

家の左に一山あり、頂より麓まで飛びて塵き砂をふり蒔きたらんやうなり。俗に半僧坊の白山といふとぞ。何やらむ岩の名あるべけれど、地質學初歩の一冊だに、よくばえ讀まぬ余なれば知らず。白髪に縁ある高砂山と、まことの名を知りたるも後のことなり。

猿より捷き童を先に立て、さして潤くもあらぬ岨道を、城山の三本松よりおぼつかなくも通りゆく。左へ折れなば吉澤製絲場に到らむといふ岐路を捨て、直ぐなる路を、自然斜の谷に向ひて下る。摺鉢の底に入りしとおぼえけるが、又爪先上りとなりて、岡いくつか超えぬ。仰き視る甲信の奇峰、高低一ならねど展張障列、吾身は危欄一曲の中に入りぬ。もし空新に霽れて紅暎うららかに昇るとき、香波撃け出す白玉の芙蓉峰、璀璨として彩雲に閃き、屹然群山を挺て天地の心に處るときよ、あはれ崇高の極、純潔の致、いかなる天才も蹇澁をおぼえざるはなかるべし。この日、山は蜀道を圍みて雲縷を籠むといひけむ、淡墨にて皴法を拂ふる雲は、漫々として大空に漲り、山をも野をも吞まむすけはひなれば、なまじひに花に振り曲けて

見たき悪太郎の心より作りもえぬ悪詩を拈らざりしぞ、こよなき功德なりける。沿道一帯の林、松杉栗樺いづれも骨を剩すばかりにて、掌ほどの平地に萌えてたる嫩葉、それもこの春の雪に蒸れて、露を挽きたる痕に一すの青を殘さる、胡地もかくやと敷ひしけれど、さすがに雜木の蔭に柳の絲、島々として眉やうやく舒ひたるさへあるに、谷川に危く架けたる板橋の下、藪の莖の花しほらしく白く咲きて、一片の塵に汚れぬたゞとぞ、かくてこそ片山里の春も捨てがたくて。

荒川遠く見ゆ、余等の林蔭に入るとき、低くなりて失せぬ、再び現はれて又かくれぬ。再折蛇行、天神平といふ荒村に到りぬ。御嶽の麓にして人家僅に二戸。紅の梅、柴の扉にさき亂れて遠くよりは桃と見紛ひし。茅の檐端に吊りたる繩腰籠を潜りて草鞋ありやといふは、賣らすといふ、たゞし手製の草鞋二雙あり、欲しくはこれなど持てごんせと投げ出したる、いかに鹿や猪を友とする山住居なればとて、手飼の狗と一つには旅人を見まじきに。

これより御嶽まで二里の間、わかれ道はなしとて、おぼはとて鏡與へて童を

返す。

飯を乞ふ、齒に粘くのみにて、ひたすら腹に應へざる悪米ながら、確に米なり、昨夕、多摩の清流に沿ひ、山傳ひにて甲の丹波山に入り、それより柳澤畔を踰ゆるまで六里の輮道、雪に惱みて凍と餓と並ひ到りたるとき、藪は土堤に萌えたれど手は延ひず、鹿林より跳り出たれど腰起たす。淡雪の息一つ吹きかけて消ゆるが、そのときの吾命なりしが、余は神に謝す、佛に謝す、やうやく木挽小舎を認めて命と共に匂ひこみ、旅に道違なけれど、世に情ある翁にいたはられ、溺れて藪に縋る人の心を吾知りぬ。そのをり乞ひ得たるは、麥に芋と菜をよきほどに交へて炊きたる飯、生れて甫めて野味をほそけるが、それに比ふれば、酸くとも豆腐一握、臭くとも野菜一撮、苦くとも醬油一皿。行き暮れて宿かる頃や、草を枕に花を伽なる風流は、及ぶべくもあらぬとも、木賃宿に青漬と共に、砂交りの粥啜りこむほどの苦しきは、かねて覺悟せし身の今更に食撰み、をかしけれど、少しはこの方佳味をおぼえし。

(三)

御嶽へ上るには新舊二道あり、吉澤村の北方に峙立せる羅漢山を踰ゆるを舊道といふ、一山凡て怪岩奇石の接續せるもの、分れて二二三ノ嶽、彌三郎嶽、鷲ヶ峰、金剛峯の數山となる。石の名を得たるは、坐禪石、寒山拾得石、鐘架石、大日石、鞍掛岩、兜岩、籠岩、威な形によりて名けられしなり。南方の山腹には羅漢寺あり。一千年以前の古什と稱する五百羅漢を安置す。荒川の沿道(新道)より瞥見するを得るもの、羅漢山、寒山拾得石のみ、鞍掛岩は全く舊道を上下せざれば能はず。新道通してよりは舊道全く荒蕪し、野鹿嫩草を啣へて去るに任かすとか、今も猶叱々馬を這うて野花一路、晚風に小唄を低唱するもの、ありやなしや。

新道は始終荒川に沿ふ、余がこたび旅行したるは、むねとこの路によれり。水の土を齧む、年を経るに及びて益す甚たしく、脆弱なるは凄然として折裂し、岩となり石となりて轉輾水中に覆没し、堅緻なるは踰厲峻斜、嶮となり崖となりて轟々水上に豎立す。望鷹石、猿岩、五月雨岩、鏡石、瀧見石、鴉拔石、天狗岩、浮石、屏風岩、重窓石は岩石の最も瑰奇なるもの。長潭、轉輾瀧、不動瀧、雪虹瀧、仙娥瀧

は水の最も豪壯なるもの、袖磨山、髭磨山、鷹巢山、羅漢山、覺圓峰は山の最も跌宕なるものなり。塵は朱門に堆き都を去て一盞の笠、一雙の草鞋、飄縱放浪遠く峽中を訪ねたるもの、實にこの御嶽と富士川あればなり。時なるかな行脚の下駄は塵みつきとなりて、人淺草の凌雲閣を説くけふこのころ、斧斤林に入て山は夷けられ、野は緒せらる。人煙幽かに颯るところ、巧偽日に遠くなりて狂ならざるもの狂を退ひ、汚れざるもの亦汚ざるを遣れず。只た純潔なるものは大自然のみ。人世蹉跎多し、他日白頭を抱へて秋風草堂に泣くの日や、願はくは書を焚きてひとり此山中に入り、農民に伍して永く耒耨に従はんかな。それも可ならずは、かの靈臺到らざる石上に寂然跏趺して涅槃の境に入らんかな。

(四)

一二町行く、水音いと高し、すはや荒川の見ゆるぞと急ぐ。一山俄に吾頭を壓す、仰けは伐木丁々の音、雲の中より微かに聞えける。山船木魅の叫ける如くに。

荒川沿道の景、何ぞ太た奇なる。路の右に當り、大石高きと十丈許なるが松を載せて

時てるを潜りて行けば、川の中の石は、吾眼にもそれと知らる、花崗岩、鯨の如きもの、巨砲の半より折れたる如きもの、鐘を懸けたる如きもの、土を蒙り松を載す、風を截て聲あるは松か、水を彈して韻あるは石か、石の中にもいとあもしろきは、一方は太くして高く、一方は細く低く、その間の窺みたる、さながら巨蛇の頭より頸に至るまでの形して、高さは凡二三丈、長さは七八丈、熊笹や雜木や生茂りて鱗とも見らるなりけり。

二三町にして今まで窄かりし路や、拓けぬ。石多くなりて嶮峰磊砢、水常増して佩環曼玉、石の頂凹みて溜水滲へたるも奇なれど、こゝより奇は石のみに止まらず。對岸の山、危嶮犬牙錯綜、緒く飛けたるは菩薩の大頭顱小頭顱、互に觸れて下界に臨御したまふとほほしく、その崖の腰には斧皴波より劇しく、鬮體二三十、頭を列ね齒を剃き出して大呵するさま、この川の名の荒きにふさはし。

やがて路の右、松の根を石に托して倒まに遣へるを、踏みて進めば、左右の山俄に逼仄して路こゝに窮まる如く、松の皮赭きもの、玄きもの、水を擁し石を抱きて

項背相臨み、石は郁蘭翠竹糾紛之を纏り、綠苔紫蘚、披拂之を蓋ひ、長きは髻、短きは鬘の毛に似たり。

左の方に山を仰げは、これも大石と小石と、親子危きを扶けんとして互に抱きながら倒に墜ちんとするを、向岸の壙の如き山より高く聳へたる一本松の、手を戟にして呼ぶに似たり。

猶上ること六七町、水の急と石の奇と少しく衰へ、只た傾斜せる山崖のみ、ひとりその奇を擅にす。このところ灌木繁くして、葉は去年の風に振ひ落されたるまゝ、嫩きは芽まねど、水音のみを人の耳に送りて、姿を遮れるがにくし。

一回又一折、先の水と石とは遠くかくれて、新らしきが露はれぬ、石の起伏せる間を右に衝き左に當り、壁下に奔流する水は、櫃を傾けて千斛の白米を注きたらむとあほしく、泡沫沸々、兜率天の宮女曾てこゝに冰肌を洗ひ、脂粉溶けて流れて水愈よ清冽晶明となる。行々碧水を透かして底に視る無數の小石は、鮎の群を成して泳ぐとも見ゆ。垂簾のむかし、子子を溝に撈ひたるをさもひ出て、夏ならば衣を脱

きて、潏然水に没せむものを。

山は次第に高くなれども、雲は馬の鬣より生ずて急阪にはあらず、爪先仰きなれば振袖の女子にも易かり、一二丁の間は全く水と離れ山亦奇状なし。殘雪扶疎、谷の間、岩の蔭に白き山百合の花咲き初めたらんかと疑はる、路に墜ちたる石片々皆これ花崗岩、白理礫たり。

このほどり躑躅の名所なり、紫の花最も多し。初夏青葉がくれに咲き出づるころは、京都の子女が嵐山の櫻花に世の營みも忘れんばかり、帯よ小袖よ化粧に永き日を浮かるし、それとは比ぶべくもあらぬと、甲府あたりの老若、過ぎにし彌生の春を再びこゝに呼び戻す心地して、轎や車や息杖や、蹴返す裾や紅の、川に映りて時ならぬ紅葉を水底に沈むることもありどか。そのころは群樟青を紫ひ、蒼を繞らし、懸崖峭壁、花木綺錯する奇はありながら、赤條々たる山骨を、斧劈の痕明かなるまで露はすこと、今の眺めに劣ること遠し。長嘴短角、些の酒飾を加へずして自然のまゝ、凸兀斗出せる何百枚折の大扉風を展開するは、秋風立ち初めて眞葛の

そよぐころより、冬衣猶戀ひしき春の初めに至るまでを佳しとす。今やその時、天の冥霜を融れたまふこと厚しといふべし。

路に當り、柴を折り換めて土橋を作ること一二にあらず、落葉堆くして踏めは較々聲あり。行々仔細に石を觀るに、水中に峙てるものは洗はるためか、掃かるためか。いづれも禿頭ならぬはなれども、路傍に突兀たるは青苔濃かにしてこの寒さにもめけず針の目ほどに白き花を着けたり。短兵孤城に嬰りて勁節を守るとやいはまし。冬は踏まれて消ゆる霜の脆きが中に、春は觸れなは落つる花の命短きが中に。

これより川に沿うて巨巖大石、或は二三十、或は七八十、上下縦横互に捍闘する奇觀は一々説かず。

訝かしや、かしこに茅葺の屋根の見ゆるぞ。この山中亦人家あるとちばえたり。咄、近頃は香眼已を欺けり、や、平坦なるところを選みて、石には無盡藏なる山中のことにしあれば、能きほどの形積み疊ねて堤を築き、畑三四反ほど作りて麥の種

など蒔きたるなりけり。更に奇なるは、前に登へたる石山の半面、削るがごとく急なるところに何やらむ蔽えける。畑は極めて匿しければ、一撮の土も容むなるべし。余はこの畑の中に起臥せる石の形、老狼の跳きながら半は首を掻け、寒山枯木を睨みて吼ゆるが如きものを眺めつし、阪を踰ゆれば畑の主かや木守かや、向岸に狗小屋ほどの人家を認めける、炊烟の軽く颯りて林を罩むるは、人住むとあほし。屋は茅か、あらず。瓦か、あらず。板か、あらず。小石を秩序なく盛り上げて雨洩るを禦きたる、かの奇を凝らしたる亭榭などに蠲殻もて屋を蓋ひたるに似たれど、作らぬどころに風流あり。况や石は荒川の晶明なる水に絶えず琢かれたるなれば、玲瓏なること珠の如く、燦爛たること貝の如くなるをや。あはれ神は蠶より絹を吐かしめ、木綿より布を織らしむ、人自ら貴賤を定め、尊卑を別ち、各ふさはしきものを取りて表る。その貧しきが故に、恣に天の恵に浴することを得ずといふを休めよ、この石頭たり、背へて永住の水底を去て薇採る乙女と薪樵る拙夫が住ふ賤が伏屋を飾るもの、天いづくんぞ山中太古に似たる民を棄てんや。而して桂を炊き珠を焚く

てふ貴人與からず。

石畑を見捨てつ。川に對して、をりしも翼は水に觸れなむはかり低く飛び來りたる鴉の、松の小枝を掠めて何やらむ隊み去りたる愛らしさを眺めつ。一板橋をわたる。暫くして右の方に碑あり、半截して草叢の中に仆る。擡け起して熟視するに、これは是れ、この新道を開鑿したる農圃右衛門の像を彫めるなり。結髪のお漢、羽織袴に端然拱手したる半身像、俠骨まさしく活けるが如し。林鶴梁先生の讚あり。をりしも雲疎林を掠め去ること急に、巖巒風氣を孕みて風物凄其、絲遊のどけき春日和どはおもはれず。願に行く先の急がるれど、この山に遊ひてこの人を傳へざるは、地を穿ちて骨を獲ざる恨めれば、手帖取り出し、「一寫し了る。

手足胼胝。

山研谷割。

廻關便道。

廿稔志達。

馬走輿丁。

歌頌嘈噴。

今諸斯像。

醜面若魍。

慙也普濟。

心背菩薩。

嘉永辛亥六月鶴梁學人贊

急に九回せる路の二に別れたるを、左に隨ひて下れば、阡嚙何の鬼工か匠くみたる、何の神斧が刻みたる、一大絶壁。

(五)

只た觀る、觸るれば滑かなること溶けむかど危る、龜甲の如き巨巖、水に浸したる根は白く透りて水晶の沈みたらむ如く、水を凝て昂く屹立せるところは琥珀の黄、色少しく覆せて見ゆ。石層は棟梁を擡め、檣樓を列ね、あつから六角の稜を削成して、刀痕斧劈、松の根を包みながら縦に布き横に走り、斷岡や樅の木や、その他の雜木とく、生茂して、青苔寸々鬚の毛ほどに見ゆれども、肉は瘦せ骨は殺け、雨鏝雪刻全身殆ど完膚なし。聞くならく旅遊に老けたるものは、畫圖の天空を觀ても某國の空なるを悟り、山岳の皴皴を眺めても某地の山なるを識ると。余は畢生この山を忘ること能はず。忽ち路俄に回みて山角吾肩より生ずるとおもふや、脚下の

水勢奔騰飛瀉、砲を列ね刃を植ゑたる如き石の城廓を衝き、呼聲山岳を震撼して萬馬互に嘯む。一棧の路、その山腹に突貫すれば、太奇なるかな、山は二分して右なるは尖りて瘦せ、左なるは圓顛にして豐潤、一は赤松多し、形は閻羅大王の笏を振つて立つ如し。一は雜木のみ茂れり、姿は寶都靈尊者の手を拱きて座せるに似たり。所謂覺園峯是なり。これより橋一つわたり、大蛇巨口を開きて生ながら人を呑むとき小暗く狭き路へ、我から身を入れ、その舌を渡りて喉頭に出つれば、山は機牙重複、奔るか如く、伏すが如く、神驚鬼奔、おのづからなる風致を備へ、懸崖絶壁、振盪展列、直立するは柱となり、横臥するは床となり、白雲を帯ひたるかど眺めたるは水、青靄を横へたるかど望みたるは石、石はどころく松を孕み、松は欹斜して水を探る。水は千疋の練綿を拖曳して霽爛せる石層を剝き、疎鬆なる土壤を洗ひ、倒注四迸して、嶮へは新に匣を出てたる氷刃の帛を劈く如く、俄に雲を破れる。雷電の山に震ふ如し。その色皆青靄、幾十箇の印度青を纏ちたるより濃やかなり。右に當りて山の高大なるもの、懸崖を斜に傾けたる如く、巨松之が檜となり、石は

砲となり、雜木は銃となり、僞僞して水と揮灑す、崖下の水聲、鏗々然、轟々然、咆哮雷の如し。

路愈よ迫る、何等絶大の奇觀ぞ、青き石、白き石、尖れる石、平たき石、斜に水を泳ける石、腰を沈めて脊のみを水上に露はせる石、一應接に忙はし。余はその石の坐するに宜しきものを選びて踞せしが、肩背へて木偶の如く、搦きたりし膝の上の掌は、鉛筆と手帖とを載せたるまゝ、いかにせばやを知らず。肩毛爪甲の微、蟻塚蜂房の細、よしや余に精しく之を描きわくる手腕ありとするも、只た造化が粗鑿のまゝ、無邊の大虚空より陶渺たる下界に向ひて抛ちしこの石、轉はせしこの山、爾人間、夫れ之を奈何せむ。

已にして第一の石門なり、何物の天魔が抛ちたる、五丈ほどの巨石山上より、倒に墜落するときしも、同じ大さの石、川の中より跋ひ上らんとして互に撞撃し、兩ながら倒れす傾かず、相支撐して暫く凝立せるさま、右彌那羅延金剛と、左輔密迹金剛と、二王力を角して決せざるより、雙方對峙して敵手の虚を狙ひ、間一髪を容れ

さるに似たり。旅人はその腹と腹と幾と觸れなむとして、罅隙を存するところを行く、その下十人を起臥せしめて猶空席あり。行客、花崗岩の雪の如く素きを奇貨として廻するもの多けれど、惡嶺この山に生へる雜木の、石に押されて曲り拗りたるといつれ。

石門を出つれば水沈澗して蒼古、深さ幾十仞なるやを測られず。このほどより石垣を路に築きて、橋を向岸大佛の結跏趺座せるに似たる山の脊に架す、水急なれば柱を支へず、松の丸太を崖の腰より橋の中腹まで、斜に絞にて打ちつけたり。昇仙橋とはこれなり。

橋をわたれば壑を鑿つこと、四字を縦に立てたる如くにして僅に旅人を通す。字乳の懐といふところに仙娥瀑あり、路の右に當る。高さ一丈濶凡二丈、峭壁より三段に流れ墜ち、飛沫は毳となりて跳り、水烟蓬々、消えやらぬ野火のけぶり青くなり、白くなりて殘月に映るときに髣髴たり。

(六)

路亦急に上る、路を梗塞せる巨石の一を巧に鑽りて第二の石門を作りぬ。素より人工の雕刻に成りしものなれば、之を第一の石門の壯大にして自然なるに比ぶべくもわらぬと、さすがに見榮惡しからず。仙娥瀑より以上、水狭くなりて石磊阿、樹も稚きが多く、山のみは舊の如かりけれども、登るに隨ひて、それすら削小言ふに足らず。このあたり芝原多し。字猪狩の里といふは山頂の寒村、鐵荷ひ鋤乘るは少なけれど、銃を手に山刀腰に帯ひたる獵夫は多かり。さてこそ猪狩とは名けたるよ。

宮本村まで入丁許登る。金櫻神社といふは廻廊勾欄いと古ひて丹朱の剝落せるが多けれど、柱盤の彫刻、近代のものにはあらじ。神樂殿最壯殿、拜殿正殿は武田太郎義信の造營なりといふ、境内神寂ひて何となうたふとけなり。日置流、道雪派が献けたる砲術弓術射的の額あり。この村むかしは千戸あり、社人のみにても社僧別當千日職神樂師年番神主小社家凡て神勤のもの百十戸ありき。維新の後いたく衰頹して坊舎は廢し、社人は農に編入せられ、半に減じたるを、明治十八年の大火に一村を擧げて悉く灰燼し、多くは下山して今はやうやく五十戸に過ぎずと。

華表の側に名物の水晶を置く、水晶山より探掘するなり。大黒屋といへる旅店に草鞋を釋く。若いもの七八人、爐を搦して村麴を酌みかはし、濁みたる節にて何やらむ樂しげに唱ふ、こは舊曆三月十一日より十五日まで、五日間催す祭禮につきての語らひなりとか。

二階に導かる、荒壁に無弦の弓二張をかく。何となうあそろしげなり。名物の蕎麥を煮めらる、味太た佳なり。獸肉の交れる何なるかと、少をんなに問へば、畏まりて『それは兎といふものです』と。こやつ、少しは青麩の生へたる男を見とどお坊さんにして退けしる。やがて飯したしむ、腥膻に上らざる、よし。

夜雨大に到る。かの若いもの晩くなりたれば宿るといふに、二ツ折の古屏風一枚を境に、背合せとなり、箆の中の縮もかくやどはかり、世にいふ雜魚寝なり。油臭き木枕だけは免れたれど、襟垢冷たき薄蒲團に包まれぬ。疊障りの荒き、藪を蹴るやうなるに、合宿の所、山嵐雨を伴ひて横さまに戸を叩く音、肌ちのづから寒けになり、おもはず齒を切る。夜半、頬髭秋の小草の如く荒れたる男、温袍頭巾に眼を

包み、藪繩の帯に山刀を横たへ、いつこより忍ひ入りけむ、泥脛にわが寝床を蹂躪したるを見て、あどろきけるがこれは夢なりし。雨猶止まず、櫓の水音いと高く、客魂そいろに冷へて睫を交へがたし。觀すらく、物の哀はこれよりぞ知る、旅。翌朝疾くさめたり、戸を推せば雨いづしか止み、殘星燈、御嶽の峰飛ひ來りて肩腫の間に迫る、男ならひと夜寝て見む春の山とは、さる蟲のよき女の匂なり。繩の緒すけたる木履を穿き、そいろ歩みず、深窓窓然、清爽の氣吟腔に溢る。風はくは颼々たる天風に駕して大虚空より颯細吹下、遙遠萬里を越えて三千州に飛到せむか。

宿の姫を招きて圓右衛門の事蹟を問ふに、何も知らずといふ。同宿の男いふ、猪狩の平吉さんどこに何だか書いたものがあるときと。例の僻出で、餘はみたる古文書もがなど、その人がり訪ねたれど不在なりき。之を村民に聞く、圓右衛門姓は長田、この猪狩組の豪農新道開墾の工事を起したるは文化年間にあり、本村より荒川に沿うて吉澤に到るまで二里の間、榛荆を闢き、岸石を置し、橋を布き、橋を架け、

拮据經營三十年を経て、天保十四年全く成ると。或はいふ、圓右衛門はこの土工に巨帑を抛ちたるため、晩年其産を傾け、殆ど衣食に窮するに到りしと。村に史冊なし、詳を傳へず、鴻爪雪泥、豈啻に南船北馬の旅人のみならんや。僅に山中の斷碑、寒烟荒草に鎖されて、皓髮黧頰の老俠をその故土に雕むあるのみ。因てあるふ、世に英雄なるものあり、叫れる刀を用ひて吾名を竹に彫む、竹朽つるとも依然として名を印す。世に仁人なるものあり、彩らざる筆を把て吾名を帛に記す、帛未だ古ひざるに杳然として名は匿る。余は英雄を以て大なりとせむ、高しとはおもはず。仁者は山を樂しむといひけむ、その山より高きもの、世に只仁人あるのみ。圓右の山を鑿する、名を售るためならむや、もし名利を以て斯老を累はすものあらば、そはこの峰の松風に耳を澄ますことを能くせぬ人なるべし。たい余少壯血氣、妄念常に火より熾にして抑ふ可からず。背くも緑髮一莖にして存する限り、紙を錐に代へて石を鑽するの笑はよし賂すとも鞭を以て、拳を以て、舌を以て、涙を以て、世の冷酷なる者と闘はんぞとす。斯老惑むべし、斯老を忘れたる村人惡むべく、甲人惡むべく、之

に類する天下の人皆惡むべし。耳あるものは鼎鑪も聽け、仁人長田圓右衛門の名を。舊道の景は、羅漢山の怪奇、鞍掛岩の挺拔なかくに捨てがたき趣ありと聞くものから、余は山陽の耶馬溪圖卷記に所謂「再遊不可期。將復湖之以諦觀之」てふ心より、再び昨日の新道を下りぬ。空霽れたり、山も水も石も樹も、けふは皆吾眼に新らしきものなりき。

鞭骨記

旅客もし笹子峠を下りて駒飼村に入れば、右に方りて一孤峰の聳ゆるを仰ぐべし、この山、東南は桂川の急流に臨み、巖崖十丈、桶を伏せたらむ如き巨巖掛竦、水を狹みて峙立せり。

地はこれ、甲斐國北都留郡賑岡村、山は岩殿とて、今は城趾も畑となりて麥の穂青く、そよ吹く風、蠶豆の花をわたりて、一村の翠樾にえならぬ匂を罩む。雲雀鳴く

のどけき朝には、佐野峠を臨みて武州路へ通ふ馬退ひの頃さへ、幽かに聞ゆる仙童
ながら、雨そ降る夕は、水露空濛、矢叫ひ関の聲今も猶松の梢に残り、誰が繫き
捨てけむ、空鞍の馬の嘶くと聞えたるは、水に留まれたる石の吼ゆるなるに、行客
天正の昔を想ひ、恨として心傷まざるはなしとかな。

城跡は小山田信茂埋骨の地、曇々たる丘上の塚、雨に打たれ、鐵に動かれ、哀れ
は長へに醒めましき残夢を逐々たる草に暖むるやらむ。その草の葉に置く露の命の
唯一時を、吾鍛へたる刀に吾骨を刺り、吾吐く息に吾唇を焦がし、蟲喰竹の風をも
待たで脆くも折れたるあるかは、世に汚れたる名の石より重きを荷うて、奈落の底
まで沈みたる小山田信茂にぞありける。

山一重にも城、川一筋にも廊、蜂の羽音にも弓に箭番へて蛇と睨へたるほどの世
に、この國は城廓を多く設くることなかりき。山岳は天の成せる城廓なり、草木は
自ら生へたる武器なり、之を守るに標悍桀驁の甲人を以てし、之を統ぶるに權變奇
譎の名將を以てす。三河の徳川、楚なれども首を俛れて去り、尾張の織田、傲なれど

も尾を掉りて来る。六十餘州、越後の健兒を外にしては誰敵すべくもあらざりし甲
州武士もまことや九石の誓も變きて久しければ折る習ひ、信玄の逝きてより、杯土
未だ乾かざるに金湯頭かねゆがしらに守を失し、敵は潮の寄せたるごとく甲信の境に充ちぬ。

さしもの四郎勝頼、新府を捨て走らむとす、真田信幸席を進めていふ、臣が色吾
妻、小にして狄しといへど、糧儲充剽一二州を擧げて來るとも禦ぐに足りぬべし。
臣が眷族亦一死を獻げて君恩に酬ひまつらむと。小山田信茂遮りていへらく、臣
が居城岩殿、山あり屏障を作り、水あり壘溝を穿つ、天嶮肩を躡ふものありとも
匿えず。願くはこのたび君を戴くの榮をたまはらむやと。勝頼決せず、之を長坂調
開、跡部勝資に詢る、同一郎の貉、觸るれば即ち手を棘するのみ。二壁いふ、信茂
は舊臣なり、昌幸は客將なり、譜代の舊臣を疎みて、一時の客將に征れたまふこと
やあると。竟に岩殿に據るに決す。嫡子信勝涙を揮うていふ。御先祖新羅三郎義光
朝臣より廿七代連綿たる當館あてぐらも、今は早これまでの運とほぼえ侍る、この期に及び
て安くんか之かむとぞおもひたまふ。無橋の鎧と大菱の旗を焚き、一門故殿の御館

に屠腹してせめては潔き臨終を遂げなむと。勝頼肯かす、庫を開きて節に殉せる家臣の遺族に各黄金百兩を興へ、いづれへなりと落ち延びよと命し、君臣皆涙を啜り袖を啜みて訣別しぬ。

かくて僅に五百の殘兵を糾合して岩殿に向ふ、咄々逆堅小山田信茂、彼は利のため三代相恩の主君を敵に市りけるよ、笹子嶺を扼し、岩殿山を塞ぎ、昨日までも蒸やしく宵を脱きたる大菱の旗に向ひて、けふは箭を射かけたるこそ面憎けれ。前まむか狐狸の畏あり、退かむか豺狼の牙あり、暫くは駒飼の民戸に潜みゐたりしが、かくてあるべきにあらざれば、轡を回らして天目山の麓なる田野へ走りぬ。ころは天正十年三月七日、明け放れゆく東天の空に淡月落ちて、夕の雲は名残をしけに天目山を纏繞す、隨兵僅に四十餘人、うたてき世のさまや、桂を炊きたる手に馬の絆を曳く將軍あれば、錦の褥に坐したまふ軀を以て茨の路を辿る夫人あり。馬は瘦せて嘶き、人は刀に杖きて泣くめり。小宮山友信鞍に伏して苦忠を懇へ、勝頼慍悵首を俛れたるも、今に及ひては死見の齡を算するより晚し。今ぞ最期のおもひ出

に、今年十六歳なる嫡子信勝に環甲の禮を行ふ。かゝる折にも賓客なくてはかなはずと、秋山光次、やをらその席に就き、髻鬘たる銀髻を振り分け、幸うして祝ひの一節誦ひたれど、はより落つる涙は、その名の秋山よりも瘦せたる老骨に泌みて見えぬ。さすがに勝頼はほろみぬ、この世にもひ置くことなき病人が半盞の酒を嘗めたるごとくに、式止む比ろ、敵兵は稻村影より蟻の躍るが如くに叢りぬ。薄倅將軍に殉したるもの、嫡子信勝あり、夫人北條氏あり、袂空しうして芳蘭摧けぬ。哀しきかな天目山、血痕空谷を潤ほして長へに乾かず、蓬蒿延ひて旌竿の跡を埋むること茲に三百年。峽中の父老は知らず覇圖の休んぬるを、人に逢へは今も猶眉を軒け、肩を昂くして館君を説くぞとよ。

ことし陽春三月、余峽に入り、孤筍岩殿に到りて暫く休歇す、古を想ひて痛恨骨を鏝み、涕横流す。頑石を叩いて誓つて曰く、小山田信茂、汝君に負く、罪一なり。汝もし君と合はすんば蓋ぞ初めより袂を分たざる、陽に附き伴はりて瘴くし、君を陥罪に擠す、匹夫猶爲すを肯んせさるるところ、汝太刀佩く身にありながら之を忍ぶ、

罪二なり。汝、君を欺くは猶可なり、いかなれば汝の良心を欺きたる。日月に蝕あり、人焉くんぞ過なきを得むや、過は懺悔によりて拭はる、汝ひとり懺悔の何物たるを解せず、罪三なり。余の多恨なる、史を讀む毎に、夢は若草崩ゆる淺川の畔に佇みて泣き、雀狼々たる越山の衝に彷徨して泣く。今やこの地に漂泊してうつゝに泣けども、その涙は淺川や藤島に墮せるものと同一ならず、彼は純なること、私に珠に比ふことを得べくは、これは汚れたること砂子に喩へて止むべし。同一の涙管を迸り出てその清濁を別ちたるもの、汝實に之を爲すなり、罪四。余素と草木に恩讐なし、只たこの地に生せるもの、嘗て奸人の血に肥へたるかとおもへば、一睡隔して遺孽なからしめんとおもふは何ぞや、汝の名あるがためなり。汝は山を賊し、水を賊し、草木を賊す、罪五なり。生けるとき、汝の肉を啖はす、死して後汝の骨を鞭たす、綿々たるこの恨を奈何せむ。錦を揮ひて水を斫る、水には痕なかりき。

武田氏の亡ぶるや、信長令していふ、降るものは罪を赦し、邑を復さむと。信茂

の心は兎を狩り出したる獵犬なれば、主を估りたる價を乞はむため、をめくと降人に出でぬ。信長は忍刻の人、既に兎を獲たり、狗烹るべきなり。信茂の罪を責め、斫て屍を市に棄てぬ。かくて新府古府を巡視し、到るところ武田氏が尊崇せる社寺を焚掠し、赤子の啼く音を憚らしむ。史に稱す、天正十年七月、家康右左口路を経て入國するや、久しく苛政に苦みたる父老は争ひ迎へて芻糲途に充つ。家康古府に駐まり、政を行ふに凡て武田氏の舊制に循ふ、遺臣の來り仕ふるものあれば、印信を興へて采邑安堵故のごとくならしめ、又社寺の領地を舊に復し、勝頼の菩提を吊はむため、天目山の麓、田野の郷に景德院を創立し、小宮山友信の弟なる拈橋法師を住持に任し、舊臣の寡婦孤兒にいたるまで之を恤みきとぞ。他日、本能寺の濺瀝くなりて織田に引く水乾き果てたれど、江戸に培はれたる三つ葵の永く凋まざりしは、ことほりなるかな。

翻へりておもふ、平等なるは死なるかな、平和なるは墳墓なるかな。賢も愚も、善も悪も、富も貧も、才も不才も、幸も不幸も、昏々槽々、同一邱に葬られて同一

の墓木を拱せらる。敵と云ふこと勿れ、味方といふことを休めよ。これ人の世が假に設けたる差別と知らすや。討つものも討たるものも土器の、碎けてもどの土塊に歸りては、仇も恨も春の霜とめくく消えて、地下の白骨互に臂を把り掌を打ちて笑ふものなからずやは、『時』は恩讐を忘れ、『死』は罪障を購ふ、今に及びて骨に鞭ち墳墓に唾するはこれ、うたかたの浮ぶと見えて消えたるを悟らす。なまじひに石抛ちて水濁らせたる童の心といづれ。猫は餓へたる魚を食はされども、花は荒れたる蕪にも咲くめり。有心無心これ分別の置き所、有心は厭ふところあり、無心は選ぶところなし。厭ふは差別あればなり、選ばざるは平等なればなり。平等なるが故に平和なり、平穩なり、平靜なり。これらの偶像は皆墳墓にあらすや。觀すれば、榮うるも枯るも是れや三春の花、成るも敗るも必竟は一局の碁、浮葩幻芳、有りどももへば無し、白眼黒瞳、形どももへば影なり。只た平等の本覺に入れば生死の圈を離れ、榮辱の巻を去る、あらゆる程楷を撤して一もなく二もなく、三四五六是皆空、空、空盡す一切の劫塵、今こゝに露れわたる山上の白雲咫尺。

歸らむかな、この心を以て古人に對す。余や、何人を愛して執着の絆に繋かれ、何人を惡みて瞋患の焰を焦がさむ。歸らむかな。

富士川を下る記

甲府より例の幌馬車を走らせつ、荒川に架けたる千秋橋を渡り、春とはいへど砂子吹き飛ばす寒風に、瘦せ馬の鬣逆立つばかり、釜無川の横橋を、ひた走りに躍らせて南湖に入り、轍は大地を回まさむばかり、蹄の音高く踏み鳴らして鯉潭に着きし夕、我は粉屋といへるに行李を卸しぬ。道連れの男一人と相宿の、行燈に背を向け合ひて宿帳を認めたる迄は、袴の折目正しく座りしが、諸膝うつか胡座となり、『あなた』は一言目に『君』となり、川越しの前祝ひ、先づ一杯と献されて猪口傾くれは、釋迦と羅漢と、法問するやうに睨み合うてもゐられぬわけなり、どこの馬の骨か牛の骨か互に解らぬ所が、蓋を明けぬ鍋に向つた程の爨し、『女房の懐には

鬼が住むか、蛇が住むか』とは、紙治で覺えた文句なれど、疑はぬに人は皆佛なり。それとは見えぬ縁の絲、結ぶや淺茅ヶ原の假枕、一夜の契りに君ゆるならば命をも投げ島田、旅の情をかけまくも、綾にかしこき淺草觀世音の縁起も、旅より生れたる昔語なり怯夫の腫は草木皆兵なるぞうたてき、君と我とうち潤いで飲むべし、大に飲むべしとわめくほど、實は剛の者ならず、夜や寒し春の霜じめくと、脆くも酔ひ潰されたるその翌くる朝男も我も、約束通りの時刻に叩き起されてけり。

荷物よ傘よとひしめきて、渡場へ駆けつけつれば、殘星大虚を涵して滄溟今門口を啓くか、うす赤き微光梭を投ぐるやうに閃きしか、やがて紅日蒸々として靈府より、條々十方を照らしぬ。白いものは吾手袋と、大地に蠢蠕たる犬一疋のみなり。船は早くより續して待てり、その形マツチ箱を細長く延はしたらむやうにて、板のうすきこと危まるばかり、吃水なければ笹舟を浮かべたるに同じ。底には蓆を三四枚布きて、小さい火鉢一個を艀中に据へたれど、曉の寒さを凌ぐべくもあらねば、乗合の人手を懷に收めて錠を下さぬばかり、歴史調査のため、廿日あまり艀中を巡りたり

と仰せられたる、髭いかめしき紳士を取巻いて、我と、合宿の男と、歸省を終へてこれより上京するてふ書生と、唾壺を叩きて古人を論ずること傍若無人なり。紳士が、史料蒐集の困難より延いて天目山に及び、武田勝頼の人と爲りを批判したるには、さすがに頷かるゝ節多かりし。船頭一人、舟子四人、その一人は十七八ばかりなる啞にて、船縁に倚りかゝれる人の袂、水に露ほはさじとや、手眞似して頭氣遣へるさま、發明だけに哀れなり。

靜に岸を離れて右は身延街道、左は小山の間を、流れに隨ひて揺られ行く、水底岩多きところは泡沫沸々として牙より鋭く逆立ち、凄まじく潮洞するさま、目も眩むばかりなり、電信柱かくれけると共に身延街道を見失ひ、兩崖の嶮巖、九折の展風を立てたるごとき懸谷に入りて、『千里江陵一日還』の急流は、これよりぞ見らるべき。船は天神嶽を衝かんとして、俄にあらぬ方へ反れゆく、崖の嘴に石塔建てり、さる豪家のなま娘、身延詣での歸るご、こゝにて船擺け、舟頭小僧をはじめ、同伴の幼き妹まで溺れしかば、雙親哀しみに堪へず、せめては冥福を祈りなむとて、この

石塔を供養したるなりといふ。船中の人、皆哀れにおぼえて念佛唱へける。善生發
 菩提心、珠數繰る手は、やがて鮪の刺身作る手なりとももへば、金襴の袈裟召され
 たまふ坊さんもありがたからず、されど花咲くときは悪木にも斧を入る可からず、
 このどきの人間に罪の詮索無用なると、彌腹に疵の存亡を争ふに同じかるべし。
 向岸の松、鎮守の森、稻荷のよろけ華表、いづれも畫師の手帳に入るべきものなれ
 ど、あれよと指す間に遙に後にすすりて、船に揺られたる微軀これ絃を離れたる箭
 よりも迅き心地ぞする。

クヌキ村とかにて、始めて富士を仰ぐ、伏熱火を流すときも、裾に著露を曳き、絶
 巖に白雪を冠れるこの山、海瀧より上天の梯子を作りて稜層の巨障遠く玄微に入る、
 宵たり、玲瓏たり、世を擧げて皆濁れども、この山ひとり清淨なり、無垢なり、詩
 神去らず、たのしきかなやと絃を叩きて叫ぶ。このとき岩淵より上りの荷舟に遇ふ、
 客を載せたるは絶えてなく、三人にて、長と三十一間より三十三間ほどなる綱を肩
 に絡けて船を曳く、下りは半日にて岩淵に達すれども、上りは早くとも三日を費やす

とぞ、舟子の穿ける草鞋は、踵のみにて前を截りたれば、拇跟の外に藪出つること
 無し、大サ馬の草鞋ほどなるもをかし。

輿に乗して右の岸を振向き、左の山を仰きなどしけるほどに、我は帽子を水に落
 しぬ、手を延へたれど及はず、舟子はぬからず、棹取延へて之を掛けたり、もし早
 川と合したる後なりせば、いかに退ふとも及はざるべきに、氣を注げてごんせと、
 たしなめられて大に凹む。

切石を瞬めく間に通り抜けて屏風岩の下をよきる、早川の奔流と合して鍾々たる
 水はさながら刀を研ぐごとく、水に振けられて高くなり低くなる船底は、障子の紙を
 唇に當て呼吸するときのごとく、あやしき微音を生するなど、あはや南閻浮提の下、
 二萬由旬を過ぎて無間地獄に墮すべきかと、怯れたる乗客は青菜に鹽かけたらむや
 うなり。二人の幼見を抱へたる婦人は、眩暈の氣味ありとて俯伏しぬ。

波木井に上陸するは、身延詣での捷徑なりと聞くものから、この船は『時間船』
 とて、岩淵に徑行するものなれば立寄らず、磧の幅りと潤く、鹽沙百礫疊なり合ふ

て錐を立つる隙もなかるべう礮筒の中を、一葦の水は船を載せて流ること愈々急なり。さすかの舟子も、棹を水に奪はれたること二たひ、されど騒かす、準備の竹棹にて船を行くこと巧なり。兵士三十人を載せたる船の、割然盤粉して一人も生きざりしてふ險崖も事なく過ぎたりしが、北風船に逆らひてさしもの急流船を奔らすこと、前よりは遅々たり。上り舟のみは得たり、かしこしと順風に帆を懸けて溯り行くこと、飛ぶが如し。遠くよりは残むの雪の斑らなるかとおもひたがへぬるほどの瀧、左右の山にかしりて銀糸を垂る、不動の瀧いと奇なり。峽間ところ／＼電信柱ほどの丸木を樹て、右より左へ跨かりて綱線を張りたるは、舟を繩にて吊り下げ、向岸にわたす仕掛なりといふ。

手汐といふに到れば水流更に急、六角稜を成せる水晶石を噛みて一回折し、神斧を借ひて八角に截断したる材木岩に咽みて又一頓挫し、組板より平たき大石の水を凝て峙立せるあたりを渦きて窟下に落つるや、吼り狂うて木片を凌ひ、竹筥を攫み、襪纏包を漂はし、船をも人も一渡に流しゆく。兩崖仄立して松や檜や小笹や、

こんもりと茂り合ひ、小猿の住むらむ石の洞、木の間隠れに淋ひしけれど、残んの雪の谷陰に斑らなるどころ、菜の花は仰きて乙女の涙か、瓣にちく露滋く、梅の花崖下に俯向きて水化粧するさま、觸れなば落ちむ風情あり。歎崖に一撮の土を剩すところには、所謂駿河半紙の材料なる三極ミヤウキを藝う、枝は幹より三又すること、名のごとし。歎澤に近き市川にて製造するなり、一段(三十貫)の皮價十二三圓、一日一人にては多きも二貫より割かれねど、その殻を薪に代用すれば手間賃ぐらゐはあり種を播きて凡そ三年なれば苴取ることを得るとか。

甲駿二國の境より漲り落つる界川を右に視て、春風一路駿河に入れば、山やうやく矮く、水の流れも少しく緩やかなり、礮に嘶く馬の背より、楮の俵を下して船に搬べるを眺む、所謂美濃紙の本場なるもの、この楮皮より成ると。

昔蛇多く棲みたりし跡なりといふ蛇岩は大さ浮盤の甲を乾せるに似たり、仄立せる兩崖の中ほど、ところ／＼穴を穿ちて石と漆喰にて塗り籠めたるは、苗代水を儲藏するなりなど舟人は語り合ふ。右は三ッ岩とて大小三箇の巖水中に相搏ちて危歎

倒れむとす、四五年前まで、奇松聳へて風を截り、かき鳴らす秘園の曲の流泉啄木
 ならねど、水に妙音を奏するさま、いつも床しく旅人に愛でられしが、今は伐られ
 て薪とやなりにけむ、丸裸となりて巖も寒げなり。左には名たかき釣橋を仰き視る、
 仄立せる兩崖に、竹を編むこと藁俵を長く、平たく延はしたらむ形の橋を架けたれ
 ど、欄干もなければ枕木もなく、長虹十丈虚空に影落ちて滄溟のづから露れわた
 るところ、大魚人立するさまの岩石多く水中に凹凸せり。橋下の水、紺碧油をどろ
 かしたらむごとく、曾然たる『死』の國の門戸なり。この橋、二千年毎に一度つゝ、
 架け代へたるよしなれど、危険なれば通行を禁せり、村の小兒などは今も無心に橋
 上を遊びありくとき。舟はむかし橋下を過ぎりたりしを、官命にて岩を截断し、水
 を三ツ岩の方向へ落しけるより、淺くなりて今この下に入らず、三ツ岩を繞りて
 川下に流れ去る。

この村を離れて二三丁、富士の裾野より、流れ落つて三橋川といふに合す、岩石
 の間を縫ひて漲る水は、同じ國の白糸の瀧のともかげあり。土人こゝに籠を設く、

この川の青海苔最佳品なりとか、富士よく見ゆ、廣漠の素蛾、霞を翔ひて踰躍するか、
 富士の女神あからさまに拜まれぬる心地ぞする、

北松野を右に過ぎて七八町、銅鐵を鍛へ成したるかともある、一枚岩に、襦袢
 一枚にてゴロリと横臥の船頭どの、石の床にも三年の修行が積んたか、漉紙色の容
 貌達磨大師に肖たりなど、おもふとき、船頭の聲して『海が荒れたさうな』といふ
 に、心つき、仰けは鷗群がりてわが頭上たかく飛び翔けり、古歌に『さへわたる
 雪けは富士の川千鳥、羨ちかしどうらみてぞ鳴く』と詠せられたるも、かゝる境に
 てならむ。

俵石高サは三丈ばかり、石といへど水中に特立したるにはあらで、右に聳ゆる
 山崖の裾の方をいふなり、今は大半砕かれて見る影もなく、細粉は玻璃を製する
 によろしといふ、このあたり南松野なり、山は次第に狭く低くなりしが、木島より
 全く山と訣れて遙に眉黛のごとくなる東海道一帯の松原を隔て、漁家鱈戸の籠より
 颯れるけぶりの、風に吹かれて遙にみどり逆捲く浩渺たる大海原に靡くも、よし。

やがて岩淵の堀割につく。大の髯男が船頭に負はれて、船より陸に上るさま、石地藏の開帳よりどけたものなれば、我ひとり舟楫より交どばかり身を躍らせしが、
さても穿きながら草鞋を洗ふ清水の冷たさ、腦天へひいやりと。

伊豆めぐり

修善寺なる菊屋を出立して戸田街道を行くこと二二町、右に範願墓といふ石標建
てり、竹籬の下に梅の落花を踏みて少しく阪を上れば、饅頭ほどの小石二つ三つを
累ねたり、蒲冠者の怨骨が茶毘一片の煙と化せしは、こゝなんめり、傍に碑文あり
しが讀まず、竹を折て籬を編むもの、智を讀せよ、かくてその嫩筆を、早く枯らし
了んぬるあるかを憫めよ、私の鎌倉に遊ぶや、路左の荒墳、松楸の骨寒きを看る毎
に、古人の屍を撫して啼く感なきはあらざりき。昨日は宿月殿に薄倅將軍(頼家)
の墓に詣で、油垢にむみたる破れ行燈に、蠟燭の涙乾くひまなき君が冤魂を吊ひつ、

けふは叔父君のおくつきに頼つきて、經文は知らねど、心ばかりの手向をなしつ、
春蠶煮られて絲方に盡きぬる源家三代の運命に泣きしぞや。

瓦焼く煙の、風に靡きて半は消えつ、半は地を遺ふうちを、未だ羽翳き蝶のひら
りと舞ひて、通りぬくるを見送りつ、元來し路を戻り、桂川の流れを石傳ひに横き
りて、帽子を伏せたるごとき芝山の裾をめぐり、立野に出つ、下田街道なり。

大平の旭瀧を觀る、高さ三十丈、水は涸れくぐりになりて絲より細く落つれど、

瀧壺といふほどのものあらず、不動明王の石像一つ飲けて淋しげなり。小徑を繞り
て、何がし寺の古塚累々たる境内に出つ、破れ茶碗の蛭蚓をおさる小鳥をおとろか
し、瀧の流れの小川に沿ひて山門を出つれば、梅花色褪せて見る影なけれど、そよ
吹く風蠶豆の花の香をおくる、寂ひたれど、さすが暖國の春なり。

月瀬村、風景やし佳なり、路は狩野川に沿ひて亂礁突兀たる上を、漲り落つる水
の聲噴すし。花嫁とほほしく皓齒新に涅したるが齒に佇みて鍬いぢり、茅舎の前の
白雉とや、たしへましけれど、柳を章臺に折りたまふ金鞍白馬の貴公子はいかに見

らむ。このあたり茅山多し、土人新芽を得るために枯草を焼く、チコロ火燃え上りて雪のごとき灰、絶え間なく草鞋のほどりに墜ちかゝる、曇れる大空、いくたびとなく仰向きしが。

路岐れて右なるは吉奈温泉に通ず、直ぐなるを行けば門野原なり、だら／＼阪を下る、ペンキ塗の白橋はあもしろからぬと、狩野川一帯の風色愈よ佳なり、水に浸しある、洗ひかけの飯櫃に、羽を懸めける鶺鴒の、小波をさめめかすばかりに低く、石より石へ飛び交ふもいと興あり。橋をわたれば、左に仄立せる崖より篋を引く、水は蕪冬の花白う咲ける畑にほとはしりて、枯れ果たるくはるの莖を露ほす。このあたりの土方が唄を聞くに『行こか板橋、歸るか巢鴨、こゝが思案の瀧の川』と、いづれ東京のわたりものなるべし、この旅行、鞍馬、馬士唄など、俚謡には心して耳傾けたれど、皆近ごろの到来とほぼしく、文句も支離滅裂、書にも棒にもかからぬが多かり。

川に沿うて湯夕嶋に入る、土地は修善寺より幽遠なれど、廣袤は及はず、川を隔

て温泉宿落合樓を望む。同じ湯夕嶋に属する淨蓮の瀧は、これより一里弱なりと聞き、電柱に沿うて急ぐほどに、路は崖の上と下と、二つに別れたり、上の方平坦にして潤ければ本道なるべしと合點して行くに、人の影なきを訝しむしが、ことはりなるかな、山崩れ、石轉け、大木僅れて路を遮り、馬はあるか車も通はず、辛うして過ぎたれど、一二丁にして又在り、これではならぬと躊躇するうち、草籠を背負へる童二人つれ立ち來れるを呼び留めて、仔細を問ふに、こゝは新道なれど、この前の雪にて山崩れたれば通ふべくもあらず、旅人は下の舊道を使ふなりといふ。そこでこそと、崖を轉がるやうに、迂り落ち、緩やかに流れたる小川を石傳ひに涉りてやうやく舊道に出て、上ること一丁許にして一茶店あり、草鞋を穿き代へながら壁を觀るに上杉謙信の畫像をかけたなり、天正六年戊寅三月十三日卒四十九歳淺草新鳥越金知山寶藏什物とぞ註せられける。この一幅の由來につきて、あもしろき語を亭主より聞きたれど、まるさず。茶店を辭して一二丁、鉢窪山にかゝる、こゝは天城山の支脈なれば、又わたす限り芒生ひ茂りて人の肩に及ぶほどなるを、分け入りて進む

に、土方の人足ども、何やらむ籍に叩きあたりしが、やがてマツチの火にて枯草を
 燎く、傍若無人の振舞、憎みてもあまらぬれど、かゝる無頼漢と争はむも、無益し
 ければ、萱原を通りぬけて阪を下り、淨蓮の瀧を看る、長さは旭瀧の三分の一に過
 ぎざれど、幅ひろく水多く、豪宕人目を快くす、されどこゝは袋の中にひとしき窪
 溜りなり、火のために路を失はん患もあれば、急ぎ足して早く戻りぬ。果せるかな
 火は豆を煎る音して、萱を焼き、竹を爆し、白烟渦くばかりに空を衝て騰りたれど、
 幸に風勁からねば、別に路を奪ひて辛くも脱しぬ。この匹夫ども、旅人を見かくれ
 は噴唾口論を仕掛けて、果ては傷を負はすか、酒錢をねだるか、二に一は死ねがた
 かるに、その難にかゝらざりしど、せめてもの幸に待ると、前の茶店の亭主語りき。
 門野原に戻り、狩野川の材木流しを看る、二十本ぐらゐ宛一束にして筏を作り、
 五隻ほど繩にて繋ぎ、舳艫相啣むと形容せまほしきさまにて川を下る、岩に遇ふと
 きは、首の筏先づ水の勢を借りて巧に乗超え、珠數縛りなる他の筏又之に随ふ、筏
 師四人、一人は前に立ちて巧に棹を操縦し、他の三人は眼を八方に配りて、筏の上

を、あちらこちら飛ひめぐり、崖に近づけば遠さかり、岩に觸るれば避くるなど、
 棹を弓のごとくに撓めて筏の去就を自在にする技倆なか／＼目ざまし。この日、吉
 奈温泉の東府屋といふに宿りぬ。
 (伊豆日記の一節)

函谷の冬夜

皇太后陛下、御登遊めらせられたる月の翌くる六日、靈柩を送り奉らむとて、纏
 紳夜を日に繼ぎて京へ下られけるに、程々谷より午後二時幾分に出づべき流車
 のけふに限りて出でざりける。語らう友は一人あれど、停車場に在りて反古のやうな
 る新聞紙と對しながら、猶一時あまり待つこと愛しや。冬景清瘦人に悪しからず、う
 ら枯れたる田の畔に鴨の低く飛べる、松原がくれに富士の高嶺の見ゆる、それもよ
 しど、友を促して戸塚驛まで歩む。猶待つこと半時、五時に近きころ、流車は余等
 を載せて駛す。人の寒しと呟くを聞かぬにはあられぬと、窓を閉くことを許せよかし、

余は沿道の山水に結縁をかき身ぞ。冬の日短くして藤澤驛より暮れ初むるや、大山は遠くなりて影おぼろに、馬入河は水涸れて砂のみ白く的確す。花水橋頭行人迹絶えて汀に列なりたる茅屋の燈火、蘆荻の上を亘りて幽かに水に映るさへ淋びしきに人の立てる如き疎松の間より高麗山の斑らに蒼翠を帯びたる、喪服を被りたる美人の新に剃りたる眉の跡、あざやかなるにも似たるかな。名にし負はし虎や伏すらむ唐ヶ原、風吹かば波も巖根をこゆるぎの大磯小磯、いづれも昏迷の中に疾く過ぎ去りて國府津に着したるは六時を過ぎたりし。これよりいかにせむ、川風寒く千島暗くなる酒匂橋の上、旅衣身にうすけれども、欄干に凭りて漁火と星斗と、冥々の中に燦灼たるを眺むるなど、をかしからぬにはあらねど、斯くては夜や更くらむ、函山の客舎戸や鎖されむと、没風流ながら湯本行の馬車に乗る。乗客充溢して空席を剩さず、余等二人は天井より下れる草紐を固く握りて僅に倒れざるを幸とす。車中には三衣の僧あり、八字の髻あり、うす鼠の縮緬頭巾に面ふかく包みて、シオールを纏へる女性の、車の出でぬ先より頭痛するとや、俯伏したなりて白魚耻かしき

その手に、鱒谷のあたり叩くもいとしや。中にも色褪めたる古襪に小兒を背負ひたる四十許の女、容態しどろになりて、舌滑かに、おのが知れる人々を河原の中にて儼なく品評し、おのが家へ久しく出入する米屋が丹目を偷みたるを押し、詫言文を収めさせたることなど吹聴し、烟を見たら火とおもへ、人を見たら盗とおもへと噂る。一座笑を忍びながら耳傾けて之を聞くうち、車は揺られに揺られて驛舎次第に櫛比せる小八幡酒匂を過ぐ。小田原に入りてより、その女も乗客の大半と共に下りたれば、席ゆるやかに人も静になりぬ。板橋風祭入生田を經る比る、残れるは僅に二三人に過ぎざりければ、驛紳士と背合せになりて横臥す。馬車早川堤を越えたるを知らず、水音高く瀬枕に通ひけるに、首を擡げて窓外を看る。冬山崎崎屹として癩せて聳えたるところ、松二三株天を繋げて欲つ。山嵐斜に崖を掠めて松に謔々の微吟を生ずるや、幽禽悲鳴して飛て一叢茂き杉木立の中に入る。車は湯本福住樓の電燈を認めて停まるや、鈴木樓とやらむの提灯は驛紳士を伴ひて去る。駁々たる白光、石を衝きて濁ける水を射るに、鱒の炎ゆる色を成して凄まじくも又凄けなる。

あつから肌に迫りて余等二人は手足も顛ひ、齒も合はず、川に沿うて崖を登るこ
ど凡そ半町許、俄に闇になりて路よく見え分かず、玉を憂せる急流の尋々然たるを
聞きながら塔の澤に入り、去年の冬宿りたる一の湯といふに投す。

旅にてをかしまもの、その土地の古老に遇うて昔がたりを聞くことぞかし、薪樵
る林中の山賊多く字を識らず、綱引する浦曲の壘が子多くは書を讀まじ、それど親
は子に語り、子は孫に傳へ、生ける碑文となり、紙なき經卷となりて幾百年の久し
きに殘るものぞ。去年の秋、横須賀浦賀を遊歴せし途、鴨居より走水の間を匝れる
とき、七十餘齡の翁を伴侶として嘉永の昔がたりを聞き得たりき。ペルリ來航の
とき、御奉行さまが陳笠羽織を召したまひ、村一番の弓術の先生を伴ひ、小船に乗り
て黒船に漕ぎ寄せられたること、村の壯丁は悉く糧食兵器を搬ぶために募られて、
己もその一人に加はりたること、海濱を距ること二町許なる砂地に異人の席を設け、
幔幕を繞らして固く人の入るを禁められしが、己は人夫の身なれば屢々幕を窺けて
覗ひたること、そのとき砂の上に行儀よく列なりたる進物のいかに華麗なりしこと、

浦賀海邊一帯は鼎の沸く騒ぎにも増して、今にも九や飛ばむ、弦音や鳴るべきと心
安きは一日も無かりしが、御奉行さまより、いかなる事ありてもこなたより手を觸
るべからずと、嚴しく戒められしことなど、逐一聞きて吾當時の日記帖は更に幾枚
の多きを加へたりき。この宿の浴場にて圖らず二村老に遇ひしかば、例の「聞きた
がり癖」出て、何くれとなく昔を問へば、夜は長し人は稀なり、老人も徒然なる
をり、善き敵手こそ出来つれど、その樸魯飾らざる口より諄々として四十年前を
語る。

談は御關所より始まる。箱根には七ツ許、御關所がありました。この山の中では
權現前に一つ、仙石原に一つ、それから山を下りて海に沿うては根府川に一つ、そ
の外それ／＼要所を固めて居りました。それで江戸の方から京阪へ下る女子は一切
通行御禁止で、是非通行するどあれば、御老中の審判が要るのですから、なか／＼
の混雜で御女中衆は困るのです、それが大阪の方から江戸へ上るのは制限が無いか
ら尙ほをかしいじやありませんか。一度「御關所破り」の所刑といふのを見ましたが、

それはかういふのです。祭文語りでしたが、女一人を伴れて御關所へかゝる。連れ
ないから竊と仙石原の山中を通り抜けやうとして捕られました。女は追放で事が
済みましたが、男は磔刑にされました。私共見に行きました。可憐相でした。何も
悪氣は無かつたらしいのですが、女禁制で通られないから、詮方なしに抜けやうと
して殺されたのです。『御關所破り』といふは、多くかういふのが有るから、一概に
悪人とも言はれませぬ。

それより土地の盛衰に及ぶ。箱根の宿から伊豆の三島への街道は、ひどい衰へで
す。往來に草は生へる蟲は鳴く、人の足跡は絶えて、人家もあひ／＼三島の方へ退
轉してしまひ、残つてゐるのも今は立腐れの姿で、賣りたくも買ふ人はなし、只衆
ても行かれず、困るでせう。先づその家を買へば、一本一本材木に壊して三島の
方へ運ぶのですけれども、古い家を買つて、あの山中を、馬に積んだり、車で換い
たりすれば、三島へ持て来たところで、運費と一杯々々で、つまりませぬと。四十
年前の長槍大瀧、兩澤警陣、それも夢と消え果て今は『箱根八里は馬でも越さる』

馬士唄のみ鈴音と共に、永く旅客の胸に響くらむ。

隣家の何とかいふ宿の樓上、燈ほの暗き障子を隔て、をりをり媚めかしき聲の聞
ゆ、春雨とやらむいふ俗曲を忍び音に謠ふなりけり、三味線の聲もす。長きあたり、
諒閣の中に在はして民草の涙の露乾くひまもなく、心なき鳥も囀りかはさるるけふ
この頃、歌吹の海に溺れたる人を、この山中に見むとは念はざりけり。吾室に戻り
て晚餐したむ。亭婢赤く膨れたる臉の上に、白粉を厚く塗りたるもをかし、一週
間前、何とやらむいふ俳優が新橋の藝妓某を伴ひ來りたることなど、問ひませぬに
いと誇り顔に語る。住めばまた浮世なりけり他所ながら、おもひしまゝの山里もが
な、さきの三味線と念ひ合はして、此地愈よ厭はしくなり、明朝は山の奥底までも
踏み入らむとぞおもふ。妖姬疾く行けかしと竊に心に祈るうち、饌器を運びて去り
ければ、漸く心安うなりて寢に就く。

友よく眠る、余また疲れたる身にしわれど、未だ睫を交ふるにいたらずして吾友
を念ひ、吾身を念ひ、吾家を念ひ、神經過敏になりては早川の水音高く枕に響きて愈

よ眠られず。箱根といふ名を聞く毎に余は吾亡友を想ひ起すことを禁せざるなり。吾亡友、姓は阪倉氏名は英太郎、余が嘗て横濱のさる學校に通へるをり、常に遅刻して登校する人ありけり。その着たるものを見れば弊衣履服、黒羅紗の洋服に金鈕これ見よがしの同窓者に似ず、その人と爲を見れば言寡くして偶々唇を動かせば口のおたり淋びしげなり。教師は彼の遅刻を屢々するを叱り、同窓は彼の交際を避くるを誦る。余一たび金蘭の交を結びてより竊に聞けは世に哀れなる人もありけり。父はあれども仔細ありて亡きにひとしく、母と己と弟妹と一家五六人、叔父に養はる。學費を叔父に仰ぎて通校すること茲に二歳、家に在りては奴婢の勞をいとはず、校に出ては學事の研鑽を怠らざりしが、そのうち叔父君に不幸つゝきて、一家を托するに忍びざるにいたり、一日余を見ていふ、母あり養はざる可からず、弟妹あり育てざる可からず、吾腕瘦せたりとも、今は一家の重荷を負ふの任に當る、これより校を去らむ、君健在なれよと、余はた涙を揮てその行を送る。爾來余は幸にして業を卒へたれども生來の凡骨一も得るところなく、一たび人の家僮となり、又幾くもな

くして商家の丁稚となる。飄零幾回、荏苒として日月を送るうち、阪倉氏は程ヶ谷なる紡績會社の職工に雇はれたりと聞き、一日君を程ヶ谷なる一茅屋に訪ふ。時しも初秋、修竹二三十竿叢をなせる間を白衣を飄へす如くに流れゆく小川の上に、危ぶく架したる板橋を渡り、黒木の門を潜り入ればこゝに庭あり、古井戸の結構高く擧りて家媪青蔬を洗ひつゝあり。阪倉兄在りやと問へば、聲に應じて障子を開くものあり、君なりしか、能くぞ訪ね來たまひたると、驚喜して余を座敷に請し、細緒の木履引きかけつゝ清水一杯を汲み來り、手巾を濡らしてさぞや暑かりけむ、これにて拭ひたまへと、水は吾膚に氷より冷やかなりけれども、友の情ぞ胸に熱かりける。偏阪の山里、菓子もなく澁茗二三碗を啜り、久しく遇はざりし浮世話に過して、日もやうやく薄らぐを知らざりき。新月軒にかかりて翠竹簾々涼を吹くころ、いさや歸らんといふに、さらばさよまで送りてむと、細芝を川に沿うて歩み來ること幾丁、余は根なし草の寄るべき岸もあらねば、明日はいづくに漂ひ行くらむ、再會期し難し、幸に恙なかれよ君と、その言猶ほ吾耳に在り、爾來君が輻輳淪落の短生涯は一々

語るもなかく、に涙を催す種なれや。或は漁船の火夫となりて遠洋に泛び、月夜えて
 鯨の吼ゆる聲腸にひしく夜半、故郷に残り給へる母君をちもひ起して影ほの暗き行
 燈の下吾子に衣送らむとや、瘦せ細りたる指先に針を運ばせたまふ像を見まつりて
 涙眩を打ちたることもありぞとよ。一昨年鷄林風起ちて鯨鯨海をわたるや、君俄に召
 されて臺灣に渡り、轉戦幾回、時分不利、竟に測らざる疾に侵されて草薙離々たる原
 頭の露と消え了んぬ。家に母あり、吾子の勳章着けて戻りたる姿を見て半宵夢おど
 ろきしこと幾たびぞ、弟妹日に門に倚りて阿兄の影を望みしものを。そもや月は常
 住の燈をかへけず、花は不斷の香を吐かず、脆きは人世の常態といひながら、君こ
 の世を辭しぬといふ一片の飛電を握りたるとき、余は敢て哀しともいはず、只茫然
 として夢か幻か、あらぬかを疑へり。君の墳墓は今神奈川高嶋山なる本覺寺に在り。
 君が遺骨を葬るとき、旗を立て花を供し、經を誦へ佛を念して賑はしきまでに行を
 送りしもの凡そ一千人、去月君の墳墓に詣でたるときは、香烟蕭條として松の墜飯
 堆けれど掃はれず、咲きをくれたる山茶花の心靜に落つる音を聞くのみ。嘗て相携

へてかの山に上りしとき、遠郊近村の平田沃野豁然十字形をなせる間より、遙に箱
 根一帶の青巒を見て指していふ、君と余他日功成り名遂げ、半白相擁してかの塵埃
 到らざる山中に暇遊を試みなばいかに快なるべきと。焉くんぞその山に君の白骨を
 瘞めて余ひとり、この山の客舎に枕を擁しつゝ故人を忍びて啼泣する今日あるを知
 らむや。

再び眠らむとすれば心亂れて絲の如く、頭今に裂けなむとちもはるはかりなれ
 ば、跳り起きて廊下を繞る、玻璃障子の中より仰ぎ視れば、月は見えぬと澄空洗ふ
 が如く、星斗闌干、天に萬顆の珠を垂れたり、あはれ加茂川の水音今夜いかに咽ぶ
 らむ。

又室に入る、行燈の火一たび消えなむとして青く燃ゆ、吾骨いたく瘦せたり、臍
 臍として壁にうつる吾影に、墨畫の寂しさを含めるもをかし。火の滅するを眺めな
 がら横に轉びぬ、床の花瓶に挿みたる早咲の白梅、闇をつんできて薫ること、うれ
 しけれ。

(山中三日の二節)

刈萱日記

馬入河の橋墜ちて馬士も旅僧も、流れに浮かるゝ一葉に落がる蟻のごとく渡舟を争へるを流車の窓より眺めながら、葎の葉の露重たげにうつ俯きになりて轉がりたる、かしこの竹藪の一二反ばかり堀返されたる、この畑の土堤より低きところは洪水となりて稻の穂の一二寸ほど露はれたる、日頃は一髪をも透すべく澄みわたれる水の雨に濁り風に漲りては、轟々と鳴て凄まじく、岩時ては岩を齧みて流れ、木避けば木を啣みて奔り、無法無徹、當るところ敵なく吼り狂ふおもしろさよと、興に入る。

國府津より腰辨當の工夫ども凡そ二三十人、ドヤ／＼と推し寄せたるは、小山驛燧道修繕の土工を急ぐため、後詰の人数と知られたり。手の甲にて水漬を横にこすりながら憚んながら御用だいと、傍若無人に風を吹かせること甚だしければ、乗客一同席を譲りて隔へすくむ。余は初心らしく窓より首を延べづめに酒匂川の隘沙白

礫、積に圪して歩まは草鞋を齧むことならむとおもはるゝとほり、背戸の畑の葉鶏頭七八本赤らみ、名も知らぬ秋草の花まほらしく咲き交りたるを愛でいつくしむ。



十文字橋を望めるをりは葛蒲川、川音川、四十八瀬、いかに水嵩の増しつらむなど、去年の旅行にもひついくるとき、流車は早くも山北に停まりぬ。これよりは山崩れにて通はず。

垢つきたる手拭を折りたしみて、名のみは床しき吉原冠りとかや、綻びたる布子に甲斐々々しく襷を繰取れる村の乙女、四五十人、色の日に燦けて黒きは山王さまのお猿といづれぞ。足柄山の柚人か炭焼男を行司に頼みて團扇をあげて貰ひたしと思はるゝほどなるが、背には町あたりへ薪、杉葉など括り付て賣りあるく擔ひ梯子といへるを負ひ、旦那さま荷物持たせてくんない、鞆擔ぎましよと、一人の客を適さじものごと、七八人にてとりかこむ噴すしよ。蝙蝠傘一本より外に持たぬ身は懐中の財布と共に軽ければ、悠然として眼鏡ごしに、柳の眉すみ、あざやかに彩りて蘭麝のかをり袖に匂ふといふ鄙珍らしき乙女もがな、あらば小説どかに書いてくれ

むと、ひとわたり見廻したれど、いづれも山家育ちの藪鷲、こゝモデル捜しなどの夢にも足踏むまじきところぞ。

このあたりより駿州駿東郡小山までは、足柄山の裏道傳ひ、樵夫ならでは通はぬ路なりしが、鐵道といふ器械出て来て慾と塵とを兩天秤に撥ひ、智恵と芥を自分量に捨て置くより、旅商人などのまたり顔に往來するもありたれど、さすがに山百合の外にはち白粉臭き風は吹かざりし。このたびの山崩れにて、この難所に山駕は通へど昇く人に限りあれば、日に幾回も落合ふ上り下りの流車客の需めに應じがたく、車はあれど皿道を駢はす。されは埃に赤うなりし菅笠と、海老色の絹傘と、土堤づたひに行き交ふもあれば、桃色のハンチキに玉の汗拭へると、うす襪き手拭に滌皮の皺面包みたると、細き暖手道を鉢合せのハンチ書、をかしき道行振を看るとか

し。
山北の宿、わが見たるところにては、農家を外にして宿屋一二軒。酒、醬油、下駄、元結、附木、彫何でもござれの荒物屋一軒のみなりし。この荒物のうしろ、酒匂

川の流れて、平生は栗舟の渡しあり、蛇水の瀧まで向岸より僅に五六丁程なるよしなれど、近き雨にて瀨々の水音すさまじく午前は篙師も見えぬかして、空舟のみぞ陸に引揚られて横はりける。損は弓と絃の比より甚だしけれど、詮方なければ、橋のあるところまで川に沿うて十町許り登り、それより向岸を逆に戻ることに尙十二三町、平山村に入る。

水車しかけたる田家のほどり、瀧の下流に架せる小橋を渡れば杉木立にて奥に不動堂あり、門内に駈け入りけるが本來空の伽藍堂、煤に古びたる提灯一つ淋びしげに下られると、いつぞや村芝居興行したりしをり旅役者の奉納したりとかいふ、嵐龍五郎、松本錦枝など聞えぬ名の列れる額が見えたるのみなりき、離れたる小舎に人の咳拂ひ、堂守や在はするど訪ひたるに障子開けたるは兵見帯の書生二人、この村の人にて永く東京に遊學せしことありとか。いと御案内ならせんと先に立て我を導き、木堂の横手より阪を下る、風蕭々として易水寒き夕ならねど、水聲響々、餘韻松にさんざめきて洗滌にて三味線を撥するごとし、水に浸されたる葦草の中に石の楢あり、むか

し入定せし行者を葬りたるなりといふ。夫れ靜に惟れば、無常の風に歴日なし、短命といふは散るとき心の心安き罌粟の花か、長壽といふは色褪めての後まで枝離れの悪き百日紅か、人間一代の繪卷は、桃色の布子に包まれたる赤子に始まり、經帷子を着て門を送られゆく佛に了るぢやまで。いつそ飲まず食はず、立たず歩まず、そのまゝに入定はちもしろからずや。さはれ寒嵐横さまに峰をなぐりて天の河を倒に注げる大瀑に落つるとき、振鈴いかに寂びしき夜半もありけむ。水に漂へる石は轉輾の久しきに刺を殺がれ稜を削られ、巴戟天の葉よりも尖りて瘦せ、辛うじて大木の根に抱かれたるを、裾濡しては歩むに重からむと、よきほどに尻引からげ、傘を杖に石より石を拾うて飛びありきしが、書生は慣れたり、その傘が荷物になつて危い、僕が持ちませうといふ仰せに任せ、空手になりて水中のゴロタ石を踏しめつ、瀧壺まで漕ぎつけぬ。仰ぎ視る、向山、上の山より三段に落つる水の幅は七尺に足らぬと高サは六十間にあまり、電光の寒巖を打つより迅く、白虹の虚空をつんざくより麗はしく、冷悚肌に徹して齒を咋ひしほるをりしも、沫一團電のごとく飛んで頬を叩きつけたる寒さ、髪を掉

みて霜の針を植えらしめる心地して後に仰け反らんとせしを辛くも踏止まりしが、眩ゆく、呼吸迫しく、毛孔も豎立するばかり、ちほえず五六歩逡巡せしは見苦しかりし。堂に戻りて瀝茶を饗せらる、坊主綻びたる法衣を仔細らしくかいつくろひて挨拶に來らる。永く剃らざる毬栗頭、頬骨高く眼窪み、疎髯面を繞る、山伏か、法印か、經を誦するより咒を唱ふる方ふさはしき男なれど、骨瘦せて鶏を縛する力なげなる、されば里の子守女もさまでにこの和尚を恐がらぬなるべし。

蛇水の瀧、洒水又は灑水とも書く、この瀧を利用して洒水館といへるを建つる設計ありしと聞けど行はれざりしやうなり、歸るに臨みて書生より『天則』といへる小冊子二部を贈らる。

蛇水へ廻りたるため、同じ瀧車に乗合せたる入々と別れて、畑の瀝桶と共に余一人殘されたり、先を急がぬ旅にはあれど、さて小山へ廻り着いてからが例の乗遅れにて新聞の反古と睨みくらべは衰られずと。これより急ぎ足の路すがら、小山より下りたりとちほしき客に遇ふことも多し。兵士の骨格いよ選しきが、日に變ぐるを厭ひてか、

帽の下より絹の手巾にて顔を包みたるはいやしく。既足になりたる坊主の、髪みつき
 の下駄手拭に括りて提げたる、どこその縁日に鯨の鯨まゐること定なり。夫婦とおぼ
 しき二人連、女は切株に腰うちかけつ、剃き畢りたる柿を小刀にて二つに割り、「お
 前さん」の方へ齒の喰てるない方を出したか何だか、そこまでは知らねど、男は荷擔
 きの大役なれば汗を拭ひながら、ヤレ喉が乾いた、ありがたい甘露々々と舌鼓うち鳴
 らす、小さい方の鞆を妻が持ちませうと夫を勞はれば、何サそれには及ばぬ、山とい
 つても、もう一ト息だ、くたびれたらうが辛抱しなさいと、正真正銘紛ひなしの西洋
 流、他所の目にも嬉しかりし。中に、姉妹とおぼしき人品卑しからぬ女性、小説家な
 らば下着が何縮緬、帯が繻珍の何模様、羽織の紋が何、櫛が何、簪が何、と細君に頼
 まれた買物を途中で復習するやうな文句あるところなれど、われら、いつも切下げ髪
 が後家にて、振袖が嬢さま、高足駄に杖が按摩にて、烏帽子束帯が神主、籠は柳の
 下に住ふこと、決めてゐる丁簡なれば、別に衣裳に眼もくれざりき。眼を留めても仕
 合せなことには、皆目解らぬなれば、このところ髪形衣裳は凡て「何」づくしにして、

その姉君瘦きすの面に瘡癩の青筋ギリ／＼と動かしたまひ、突りたる聲して、こんな
 ひどい目に遇つたとはありやしない、歸つたら、さんざ自慢してやらないぢやと仰せ
 られける。これが功德にて、二間隔たれる先の井戸まで水汲みがうるさしと咳やく下婢
 の口に封蠟つけたまふなるべし。聞けば一兩日前、さる年若き女の夜に入りて小山に
 下りたれど、宿るに家なく、馴れぬ山路に谷河の水音狼の吼ゆるかどまでおそろしく
 さめ／＼泣きゐたるを朴訥は仁に近き村の爺三三人して荷物を擔ひ、松火振り照らし
 て山北まで無事に送り届けたとやら。むかし東海道五十三驛、箱根八里は馬でも通ふ
 を知らぬやら、水盃に暇をして立出つる後から、切火に波の花蒔きて、御無事にち戻
 りなされど涙ぐみたる人心の弱さよ、三圓半を抛ては鼻が障へるやうな大山箱根足柄
 山、硝子に彫みつけたる窓繪と眺めて、飽きたらばうつら／＼と夢を載せて魂は奈良
 七重七堂伽藍八重櫻、お好み次第撰り取り次第に浮かれうぞと、一足の草鞋代と二哩
 の涼車賃とを秤目にかけて初めて大悟徹底されたる當世の舍利弗尊者も、笑止や古い
 ところで智者に千慮の一失、新らしく洗ひ張りして曰く涼車に線路の逸出あり、家を

背負子せうぶこをかへあるものを手提げ鞆たもとに困して人間一疋、そもや春の木が穉こにては冬の木が枯かれど、名稱なづな自詮みづかが定ならば、僅わずかに三里に足らぬ小山の停車場まで、一本齒いっぴんの下駄穿くだくいたより危あやげな歩あみ振まは何事ぞ、天女の五表いつたは知らねど凡人の入苦いりくる今日のあたり、借問かかす『蝸牛酒かまどの肴さかなに遣やはせけり』とはどの口で仰おほせらるし。

化粧けしやうといふことはせぬ山里の女も、谷河の水やがに洗あひ潔きよめたる髪かみの艶あつなるを、山椿やまづきの油あぶらに塗ぬりて黄楊わうやうの小櫛こしに梳かきたる、年は十五ほどにもはるし、色いろはくろけれど眼涼めずしく口の利とき方かた、才さいありげなり。柳行幸やなぎゆき一つかたげたるが息迫いきせましくもおぼえぬかして、客人きやくとの挨拶あいさつ淀よどまず。三日間に五圓ほど儲けたることを手柄らしく物語れば、客は、透とほかさず、その金貯めて何にするぞと問へば、ハ、東京見物とうきやうけんぶつにまゐりますとは、これぞ女子心に衣い着きせぬ誠まことなるべき。愛あいらしの乙女おんなよ。人形土産にんぎやうどさんに買かうて来こよ、都みやこには珍めづらしき花簪はなかんざしもあるべきぞ。露つゆの乾かわぬ間まを染ぞうる花はなの色いろうつろひ易やすきを觀みじたる、それは戀こひ。これはものつと咲さき出でてたる姿すがたの、ちうたきとはあらねど、野分のぶさらしくの風かぜ黍烟あしより吹ふき初めて行く水みづの瀬せに愁なみだひあるげふこのころ、うら若わき心こころはら

も伏屋ふしやの墻かべにぬむる雛鳥ひなどりとともに、草くさの葉末はの露つゆより圓まるく珠たまより清きよき夢ゆめをや樂たのしむらむ、行未幸ゆきゆきなれかしと、我心こころの僻ひそみ一切いっけつを草鞋くさじの爪先つまさきに衝つきかけたる馬糞うまふんのからびたると共に酒さけ勾か川がわに投なげ入れける。川がわは雨あめに濁にごりたれば、瑠璃るりの如ごとくに雲くもく清きよきはなし。粘土ねりを溶ときてうす黄色きせうになりたれば、崖たけに蕨わづらえられたる蕎麥そばの花はなのみ雪ゆきのごとくに白しろく目立めだちける。

路傍ろぼうに座まだらけの硝子箱しょうこばこ列りべて菓子柿かしなど露つゆげる俄商人がわいしやう、賑にぎはしどにはあらねど縁えり日ひめきてをかし。谷々村ややむらといふは、山北やまきたと小山こやまの間に介ま在ある寒村さむらにして、むかし大久保加賀守おほほろかがのしゆ忠貞ちゆうてんの預ありたる關所せきの跡あとあり、番頭ばんとう一人、常番じやうばん二人、輕卒けいそつ一人を置おきて嚴重げんじゆうに警固けいこせしとか。箱根はこねに仙石せんせきの關せきあるごとく、足柄あしはらにこの關せきありとやいはまし。

路ちすがら注しゆ意いして線路せんろを瞰のぞ下くだしたれど損害そんがいを見みず、これならば旅客りやくかくを下くだすにも及およぶまじと呟つぶきて、谷々村ややむらを過すぎ、小山こやま近ちかくなりて線路せんろを通行つうこうすることとなりしが、こはいかに、さても慘あたらしや、枕木まくらぎを布ぬきたる土堤つちづの雨あめに洗あはれて酒さけ勾か川がわの淵ふち深ふかきになだれ落ちたりければ、二條にじやうの鐵軌てつぎのみ幸あくも空そらに懸かれる電線でんせんの如ごとくにフタつきしを、聞き

はあやなし生憎に、黒煙漲らして流關車鋭く乗りかけたれば、重量に堪へず、鐵軌は鉛を振ちりたらしむごとく、繩を締ひたらしむごとく、車は川の底へ投げ飛ばしけるなり。昨日『時事新報』の狂畫に流車の綱渡りといふが見えたるは是なり。あまりのいたむしさに目を掩はんばかりにして疾く行き過ぎたりしが、針ほどを棒杭の立語に語るを聞けば、四十八人死したり、擔架にて十二人ほど沼津まで搬はれたり、亡骸も見當らざるが多く搜索中なりなど、いづれも酸鼻のきはみなり。

小山停車場まで迎りつきたるに、流車は半時前に出發して次の列車は二時間半も待たねばならず。かゝる折ならでは來らるまじきところなれば、足の向くに任せて、いろいろあるきす。宿屋二三軒、いづれも神武以來の大繁昌、締ぢぎれたる蒲團を丸めて乾すともなく投げかけたるは、疊む暇もなければなるべし、缺けたる火桶に消し炭盛り上げ、漚團扇バタ／＼の音は二階の客の飯をや催促せる、手を叩く音と混じて小女ひとり忙はしげなり。椽側も臺所も選ばず、膳倒れ箸飛び徳利轉がれる狼藉をも厭はぬこそ、客も物貰ひより腰を低くして茶漬の恵み、ヤレ嬉しやと開けて口惜しき蓋を

刎れば豆腐の汁にて四十何錢の勘定、これはどばかり、屈托頭に腕拱くもをかし。余は蕎麥屋に躍りこみ鰻鮓一椀平げて、自銅貨一つだけの幅を利かせたる東京にて無かりし圖なりと笑止がり、停車場に戻れば、入口は驛夫と巡査と旅客と荷擔きと胸突くばかりに押し合ひ、足を踏む、袂を夾むと罵り騒ぐ、さながら廣重の圖に見えたる大井川の洪水なり。このときの荷擔きの相場、五貫目以下五十五錢といふ相場なりしことだけ、立聞して手帖に記してありき。

詮方なければ往來に仁王立になりて欠仲交りに『天則』てふ雜誌を表紙の目次より廣告まで讀み了りしが一時間も猶豫あり。これではならぬと、そこらの露店を漁りて小石の如くに乾固まりし古梨子一個を三錢にて買ひ求め、力仕せに皮を剥けばがり／＼ぞ小刀を磨くやうな音したるにて甘さ加減も推し測られ、假に砥石梨といふ至つて風流なる名を冠させたり。

待つ人多ければにや、幸に例刻より早く切符を賣出したれど、例の砥石を噛むといはんより舐りつゝありしかば、悠々と土堤の芝に兩足投げ出して憩ひける。やがて切

符賣る窓まで寄するともなく押しつけられたるに、切符盡きたりとして驛吏はインテ盡
とペンとを控へ、無文の切符に平假名にて驛名を認めつゝあるなり、一つ先の御殿場
までの勘定を算盤に當りて七減く三殘る、ハ、九十三錢のお釣とは、綿密呆れたもの
なり。

御殿場にて涼車を下りて乙女峠へ向ふ、此あたり一度は跨にかけしところながら秋
の景色亦一入なり。蝻嘶の稻葉に腹すれる音を聞くほどの閑けさも快く、紫山子のい
かめしく弓矢を把りながら笠に狼藉せる鳥の糞を掃はんともせざる、この君何ぞ仁な
るやとほしゑみつゝ、道もせに咲く刈萱の花のしほらしき、さては女郎花の飛びく
にわくら葉の中に色を着けたる、光琳の詩繪に似たる花野かなといへる某氏の句を
もひ出づるものから、蟲の聲堂守もなき石地藏の肩のほどりより聞えていと寂ひし。
旅は秋のこと、くゝと合點して、一村家の籬を繞れるとき、ぶら／＼痛みほうけたる
青風箆に頭ゴツリ叩かれたるもあもしろく、狸にや荒されけむ一叢の芒の横倒れにな
りて、ちよろ／＼流れの清水に穂を洗へるもやさし。その流の中にかなる女臈の召

されたまひけむ、さまで鄙げならぬ塗木履の古くなりて剥けたるが、泥まみれに捨て
られたるも床しからずや、暫らくは乙女峠の麓に佇みて徂くさ徂るさの馬士が鞍上長
閑く煙管スバ／＼吸ふを心無く見送りしが、馬は茅萱の中に分け入りて遠くなるほど
鈴音幽けくぢやらん／＼、笠のみほの白く見えて松茸の歩むがごとし。

朝を掠めて吹落されたる蟬の羽音さやかに聞くと秋なれや、ふり下げ見ればこゝ峠
の半まで上りし。むかし渾然たる一大極、清濁分ちて上下二となる、一は天、一は地、
このとき大塊その力を戮せて空に撃ぐ一玉環、三國を襟とし入湖を帯とし、氷雪千秋
空虚に捲んで、紫氣星樞より低く垂れて之を繞り、朝暉には白玉となり、夕陰には紅
蓮となる。吾富士なるかな、吾富士なるかなど、假の臥床に草を藉きて仰向けに轉が
り、このまゝ荷うて走らるるもあどろくまじき人の態を残して、吾魂は澄みわたる空
にや上りし、花野を駆けめぐりて地にや潜みし。白衣や、蒼狗や、野馬や、塵埃や、
有情無情何でも来い、皆吾友なり。鵬が大きうて鯛が小さくともこちや知らぬ、雲を
踏む仙人何の羨しからう、今のおのれぢやと、暫くの石佛も草露冷かに唇に觸れて玉

女が攀ぐる承露盤の甘泉一滴、真髓に宿りていつしか我に歸れば、哀しいかな雲は愛鷹山に列りて旌旗の影あり、雪は芙蓉臺に閃きて刃鋏の光あり、盡大地を肅殺す秋の風。况んや微軀これ原上の塵、果敢なきかなと涙墮るをおぼえず、自然心無くして人を致せるか、人に心ありて自然と化せるか、人願はくは悟道をいふ勿れ、行脚を説くを休めよ、破れ笠に天地を包みたる法師も聞かねば、頭陀袋に宇宙を詰めこみたる俳諧師も見えぬげな、と吾身の非力に比べて他の人間のわざくれを羨みするとはあらねど、おもしろからず念ふ。

乙女峠より仙石原に入り、木藪の新道を底倉へと下り、かくて湯本より馬車にて國府津に駈つけける胸算用なれば、名残をしけれども峠を除きて富士と別れんと、視れば路は十文字といはむより米字形なり、細くとも遠き方を取らむと辿りゆくかなたに馬の鈴音、得たりや應と下りゆくに草茂くして路愈よ狭く果は小石だらけの凹窟へ轉げぬ。ハテ何やら迷ふたやうだと心付けば仰ぐ限り皆蓋山にてこれらの路は險へは扇の子骨なり、雨水凄まじく崖よりたぎり落つるとき、土を洗ひ草を流してさのづと路を

拓きたるべしと推せるものから、再び今の路を逆戻りは智慧がなし、かゝるをり野猪の勇こそ好ましけれど、ゴロタ石を陥みしめつ、蓋の根に纏り、幸して一山登りつくせば猶一つの山あり、邪魔な瘤めと肩より高き蓋の中を力任せに掻き分けて陥む足土に着かず、無二無三に這ひ上れば又山なり、瘡癩は起る、頭は痛む、一息に突貫してくれむと幅幅傘を振りかむり、縦横に蓋を叩き伏せ既りがちなる身を悶へて前めは前むほど乙女峠は遙に右に離れて、こゝ猪鼻ヶ嶽(俗に金時山といふ)の支脈なるらし。失策々々、早く頂へ攀ち上るに若かずと、瘦我慢して山の半腹一笏の平地を剩すところまで這ひ上りしが、靜に立てる巨漢の如き山又山、これでは堪らぬと元氣俄に銷沈すれ、ば時なるかな、腹空しくして柿のヘタなど、そこらにあらば拾ひ兼ねまじき、この世からなる餓鬼道の苦しき。今となりては下りもならず、上ると猶更難し、雲を抱きて空山に假寝の草枕は風流なれど、残念ながら餓えては洒落どころでなしと、心のみは弦を離れたる箭よりも急におせれど、足は千曳の巖を括りつけたることくに動かず、絶體絶命、羽織をうら返しにして手足を包み、この蓋山を魚貫してくれむ、見當正し

く轉がりたらば駿州深良村あたりへ下ることあるべし、損ねたりとて二萬由旬の無間地獄へも墜ちまじと多寡を括りて身構へたれど、途中に眼眩み岩角に肋骨折られた揚句が村役場に住所不明行倒の廣告は褒めた話にあらずと、怯れては吐く息青く吾命は彈指の間に迫りしとぞおぼえし。

行け、行け、地を蕩して行け、あるかや草も木も蟲も獸も我を妨ぐる力ある者ならず、土に咋ひつぎても行くべしと、茅葺を掻分くるといはむより没するが如くになりて走り出でしが何やらの紐に足を縛られ、取上げ見れば古草鞋、さてこそ路ありと覺えたれ、蝙蝠傘にて撥ぐりを入れける、草いやが上に生ひ茂りたれど、前ほど抵抗の力強からず、膝より下の運び袴かに隙あるは人の通は古徑あるに極りたりと、俄に勇みて辿り行けば馬の鬣の筋目ほどの、これをも一條の路といはべしと、下り阪になりて初めて葦山を離れたれば乙女峠の頂に近し。何だ、前ど同じ路に戻りたるなり。
金泥を轉きたるが上に臍脂を流したらむがとぞき雲、芙蓉の心臓ともいふべきとぞ
ろに茜色の帷を垂れ、神女鹿車に伴はれ驅馳としてこの靈府に還幸したまふ。日は暮

れたり、仙石原へ下ることおぼつかなければ今夜は御殿場に宿ることに決め、峠を下りぬ。草の戸の燈影おぼろに垣根越しに足許に落ちたるを拾うて訪ねたる麓の一間家、行水遣ふ男の訝しげに透かし見るけはひなれば、咎められぬ先に我より御殿場停車場までの路を問ひたるに、土地の人ならば畝道のうねり何とも不分明なりと、若者一人藪蚊をハタきながら我を送りくれたる親切今に忘れず。道すがら闇の木の下道、ホウ、ホウ、と鳴く鳥は何といふとぞ問へば、籠昇鳥といふとぞ、昔の道中に籠昇く男の息杖を肩にして、ホイ、ホイ、と拍子を取りたる懸け聲にもひ合せたるらし。さる年の夏の夜半、鎌倉八幡宮の石段に蹲くまりて靜に蓮の花の闇をつんざく音を浴びしとき、石橋よりこなたの一叢茂き杉木立にて、ホウ、ホウと鳴き止んで羽はたきの音遠くなりゆきたるが、冥途より招かれたるかどまで寂しかりし。籠昇鳥などいふ騒がしき名はふさはしからず、成ることなれば主のなきを幸に閑古鳥とも命名せまほしけれと、『俳諧歳時記』繰りひろぐるまでもなし、秋季に閑古鳥はこぞらぬと詮索だてうるさければ、解らずば猿にして置け、我は只淋びしき禽とのみ。

停車場前にて若者と別れたれど、秋季大演習にて旅館はいづこも混雑なれば沼津宿りと決め、宅まで打電せんとて停車場に到りたるに、頼信紙ありて印紙は買らず、さる旅宿にて譲り請け、取返して用を果しつ。小山よりの流車を待受けて乗る、折しも小山行きの流車と落合ふ。こなたの窓より苦勞性の女、かなたに向ひてモシ言さん、悪いことは申しませぬ、こゝても下りなされ、小山へ行ても泊るところはござんせぬ、松火點けて慣れぬ山路難儀でござんしよと、我身の苦しみに想ひ比へて他し人までの親切、骨に徹して嬉しかるべきに、さはなくして佛頂面に、小山までの切符買ひたればと拒みて餘計な世話といはぬばかり、こなたの乗合は皆難儀したる仲間のみなれば腹立まされに、七錢ばかり元にするを氣遣うて十倍も懐中が痛まうと、その時は泣くまいと悪口雑言、あさましけれど、かなたにても女の志、誰ありて耐むものなかりしぞ恨めしき。かくて西東、流車は別れてうたゝ寝の夢を沼津まで搬ばれぬ。

沼津はこの時、始めての旅なれば杉本屋桔梗屋など、よき旅館のありまとは知らず、停車場前の何とかいふに草鞋を釋き、商人らしき男と合宿しけるが、晩餐のを

り、魚も飽きたれば菓の中の子鼠を焼かせて味ひたし、なか／＼に捨てられぬ甘味ありとこそ聞け、なご得意になりて語る、初雪に小便する奴なるべしと興さめて寝につく。夢寐彷彿、意はぬ電信に安からずらばし召す母上の御姿あり／＼と見まつりて、夕飯に箸のをれたこととさまで氣が答めらる。

翌くる朝、床の中より欠伸しながら臂を延べて蟲喰竹のわざとらしき横窓を開くれば、箱根山うす紫のつぼすみれ、二沙三沙誰が染めけむ、富士はあさまやかに拭はれたる寒水石のごとくに空に浮む、願はくはこの山の雪を掬ひて凡そ世にありとあらゆる妖氣を洗ひつくさむかな。

宿を立出づるとき、風呂敷包みを抱へて肌寒げに身かれ行きし籠中の老婆を、店の若い者指さして東京日本橋に人に知られたる瀬戸物屋の隠居、三たび大火に遇ひて身代を灰となし、今は三島の宿に縁つゞきを便りてそこに厄介の身の上話、萍水定りなき世のさまや、秋風二毛を吹き、老女益す瘦せてわづかに狂せず、風車殊にいたむし。

こゝよりガラクタ馬車に乗る、狩野川の風色や、佳なり、黄瀬川の橋墜ちたれば舟にて渡り、他の馬車に乗り替へて三島驛までは軒つゞき、平坦砥の如き舊街道を揺られながらに駈つたり。

雪になりたや、箱根の雪に、溶けて流れて三島へ落ちて、三島女郎衆の化粧の水に、洗ふ腸酒に浸して暉けや三味線、うてや鼓のかしましき。名にし負ふ大地獄、小地獄、さては死出の山襄の河原に聞き怖ぢて、箱根の關を目せき笠、忍ぶもひに通らぬけたる裸一貫の旅がらすも、山一重のこなた三島驛となれば、忽ちかほる極楽浄土、歌舞の女菩薩が御功德こそいやちこなれど、勿體なけれど拍手は三島明神へうち奉りて御賽錢はこなたへはづむぞかし。昔はさばかり、賑はしかりしこの驛も、無常はいつの世に訪まりていかなる時に畢るべき、見よ見よ、煩惱の狗に舐らせたる、遊君の骸骨何百を珠數撃ぎにして、秋はいつれ何處ぞの世に埋めてより、このかた、朝な夕な瀛車の笛のみ聲高うして箱根八里の馬士頃さへ聞えずなりければ、施朱傅粉、媚を一夜の客に求むるよすがもなく、さすか御神燈に纏濁は絶えされど、秋風襟にひらやりと

して手焙に灰の冷かなるをかこつ小傾城もありぞとよ。

三島社前、右すれば下田街道に岐るゝところにて馬車を捨て、明神に詣でぬ。石の大華表を潜れば池ありて石橋を架す、渡れば又門あり菊の御紋章を鏤む、本殿は古樸なるが中にも梵椽柱楹いかめしく、頭の俛るをおぼえず、欄間の彫刻は金網にておとそかに張りつめたり、暫く神前に祈念し、これより驛を外れて箱根の古道へとかかりける。

石高道の途中に草鞋を切らしてはかなふまじと、準備のため今井阪にて求めたるを腰に下げ、山路にかゝりてテク／＼歩き、古道昔滑にして關風ふかく鎖し僅に草を焼いて路傍の断碣を看るてふ昂古の客今も猶ありやなしや。星霜三百年、色替へぬ松の並樹も嵐に折れて薪となりたるが多く、捨草鞋春の雨に朽ちて藁の床を布き、破れ籠秋の風に離れて野菊に竹を添へける。されば拙人、獵夫、草荆童の外には落魄書生と托鉢法師、それも深山の花にあくがるゝ風流のすさみにはあらで、瀛車賃あぼつかなきための行脚とぞ聞えし。

古道に遣れる昔の傍は關の趾と寺小屋あり、塚原の普門院と扁額ある寺に、才地頭の悪太郎ども、本はそつち退けになりて天井を仰向きながら諷がしく讀む本文聞えがたかりしが、よも實際教にはあるまじ。わが後に行みたるを一人振返り、二人向き直り、果ては總立になりて、わが帽より、髪の手より、爪の先まで珍らしげに見詰りながら、猶口中にて朗讀を絶たざりしが、わが立去りたる後にて、低くなりたる聲の言ひ合せたらむがごとく、我劣らむと急に高くなりたるをかしき、教師らしきは見えざりしが隣室には秤機の響の聞えたるを聞きぬ、田舎娘のすさびなるべし。

このほどり見るもいぶせき殖生の小舎より、炊烟颯ること、うすくして人に菜色あり、村内協議の上、三ヶ年間物賃ひ入るを禁ずと書かれたる標札の煤に古りてわづかに讀まれけり。黍の實の蔭に乾かされたるは粉に挽きて貯へ置き、飯乏しきときは團子に挽ねて糰に充つるなりとぞ。

法華阪の題目堂は知らず過ぎて時雨阪にかしりぬ、鏡ぼしげなる猿は見えずして瘦せたる狗の草菜の中に跳る眼あそるし。昨日や主に棄てられたる、けふは糰を索

めあぐみけむ、人のつれなきをな恨みぞ、人には汝が知らぬ愁あるものと念じて、三谷より笹原にかしりける。

こゝ三島へ一里半、箱根へ二里八丁の間の宿、むかしの名残は今も猶雨の痕を高麗緋の疊にこめたる御本陣某の店先に憩ひたりしが、茶漬に目差の鯛を賞玩する勇氣なく、悪しき臭するラム子を半個傾けて刺せるを地に吞ませける。草鞋の紐解けて長く地に曳きたるを斬らんとて小刀求めしに、錆びたる刺身庖丁を持来りぬ。こゝへ旅商人二人ばかり通りかきりて柿購ひたるに、わが草鞋の泥に汚れし庖丁を拭ひもせて皮を剥きて興へたる女の無頓着に呆れける。今朝沼津にて購ひたりし菓子を袂より取出してたふさげけるに、この女眼を丸くして包みの新聞紙に氣を注けたりしが、わが棄てたりと見るや、慌て走り出て、直に拾ひゆきたる、さては朝まだきより掃除の邪魔さるゝを苦々しくおもひてなるべしと、わか輕忽を悔みたるが、さにあらずで丁寧に新聞の皺を延ばし、四ツに疊みて戸棚へ藏くしぬ。實に新聞一葉とて折返せば鼻紙にもなり、綴ぢ合せなば小遺帖ともなり、貼り交れば敷物ともなり、そのまゝに用るなば

風呂敷にも代るべければ、この山中にありてはなかくに捨てられぬものなるべしと、このたびは經濟の妙を得たるに感じ入りぬ。

石高道といへるは、廻ほどなる平たき石を隙なく大地に摺り疊たるにて、地面ければ踏み心地よく、おのづと足も輕し。石と石との間に隙みあるところより、塵ほどの土ありてそこに一本莖の女郎花咲き出てたる、露の恵みのありがたさよと、手折りて朝にかざさんとせしが、あまりの哀れさに觸れでそ止みし。このあたり路を夾みて笹原ならざれば竹藪なり、纏々たる竹竿直立箭の如くに聳れるところ、人のけはひ怪しと見しが不意に閃く山刀、すはやと胸悸めけば、大男毛雁よりぬつと現はれて、よい御日和さまでと知らぬ他人にやさしき扱換して藪の中に潜りける。この竹の性濶節にして堅緻年を累ぬるとも盡む患なければ烟管用として伐るなりといふ。古歌にも箱根路や山風そよぐ笹竹の篠にみだれて覆ふるらし、竹はこの山の名物なり。

むかし天の川の底破れて星飛ぶと雨のごとく、秋の野の千草に宿りて姿かへぬるを花と呼びたるはいつの世に訪まりし、われ訪ひくれば花に焦がれ寄る蝶は嬌か、明日

は泥にまみれて蟻にや曳かるべき里のわらへの棒にやかゝるべき、その練絹より麗はしく光澤ある翼を收めて露の乾ぬ間の命を、樂しげに香を浴ぶる、いぢらしからずや。山中といへるに、北條氏の城址ありと聞けど、いつことも索めがたし、豊太閤小田原征伐のをりの古戰場なり、今は葛の葉うら寂びしく風にそよぐのみ、俳諧の骨拾ひたぐはこゝとぞ、勸き返す鐵先に彌縫の一つもなからいでか。眼目してちも、金紋先箱、白毛の長槍匹興を擁し、警蹕喝道いかめしく練り行きたる大名行列、日として退隨せざるはなかりし全盛もこの路なりきと、眼を開けば千年の人事葉楸に落ちて今までありし有像無像、刷けるかごとくに消え、大地に折重なりたる芒の上を冷やかに頬を舐れる、これや無常の風のそよぐと這うて行きける。

絶頂に上る、山割けて潮水露はる、汀は象牙を細く刻みたらむととし、旅人は鏡とや見む玉ぐしげ、箱根の海の鹽ならねど辛き世わたりする蓼摘女を呼びとめて御關所の趾やいつこと問へども、翁ならば知りもせめ、妾は只だこのあたりどのみ、詳しうは知り侍らずと耻かしげなり。あまりに眺まければ暫くたゆたひて、昔し關を司れ

る役人どもが袴纏して白眼睨送せるあたりの芝原に悠々と腰うちかけ、極めて平にして静なる湖水と、極めて高くして潔らかなる富士に對して、わが心亦極めて安らかにして美しくしきを得たりき、故北村透谷氏このあたりにて『我も亦瞬時の詩人たることを得たり』と叫びたりしとぞ。

元箱根に到れば衰へたりといへど、古びたりといへど、さすがに列肆櫛のごとくして昔の節を残せり。権現に詣で、蘆の湯より七曲りを下り、蘆原をひたすら走りぬけて底倉に入り、梅屋といへるに晝食したむ。湯浸りになりて骨まで海鼠の如くに軟化し、何やら歸るが厭やになりたれば、宮下まで人を遣りて電信うたせ、今夜はこれに厄介になりける。徒然のあまり、貸本のおもしろきものを言ひ遣はしたるに、無残なるかな柳菟美談荒木又右衛門の仇討、大に辟易の氣味あり。

男心の相棒に借はれたる秋の日の定まらずして、翌くる日は淡墨よりも一層うすく濁りたる空合おもしろからず、寢て見つ起きて見つする程に、やがて山雨横なぐりに障子を叩き、萬松聲を振ふにはあらぬ喇叭の聲、心得難しと障子を開れば、一昨日乙

女時に野營を張りたる歩兵一大隊、篠衝く雨に歩調を亂さず、仙石原より木曾を過ぎりて今しも萬年橋をどいろく靴音高く踏みならすにぞありける。

二十五菩薩もそれくの役ありといふに、苟くも手足の利く人間一疋、今ごろ晏臥すべきときにあらずと、急に里心が起り、車呼べ俄の御立ちぞと、油紙に火のつく急催促に下婢をマゴツかせ、二人良心地よく泥を蹴て早川の石を轉ばす流れの迅さと、二里の新道を駆くらべして塔の澤に着き、早川の橋二つ落ちたるを、飛びくりに石を拾ひて川を越し、湯本より首尾よく國府津行の馬車に乗りうつり、古道にて購ひたる草鞋一足をさすがに捨てもやらで、横濱への土産に擔ぎこみぬ。

殘芳記

古き都を訪ね來て草根一堆の墳にぬかつき、路傍の花など手向けて、果てはその墳の主が世に時めきたる昔を想ひ、悵然としてはしなき三昧を凝らすとき、吾魂は澄みわ

たる空に上りしか、望みく野邊を駆けありきしか、こゝに土饅頭の前に孑然たる五尺の燈を殘しけるとき、畑に草扱れる小娘の垢つきたる手拭を冠り、色むくつけきまでに淺黒きが、訝かしげに我を覗へるに心つき、立上りて寺の名を問へば『松ヶ岡東慶寺せへつてな、尼寺だるよ』と言ひ捨て、袂を抱へていつこゝか遁け行きぬ。

石垣頼れて芳草萎々たり、いかなる大名の館の跡やらむと、名はかりの門を入れば、さにあらで寺なると、脇坊と鐘樓の寂ひしげに遣れるにて知られたり。四方の檀越、一吼の鯨音、夢なれや境内の古井戸の細の朽ちたるるときに絶えて、畑に麥の穂の短きが青めるのみ今も新らし。

その奥の小高き岡に上れば、巖を鑽りたる穴の中に塚あり。東西三間、南北五間、木柵を環らし、華表を建て、『後醍醐天皇皇女用堂大和尙御墓、宮内省』と標札ありける。いと長しと一拜して、傍を顧るに、數多き石塔の中に別けて高きが、甕に文字を彫みつけたるを、試みに苔苔を剥きながら墓したるに、こはいかに、表には『天秀泰大和尙』背の方には『正二位右丞相秀頼公息女』と、初めより由緒ありげなる古刹なんめり

とはおもひしが、俗に鎌倉の縁切寺として、遠近に名の聞えたる東慶寺とは、さてこそ。

岡を下りて本堂と覺しきを訪ねたるに、この一棟は普通の建築にはあらず、椽柱椽板、すべて梅檜の良材を用ゐ、臺は高麗縁の備後表、天井は盒の内に藍と金の菊花紋を繪きあり。金銀泥の貼壁、白木の厨子、黒線打たる格子骨の窓障子、丹塗りの經机、一として工匠の手技凡に超えたるものならざるはなし。實にや錦欄は破れたりともたふとく、梅檀は朽ちたりともかゝりあり、庇いたく傾きて、柱に雨の痕うす黯き古寺もむかしを忍べは何となう床しきに、聲高く案内頼む。雪眉の嫗の衣は佳きものとはおもはれねど、品格賤しからぬが、庫裡より出て來り、こなたへと余を六疊の奥間へ請しぬ。瀝茶など啜りて四方山の物語りす、この嫗は現住職なる尼君の幼きをり乳まらせしものとか、いつれの御藩に在するやと問はれて、余はいたく困じ、父君の若かりしときをそのまゝに、讃州高松の藩なりとらば、高松さまは結構な御大名でござりましたと、それより紀州公の昔話など語らむさまなるに、金紋先箱の行列は錦繪の外に見たるとなき余の、何として挨拶なるべき。やうやく話を轉じて先づこの寺の由

緒を聞く。

當寺は臨濟宗にて、舊幕のころは、寺領五百石を死行はれ、被官雜役をも召抱へ、總門山門方丈はいふも更らなり、脇寮には蔭涼軒、永福軒、青松庵、妙喜庵、海殊庵など、ところ狭きまでに列りたるを、今はわづかに蔭涼軒のみを遺して假に東慶寺と唱へ、その他は皆維持の途なきにより、取壊ちて薪となしつ、徒弟の尼法師も凡て解放されたれば、残れるは尼君と、この姫のみなり。

寺の開基は、賴朝の叔母美濃局といへど定かならず。弘安七年、北條相模守時宗逝去せられしかば、後室その明年に落飾して當寺を拠めたり。室は秋田城介義景か女にて貞時の母、法名潮音院覺山志道、今に至るまでその入寂の日、十月九日を開山忌となす。慈悲深き女性にて在はしければ、

貞時へ願ひ候は出家の身ながら女の事に候へは利益の種も無御座就夫女と申候は不法の夫にも身を任せ候事尋常に候へ共女は狭き心にては不圖邪の思立にて自殺など致し候者有之事に候間三ヶ年の内當寺に相抱何卒縁切り候て身輕に成候寺法相

願候

天聰を経て、その意に任せらる。道門に入るに紅粧何んの冥助かあらむ、則ち麻衣草座、安らげく佛を拜して、あのれも亦香火千秋なることを得たる、この尼が温き慈悲の涙に潤ひしもの、知らず、幾何の裙釵なりしぞ。第五世用堂尊尼と申し奉れるは、後醍醐の皇女、當山に入りて薙髮受戒したまふ。倚來の婦人三ヶ年を経んこと不憫なりとて、更に二十四ヶ月に定めたまふ。應永三年八月八日巳刻入寂、當御代より鎌倉松ヶ岡御所と唱へ永く紫衣を用ゐて、格式他の尼宮御所と同じさまに、昇りしとなり。この建物蔭涼軒といへるは、駿河大納言忠長卿の舊館を遷して、修造を加へられたるなり。かくて廿二代玉瀾(高辻中納言卿の女、喜連川茂氏が養女となり、入院)が元文三年五月、退院ありてより無住となり、蔭涼軒名代を勤めて今に及ぶ。そは寺の制規として、いとやんごとなき御方の姫君にあらざれば、住職たるを、許るざればなりとぞ。

こゝに哀れなるは廿世天秀尼なり、大坂陥落のとき、秀頼一男一女あり、男は國松と

て東兵に捕はれ、六條積にて斫られたるは史に明かなり、一女はその行末を審にせず。今松ヶ岡過去帳、及び明治元年神奈川縣廳に差出したる由緒書に由りて按するに、天秀は秀忠の孫、家康には外孫に當る。亂後は秀忠の夫人淺井氏に鞠育せられ、辛くも恩ならぬ恩に消え易き露の命を保ちたるを、元和元年家康の命に因り、當寺十九世瓊山の弟子となして薙髮せしむ、時に甫めて八歳。由緒書に曰く、

此節從_ニ 權現様_ニ 御文を以被_レ 進候者何_ノ 願の筋御座候者無_ニ 御心置_ニ 可_レ 被_ニ 御上_ニ 由被_ニ 仰進_ニ 候其節之御挨拶被_レ 成候者尼之儀に御座候へは別而望も無_ニ 御座_ニ 開山より之寺法無_ニ 斷絶_ニ 永く相立候へば不過_ニ 之儀思召候由被_ニ 仰上_ニ 候へば御望に御任せ被_レ 成候由。

余は此一節を讀みたるとき、數行の落涙を遏め敢へざりき。尼の儀に御座候へば別して望も御座なく』の一語、何ぞ夫れ冷酷なることや、穀粒として死に就く囚人の言、哀は則ち哀なりといへど、おのが犯せる罪を懺悔するは、猶負へる債を償ふがごとし、只た八歳の少女何の罪ありてかくまでにいたはしき、天なる哉。石郎の奇才を以てし

て乾坤一擲の賭を關ヶ原に失してより、日和見の諸大名、葵榮へて桐花凋落するは近きにありと下せしは外れさりき、黒風白雨頻に大阪に荒れすさみて、さしもの名城も大厦顛るに垂んとしては綺紉の手に支ふべきに非ず。功名手に唾して取るべしと競ひ起りたる天下の諸浪士が、欄を叩いて潮圖熄んぬと浩嘆したる時は、父や兄や幽明亂離して安くんか適き給ひけむ、哀むべし當年林の如き榮戦も、今やこの一塊の肉を庇ふものなく、六十餘州眇たる軀を容るに地なかりしを、幸に阿翁か狼の涙ほどの慈悲に憑り、例へば羽弱き蝶の鬼繻に置く露に依りて命を繋き留めたる如くなりしが、おろかや豊臣氏の胤を絶つは忍刻なる阿翁が畢生の望み、刃こそ頸に加ふることなさせられ、鬢年より蛾眉を剃り、緑髪を落し、桑門に入りて一介の袈裟を頂かしむ。磬を敲く朝、經を誦する夕、金殿の夢さめて香爐一炷の烟冷やかに父兄が位牌を繞りて迷ふとき、よしや火宅魚身の苦を免ることも、雲水飄泊の迹誰か哀れと見ざらむや。花は飛びて杜鵑啼けども白馬城門に嘶かす、塚は荒れて蔓草繁れども金瓢を櫻檣に看す、呀、嗟、家亡ひて骨肉離る、妾が欲するところ、俗の昔をなもひ出づる銀釵にもあらず。

尾の今に返りて紫衣にもあらず、『開山よりの寺法斷絶無く永く相立候へば之に過ぎず』則ちこれにて足れり。傷心何ぞ堪へむや亡國の涙。かくて天秀尼は正保二年乙卯二月七日を以て入寂しぬ。松陵一杯の土、一棺の室、長へに芳魂を瘞めてこゝに滄桑を閱みすること三百年、日矣雨淋せる斷碣を匠りて黍離麥秀、それすら行客の憑吊するものなく、古籠又衰頹して絶えて玉履の門に到るものなし。

過去の三百年は、豊臣氏にゆかりあるものは一木一草の微も凡て『繼子あつかひ』に遇せられたる世なりき。中井竹山の『逸史』を作るや、秀順を名はすして『繼子』なる代名詞を以てし、而してこの嬌と孤とを遊歴に陥れたる江戸の大狸爺には『大神君』なる敬稱を以てせり。當時之を難して一部關東に諛献する書なりと誓りたるもの、海内唯一の頼子成ありしのみ。史家にして斯の如し、優孟にして衣冠せる小詩人の如きは殆ど言ふに足らざるなり。

鎌倉には東慶寺を除きて、猶一の尼寺あり、扇ヶ谷なる東光山英勝寺是なり。太田新六郎康資の女、家康に仕へて枕席に侍す、寵ありて水戸中納言頼房卿の母に准せら

る。家康薨する後尼となり、頼房卿の息女を毒染せしめて、開山第一祖となす。されは同じき尼寺ながら東慶寺は豊臣氏の遺孤、これは世に時めきたまふ御三家の一なる水戸家の息女なれば、當時幕府の士人が之を視ると、吾家の神棚と隣家の佛壇ほどの區別ありしを知るべし。林忠山(福)は嘗てその『東行日録』慶長十一年作に『入鎌倉。望寺院。則悲浮屠之賊。君惑民』と云ふ佛嫌ひにありながら、特に英勝寺のために記を作りて『欲令此盛學垂于無窮』など、筆を曲げ文を弄したり。これも亦佛嫌ひの一人なる太宰純(傳)の『湘中紀行』には、東慶寺を目して『夫尼寺禁男。以防淫也。今乃禁男以助世之婦人淫行。孰謂松岡非淫婦之幾林乎。』と惡聲しながら、英勝寺には一言もこゝに及ぶことなし、たゞ『寛政非東慶寺比』と規模の宏壯をたゞして、他は知らざるが如くせる。阿ねるところあるためならずや。坊主を憎みて袈裟に及ぼせる噂を、さながらにせることをかきしけれ。されば徳川氏の末代、東慶寺の佛燈やうやく冷かになりゆきて、天秀尼の芳魂永く祀られさらむとする、うべなり。

寺には家康が天秀尼に賜ひたる諸什を藏せしとか。金梨子地に葵の紋ある六角形の香

盆一枚種六寸許桐に風の模様ある染付の袖香爐、木理の模様ある青磁香爐等なり。その他に天秀所持の品といへる香箱縦一尺二寸六分横三寸四分あり。又その詠歌二首を自筆に認めたる短冊一葉あり。

咲くときけそれとも見えず山櫻

麓にしるき風のいろかな

柴の戸も春は錦ぞしきにける

花吹ちろす峯のあらしを

これらの寶物書類は悉く圓覺寺に預けありと、今も猶存するや、あらずやを知らず。こは目錄によりて寫し得たるのみ。

興はさめぬを話はつきたり。寺を辭して門を出づ。黄昏告ぐる圓覺寺の鐘、春の夕空にこもり、鶯々と鳴て山内一村の杉木立にかすむ音あはれ。この夜、ひとり寂として離島安らげくねむる大船の村家の塙のほとりを歩む、その塙を繞れる流水に幽かなる音して落ちたるは、椿の殘葩なりけむ。

松ヶ岡東慶寺は鎌倉山の内村にあり、大船の方より圓覺寺の山門を通りぬれば、一二間にして往來の右に當り、殆ど筋向ひにあり。(もし反對に鎌倉建長寺より大船に下るとすれば、未だ圓覺寺に入らざる手前の左となる。)そこに石垣頼れて、上は畑なる小高き岡あり、則ち寺の在るところ。

先づ山門を入れれば右脇に觀音堂あり、その右手なる廡下に鐘を挂く。鎌倉補陀落寺の鐘なりしを、農民地中より堀りきて本寺に納めしとなり。この觀音堂より右手に庫裡、庫裡につゞきて南へと長く横るは即ち蔭涼軒、古雅なることは本文を見るべし。夫れより畑の間を通りぬけ、正面の佛殿は今荒廢洗ふが如く、物置部屋となれり。その右手は稻荷社あり、空。

猶進めば小高き阜あり、用堂尼、天秀尼の墳墓あるところ、詳しくは本文を参照せよ。芳川顯正氏、詩あり。

鐵手難支大厦顛。控將托鉢度芳年。可憐二世遺孤跡。消作松陵一片煙。

鎌倉に遊びたまふ人は、立寄りて香魂を吊ひたまへ。亂松一陵、峨眉千古の恨を照

らす月の夕、最も詩人に可。

神武寺の秋夕

秋くれなむとす、兀坐して草の底に殘蛩のかすけきを聞くに、何となう哀れにおぼえて胸堪へがたければ、破帽を戴きたるまゝ、只ひとり家を出つ、霜道芝にうす化粧して見るから冷やかに、曉の風輕衣を透してそらるに身にしみわたる。

程々谷に出つ、驛寂ひれたれど、松並樹の下に床几を据えて客を呼ぶ媪の聲に昔偲はれぬ。驛外の木賃宿より、齡四十前後とおぼしき旅僧の出でたるに遇ひて友として行く。その人の語るを聞けば、仔細ありて俗にも還り僧ともなれりと、妻子ありやどいへば無しといふ。故郷は四國の邊なれど、家を捨てしより萍草の水に任かせて諸州を流浪す、をかききこも、悲しきこも、背身に骨うつくして神骨鍛えに鍛えたれど、未だ浮世を三界の火宅と見限るほどに眼の白からざるが恨みなりと笑ふ。木賃宿の假

寐いかにと問へば、秋なればこそ、夜もすから蚊に責めらるしことなけれ、月影の傾きたる雨戸より洩れ来るに、首を翹けて青冥を眺むれば、我知らず涕の木枕を傳うて零つることさげしむ。戸塚に到るころ、名も聞かてそのまゝ別れしが、今はいつ地へ行きけむ、ゆかしの僧や。

矢部町の某樓といふ二階の欄干に凭れて往來を瞰下せる遊女せり、嬌啼の痕か、紅粉空しく洗はれて更に粧ふにもあらぬが、口の中にて小聲に俚歌とおぼしきを誦ぶ。家の結構大なるに似もやらで、破障子の風に呻く聲、秋の蟬より細き、いと寂ひし。

戸塚より東に折れて上倉田村に入り、柏尾川を渡る。手拭類にかぶりたる男の、荷馬のたどしきを牽き來れるに遇うて共に語る。この地より二里許離れたる岩瀬村の人なりといふ。『馬を飼ふにもなか／＼骨が折れる、何にしろ一日に麥ばかり五十錢がところを食ふから、それに善い馬なら三十兩より廉くは買はないからぬ。尤も十五兩くらゐで買へる馬もあるが、只た立て歩くばかりだから役に立たない』と、それより正月の話などして長沼村といふに到る。張子の達摩を鬻ぐ家あり、馬士の『養

盛場だから連摩が多く賣れるよ』と、その謂はれを問へば「露のちき上りが善いやうに』と、馬士の秀句に余もまはす笑ひ興して田谷といふに到りぬ。こゝにて馬士と別る、馬も人も姿は堤下に生ひ茂る世に没して鈴音のみいと高し。

田谷に常泉寺といふ古刹あり、寺に大奇窟ありて、さまざまの像を彫る。去年この地に遊ひたるときは陽春三月、野に若草萌え、谷川に櫻の花映り、鳥の啼く聲いとももしろき頃なりしが、近郷の老若男女、花看がてらにこの寺に集ひ、袴を布き、毛氈をひろげ、割籠をひらき、竹筒を仰きなどしけるその中には絲を調へ竹を鳴らすもあり、をかしき風流を見たりしが、今は草枯れくになりて茅葺の奥の蟲のすだくが幽かに聞ゆ。寺を出て一板橋をわたる、水は寺を繋りて玉を憂すれども蘆花残推して一白苔空、野飼の馬の糞草に立ちすくみて淋ひしけに嘶くはあれど、草萌る童はいつくに在る、秋風に動かされて自ら鳴る築山子のそれならなくに、余も詩を吟しなごしつ、聞く人なければこそ。

かくて大船より鎌倉山ノ内に入る、掛茶屋ありて女、お休みなされと呼ぶ、ひき留

められて澁茶を呑み、うら枯れたる野邊の風色を眺めながら、建長寺がその古くに比へていたく微祿したりといふ話を聞く、吾身ひとりの秋にてはあらざりけり。新居閣魔堂に詣てけるに、念佛庵は空しく鎖されて、乞食が晝寐の軒をぞ聞く、塵に塗みれし閻王の衣冠を誰洗ふ人なきぞうたてき。

それより小町村を過ぐ、鎌府盛なりしころは、この地に群臣の邸宅を賜はりしかば、市鄙駢羅して頗る饒富の地なりしとぞ。今も猶村内の通衢農商雜はりて比屋稠密、小町大路など古の名をそのまじに留むるさへ床しきに、屋は茅を葺き、垣は貝殻つきたる柴を繞らせるなど、都めかぬさまこそ却てたふとけれ。

鎌倉にといまるとぞ敷時、滑川の末流夷堂川より左に折れて海濱に浴ぶ、亂橋、枅木座、飯島、皆蕭條なる漁村にして苦屋の煙、簑衣就す門の外には眼に入るものなし。

住吉の「切通し」にかゝる、海面に斗絶すると凡五丈餘の崖上に、一小徑を通してやがて三浦街道となる、前には大磯小磯より鎌倉逗子にいたる一帯の長汀曲浦を控へ、西に靈山夕崎突出し、東に森戸ヶ濱の亂松點綴して、壁へば春の野路に茸草のとびく

色をつけたるに似たり、盆石を伏せたる江の島は、海の奥に泛みて繪絹に一點の青を落したらむ如く、函嶺大山の頂を踏むてゆく雲の峰々、見る／＼うちに立ちに裂けて雪曇いかめしく戴きたる芙蓉の八采、うら／＼かに仰かれぬ。住吉の城趾といふは天正の昔、關東譜代の名族三浦氏の末裔が、強弩の末を頼みてこゝに籠りけるを、たゞめく間に攻め落したるは小田原の伊勢新九郎、一呼して三軍を麾けは八州の草木靡かぬはなく、他日三浦氏の一門を擧げて油壺の波の濺屑となりたるも、この城を抜かれたるがそも／＼蹄を失ひたる馬の運命なりとぞ聞えし。城趾の下は唐人の山水畫に觀るどころの棧道もかくや、風は叱して水に鞭ち、水は啼りて風に御し、聲々たり、露々たり、かくて幾百の春秋を迎へて絶えず休まず、壁の下部を浸蝕して一大洞門を作り成しぬ、鬼斧を借うて一夜に削りたるかと疑はる。凡そ鎌倉より三浦郡逗子にいたるまでの途は、鎌倉より江島に通せる海濱に比して、景象甚だ雄大なるに知る人稀なるは土地の偏僻せるためなればにや。

旗立山といふを越えて櫻山村に出つ、逗子に接通したるところなり。古へ櫻樹多か

りしよりかく名くといひ、夢窓國師この地の櫻をもて大和の吉野山に植ゑしとも傳ふ。田越川をわたる、小兒を負ひたる女、赤き襪の色褪めて断れたるを、幾度となく綴き合せたるをかけて川邊に大根洗ふ、書きて見たしとあもふ。六代御前この川にて斫られしより、一に御最期川とも唱ふ、川邊の小名柳作といふところといと古りなる楓樹ありて、その下に六代塚あり。六代のことば『平家物語』に出て人みな知る、それにも増して哀れなるは、承久の亂に三浦平九郎胤義が勤王の兵敗れたるとき、その幼見等がこの河邊の露と消えたることにぞある。胤義が兒五人あり、長は十一にして次は九、七、五、三なり、祖母の尼養うて三浦の矢部といふにありけるが、幕府の命によりて小見等皆命を絶つべきに定めらる、伯父駿河守義村承りて矢部に向ひ、このこと申ければ祖母おまりに哀れなることに念ひ、竊に十一になる孫一人留めて泣く／＼餘見に訣れぬ。兎徒の胤なれば鎌倉に入らしむ可からずとてこの川邊に据ゑらる。九、七、五はさすがに玉の緒の今絶えなんとすと覺りて、乳母なる人に抱きつきて涕を流すを、末子の三歳なるはひとり何心なく、乳母の乳房を弄ひて嬉み居りぬ、亡情の

削手もこのさまを見て霧に涙を拭ひけるが、日已に暮れければ、さであるべきことな
らすと、おもひ直して白刃の下に四の首を断へぬ、川は今水平は濁れて沙白し、枯葦
の疎らに生茂りたるは青絲の髪の名残かや、竹筥を繞らしたる柴小屋の許に、熟柿の
泥に塗れて落ちたる紅玉の膚の埋もれたるにも似たるよと、そいろに哀しくなりて誓
くは去りもやらず。三歳の小見、喜短しといふなかれ、五代の執權榮華長へなりとい
ふを休めよ、悠々として騎りなき天地より觀れば、かれも蟬の一生なり、これも蟬
蛄の壽命なるべし、見よ、古へ金湯天府の地、今は離々たる黍黍三秋に満つるものを
と、懐僧の感極まりて涙の零つるをさほそりき。

田越の上流は東隣沼間村に溯りて矢ノ根川となる、川に沿って沼間に入るころは、秋
の暑の釣瓶落しとや、見わたす山々霧に包まれてはつかりと裾の方より暮れ初め、眠
れるが如きに、野翁聲をからして駄馬を叱し、牧童鞭を揚げて犢牛を急かす、流に車
しかけて米搗く音やうやく緩かに、田家に粉ひく臼の音忙はしげに水に響く。

かくて醫王山神武寺に詣てんとて、田畦を拾ひて流車の線路を横きる、山の麓に黒

木の門あり、茨にて屋を葺き、樸材の柱もて之を支ふ、雜草茸々として屋上に生し、
花已に落ちて種赤こぼる、門を潜りてうねれる路を喘ぎ上る。右は瘦松疎らに崖に生
ひて麓のごとくなる間より湘海を臨み、左の蕎麥畑にはいかなる人の住み捨てけむ、
柴の折戸もなき茅屋の荒れ果て八重葎のみ、あのが心のまに／＼生茂れるが見ゆ。尙
ほ上り行くに樵夫二人に遇ひぬ、日暮れたれば山を下るなるべし、山の半腹に笠をも失
ひたる石地藏尊の拱手して跣座したまへるが、里人の捧けたりけむ菊の花の色衰へて
煎れるやうに葉の凋みたるを御手に持たまふ。蟬聲あり、聾長くして脛瘦せたり、
葉末の露を舐るも懶ければはや、御佛の膝に力なくまがみつける、いと哀れなり。

麓の物門より本堂に到るまで、その道凡そ五町餘、境内凡て石山にして山を穿ち石
を鑿み、その間の平なるところに堂宇を建つ、鐘樓を匝りて寺前に出つ、寺は行基大
師の開基にして注燈連綿今に絶ふも絶えずといふ、鎌倉を通して遍ねく訪ぬるも、こ
の寺の古きに及ぶもの、一もあらずからずと聞きぬ。

日いよ／＼暮る、杖に倚りて寺のうしろの山に登る、路は九折して一歩は一歩より高

く狭く、竟に窮まりて野草吾肩に及ぶ。尙ほ上れば草鞋に應じて藤の折るゝ聲あり、衣に牽かれて竹の裂くる響あり、やうやく頂に到りたるに、尺地の平なるところに茶屋を建つ、椽は斜に朽ちて絃断れし琴のやうに反れるを小禽をりく、噪きて去る、手拭を尻に布きてやをら座を占めつ、遠く相模灘を瞰下せば、日將さに春かんとして一たひ烟霞を吹起するや、次第に濃かになりて回瀆曲汀畫色を分ち、彩雲たなびきて函根大山の雪と煥映するや、一大紅芙蓉、葩瓣天を貫きてその風景得もいはれず、余は神清み骨冷えて恍惚たる間に、返照漸く收まり、暝烟四合し、山や海や椰や木や、一抹の墨にて皴法を拂へるが如くに消え失せ、眼下の山間に介在せる、益を伏せたる如き一小村より長煙一縷、天に沖して白く淡く竟にそのゆくところを知らず。天地岑寂たる間に余獨り、玄鶴と化して長風に御し、滄溟に向ひて飛び去らんとするが如くに行みぬ。

妙義山の秋

(第二節)

馬車は上野に停りぬ。久保青翠結束して停車場に待てり。余は約せることありければ、秋曉を停車場前の一旅亭に訪ふ、偶々白蓮座にあり、絮談僅に平時、發車の時刻迫りしかば、匆忙席を辭して去る。秋曉詩を贈りておがこの行を饒せらる。

手荷物に小さき風呂敷包一個、地圖と手帖とを收む。上野線は五六年前、三月末つ方の初櫻を眺めんとて、ひねもす飛鳥山に裸の樹をのみ訪ねくらし、鼻かめば耳鳴るほどの寒さ骨に徹へて王子より上野まで乗りたることありしのみ。その先は未だ踏みも見ねど大方鏡と畑ついき、うら淋びしき田圃の景色今更眺めずともものとなりと、折しも紺小倉の洋服着たる學生らしき人の『日本名勝地誌』四の巻を讀めると相對して、懐にせる書を誦せしが、それも倦みて眼を窓外にうつす。遠くは眉黛の如くなる秩父の山々、虚空にふはりと横たはりて空鞍の駄馬に積まれやせむ。近くは裏田圃の影茄子ひよろりと土に轉ひて、行く秋を鋪庖丁の災難死れたるぞうれしき。野分の風に吹き飛ばされて、雀の落ちたる黍畑を隔て、古蒲團乾かす竿の先に、日は夕榮えの色あざやかに、まろしもわが車の汽笛鳴らしつ、走りゆくを、菅笠より仰ぎて見送る農夫が、

手を愁めたる、敏先に夕日の名残を閉かしぬ。

大宮にて乗客の大半は下りぬ。傍の人の商賣がたりするを、聞くともなく耳聳つれば、今工事中なる小佛峠のトンネル、石質至て堅く、一日に一尺截り開く計畫なりしが、わづかに二寸ぐらゐに止まり、請負師は少からぬ損失をなして工事を中止したりと、稚木林に楡四五本紅葉して、ほうけたる旗芒、風には雪と狂ふべき、蕎麥畑の真中に影うすき濫柿二三株、これも秋の錦の敷に入るべきとあもへば、捨てがたかり。

瀬車は畑を横ざり、藪に入り、松、杉、櫟、榎の林を貫く、秋風居酒屋の暖簾に音訪れてより、綿白く、蕎麥の花白く、脛あらはなる賤の女が、小流れに浣へる大根も白く、空尻の馬追ふ男の吐く息亦白からまし、只だわが鬢の未だ暗からざるを幸とす。過ぐるところの停車場、半後、綿俵いと多く積まれたりき。熊谷の宿、長堤に櫻を植ゆ。深谷を過ぐ。見すほらしき土饅頭のほどり、小笹生ひ茂り、禿げたる赤松、衝立ちて人を見る、西洋人參の大きほどなる烏瓜、倒れたる石地蔵のあもてに垂れかへり、石塔を繞りて咲ける夢の花のくれなゐと摺れ合へる、をかしくて哀れなり。

それより、桑畑、松林など、行けども果あらばこそ、礙る隈もあらばこそ、この春甲斐に遊びて間田土着せ、饑鴉噪がしく簇れるをのみ、賭狂れたる眼にはたゞ珍らしく、土堤に咲ける一本の野菊が、うす紫の由縁の色をなつかしみ、その昔、南は多摩川、北は荒川、東は隅田川、西は秩父甲斐が根に亘りて十郡に跨がれる武蔵野の、風蕭颯として尾花波寄る五百年前を冥想しぬ。日度淵に没せむとして、夕の雲は蒼深に湧く八百瀬か、うす墨を流せる中に、一條の糸を拖着て燭の燃ゆらむごとく、草鞋焼く煙幽かにほの白く、残る蚊煤煙と共に風に伴ひて窓に飛び入る。いさゝ村竹繁きところ、鎮守の森のこんもりとせるところ、淺茅生や露のかしらぬ草もなかるべうおほえて肌寒し。本庄、神保原を過るころ、われは雲の卷舒と、雲の色の變化とをのみ観むけるが、初め山吹色なりしは、裾から消えて藍のほかし色となり、又葉鶏頭の赤みたらむごとく茜色さし、やがて總べての色は蒨黄の大風呂敷に裏まれぬ。神流川の鐵橋瞬くまに過ぎ、天の低るあたりには横はれる暮山朶々、眉睫の間に飛び到らむとするを目送して、新町に入りたるは五時半、犬吠ゆるところ、村家の灯兩三點。このあな

り梨畑多し。かくて日全く没し、烏川をわが名に似たりと青翠のいひたる外は手帖に入らず、黯淡たる山も水も畑も家も、混沌の夜色に葬られて、鉛筆持つ手許も定かならねば止めつ、流車高崎に停まる。

こゝにて前橋行の列車に乗りこみ、それと告げられて慌てふためきたるぞ笑止なる。輕井澤線は一時間も猶豫あれば、二人市街をそゝるありきす、市のさま聞きしよりは陋しく、小田原などに比するとも劣れり。芝居あり、牛肉屋と汁粉屋とを一軒にて兼ねたるなど、都には珍らしきものなるべし。蕎麥に腹を拵へ、七時頃停車場に駆け戻り、又流車に乗る。

月なき夜のまかも曇りたる、天地只だ窈冥、烟嵐咫尺に迷ふ妙義山も見えず、碓氷の清流はいづことも知らず、水車の春く音に耳敏てしが、寒氣衣を透しておぼえず窓の戸を閉ぢぬ。

松井田驛にて車を下る、今は倉々たる破驛、むかし中仙道の難關たる碓氷の要路に縁はり、君侯曉早く肥馬に鞭ては、左露雲を分けて入り、前駒露を踏みて斑る、返隨

士が佩刀の鏢、憂々鳴り霜威人を射りし全盛も、無常は響く暮山の鐘、有限は朽つ陰經の雨、旅客の鞋痕日に稀に、周道鞠して茂草となりはてつ、肌寒や知るも知らぬも、一つ火桶を擁し、肘を枕にして離話するむかしの羈旅を今こゝに見るべくもあらず、いと寂びたるものから、さすがけふは町の祭日とて、頬冠りの若者、華奢なる女性のつれ立ち行くも見ゆ。誰家の妓ぞ、媚めきたる三味線に、唄ふは今やうの一ふし、桑間渡上の音など鄙しめむは、いと頑なるべくや。

驛外れまで彷徨ひて、鮮屋といへるに宿かる。夜闌けて燈心の吉丁子をむすぶころ、温けからぬうす蒲團にもぐりこみて、暫くは妙義を駈けめぐらむざる魂を寝む、木枕慣れぬ頭にいたかりしが、結ひし夢は三味太鼓睡すしき向ひの家の、黒漆髹繪の塗枕より、おそろく清かり。この夜、小雨をぼそりし。

昨夜の雨いつしかやみ、朝日はがらかに、椽側近き手水鉢の影を障子にさせるに驚き、急ぎ匆ね起きて支度整へ、宿を出づ。

町の中ほどより南に折れぬ。桑畑の傍に炭部屋ほどの木戸を設け、村芝居にはいか

めしき庵看板、何ぞと仰げば、さても銘打たりな、東京大森舞伎。

畑に沿うて少しく下れば碓氷の清流あり、浮梁人の渡る毎に振動して心を揺かす、満目積沙、碧水その中央を穿透してさし、がにの蜘蛛にめぐり流る。別に低く丸木橋を架けたり、屈みなば衣を洗ふに足りぬべし。この地、寒國の習ひ、屋根板に釘せず、上に拳石を載せて瓦を敷くに代ゆ、凡そ三年にして更むと。毎月言ひ合せたらむ如く、粟の實を珠數繫きに軒に吊して乾したる、正月密柑、田作、柚、榴柿などに交へて祝ひ棚を飾る古例なりと。鶏の米俵隊けるを人の遣はんどもせざる長閑さに、句など案じて川に沿ひ、仄崖を上る。涼車路隘み切りて桑畑の間を巡れば、昨夜見えざりし金洞金鶏の二山、峰尖分岐して剣戟を列ね、截然屹立して峻嶒の大屏風を鑿て、白雲屯まりて流れず、二人傘を揮ひて天を劃し、快と呼ぶ。

路を左に隨ひ、烟草を細に挿みて乾したる家の側より又右に折る。土地やうやく高し、松井田より以東、糶極正に熟して平野に黄蕪を舖く、實りよき秋や、三紋の羽織を新調する人そちらに多かるべしと、他所ながら豊作を誇く。この道、われしが志せ

る山に向ひて右は竹藪、椎木林、左は庚申塚、廿三夜塔、稻荷のよろけ華表などを控へ、坦々として砥の如く通ず。白雲山の中腹に白蟻の爬ぶがときを、眼鏡二つ累ねて覗へば、これぞ音に聞えし『大』の字なりける。

誰のやら忘れし、さまでほうまからぬ『蒲野秋風落葉花』といふ一句このあたりの景色を喝くしければ手帳を懐に収む。路傍に葉黄の枝の未だ紅玉累々たるに及ばざれど、秋風披拂して摧けたらむ如くに縮ぬられ、大地に倒れたるを、傘の先にて掻き起しけるに、俯くと初めの如し、露の恵が重いか、人の情が軽いかと怨じて過ぎぬ。一村家の籬に菊の花咲き匂ひたり、黄菊、紅菊は、七寶の瓶こそよけれ、花賣の籠こそよけれ、かゝるところに白菊の月並霜葩、殊に品高く色潔し。天地岑寂、二人の話し聲途切れたる間を縫うて、桶の纏にてもうつか槌の音、山に反響し、澗に鳴動す、いと興あり。

仰げば金洞山は半腹より上、磨礪削成して雜木を生せず。白雲山は『大』の字あたり、楹か、楓か、丹紅燃へて炎のごとく、山は今にも裂けて飛ばんとぞすなる、近くほど山は次第に低くなるやう覺えしが、一叢茂き篋竹の間を歩き、古道黒門に向ひて左

に曲れば、やがて妙義町なり。おばらやの垣に絡みつきたる朝顔の花、大方は凋零したれど、残れるは粒々くれなるの露を宿せり、紺の筒袖着て裾を端折り、髪も油ぬけて、大方そしけたる世話女房の、藁草履つきかけ、溢るるばかり水を漕へたる方形の井戸側に踞みて米麩々を見ておれば、さうめかす白水は落英を汲みて窪溜りへと、流れ行く、喉乾きたれば、二人逃に樋に口を宛て飲む、甘冽いはむかたなし。おはれ伽羅にて飯を炊き酒を遺水に使ふてふ貴人に、この眞清水を一樽盈たして貽らばやな。

町には妙義山大杉の苗木なと露ぐ家あり、又その隣に文久錢の形したる看板に中央の孔を圍みて永良久屋と書きたる、兩換屋にやあらむ、杉葉の穂を吊したる又六の門は、今も猶片田舎にはありとこそ聞け、かゝる看板は珍らし、種彦の『用捨箱』に擧げたる、祝屋の看板のたぐひにや。この町むかしは、人家どころ狭きまで軒を列ねたれば、三間間口は許されず、二間間口のみ鮓を折に詰めたるごとく、黒門大門より梨ノ木村までうちつゞき、巫女俗人ども夥しく、賑はしかりし。そが舞を神殿に獻するごき黒

髪長く束ねて、緑衫を着け朱袴を穿ち、うつや鼓、振ふや金鈴、手舞足踏、一前一却、肅々として狼藉たらざる古雅の趣、都下規矩のたごやめが、吹彈嘈雜につれて踊るに比ぶれば、なかくに鄙びざりしとや。

菱屋といへるに悲ひ、案内者頼みけるは、けふは朝まだきよりお客さまのお伴をして出拂ひたればなしと呑みしを、強めて頼みてやうやく一人を奪ひぬ。今日高崎の殿さま一族を拉し來らるる筈、その嚮導として殘し置きたる四人のうちを撰びたるなり。やがて鱗々たる車懸近くなりて殿さまの一行轍を列ねて到る。亭主奴婢一同出て迎ひ、僂僂應唯、太だ恭やし。椽先に草鞋結び直せる五六人の書生に向ひて『あなた方早くそこ退いて下さう』と俄に蠅を追ひ立てたる、秋の扇と捨てられしは、漢宮の女ばかりにあらざりしよ。(本編は、奇譚と合作に在る)

古人の詩歌紀行に見えたる大磯驛

海水浴を設けられてより、のちの大磯驛は別墅客館等を列ね、土一升金一升の榮華は、大江戸のむかしを、今こゝに偲はるゝものから、そのむかし驛馬曉烟を踏みて殘月に嘶くとき、夜もすから焚く野火の消えもやちて縷々として青く空に映れるとき、行客首を回らして白雲迢々たる故山の曉色を眺め、愴然歸るを想ふとき、幾何の詩卷を成したりしぞ、今は木は伐られて橋となり、草は蒔られて夢殿に代へられ、都の乙女が節をかしげなる田植唄は微に平塚のほとりに聞くに過ぎずして、誰が家の絃聲ぞ、日にく都門の塵を喚ひ來る。

大磯の地、南は總て海に瀕して平坦なれども北は山を負ひ、西に向ひてやうやく高し、廣袤二里餘、水田少なくて陸田多けれど、土性は赤土にして且つ海邊近きところは砂礫交はり、灌水甚だ不便にして、耕耨は之を山間の涌水と天水とに仰ぐ。故に

山中の人は暇あれば男は薪を探り、庭を織り、女は絲を繰り、綿布を織る。海邊の人は男女の別なく漁業に従ひ、驛路に當りて住居せる人は便宜によりて或は旅客を宿し、又酒食諸品を鬻きてその日くの烟を立つれども、富饒の戸口甚だ乏しかりしは維新前の大磯なりき。されどこゝには尙ほ古代の大磯を説かんとなり。

大磯小磯とて中間五六町あり、南は汀なり、北は野なり、富士は乾の方に見えたり、よろきの濱、小よろきの磯などいふ名所あり、但小興呂伎の磯は大磯の邊をいふなり。

(宗祇の『名所方角抄』)

これ大磯の小地理なり、たゞし富士は今の街道より望むべからず、北方の山に倚て始めて見るを得へければ、當時の驛路と今の驛路と別あることを知るべし。圓位の聖人がこの地にて鴨立澤の名歌ありしは、奥州へ下らんとしけるをりなりと聞けば、奥州街道の衝に當りしことなるべし。されども今わが説かんとするは地理の沿革にあらず。

旅客もし平塚停車場より下りて大道平坦砥の如きところを逍遙せよ、七八町にして一小流あり、渉ること幾何もなくして又一小流を見るべし、前なるは元花水川といひ、後なるは花水川といふ。平塚宿より山下村に入り、高麗寺大磯二村の地を流れて海に入る。丁意が『東海道名所記』に『花水の橋長と四十三間也』とあれど、萬治の頃は新古の兩川を別たざる前なればさもありげむ。今の花水川は寶永六年新に疏鑿したる水路にて川幅は、ところにより二十五間もあり、元花水川は新川のために水路を狭められて細流となり、今にも埋まらんばかり、見る像をげれど、只たその名の優さしきに、想へば一條の水光素絹を布ける堤に沿ひ、花衣櫻折かざして春の吹雪に浮かるる里の乙女の姿、さぞな芳野の山近くありと聞く妹背の川にも劣らじな。由來人間非情の木石多し、櫻は摧かれて薪となり、堤は動かれて畑となる。枕頭古人の日記あり、抄して暫らく昔の風流を夢む。

花水川といへる川を渡りて

咲くと見を散ると見ゆるや風渡る

花水川の浪のまらたま

(道奥の「回國雜記」)

橋を渡り終れば高麗寺村に入る、これより大磯宿の海邊を通稱して、かの

唐夕原といふところも、砂子いみじう白きを、二三日ゆく。夏は大和撫子のびくうすく錦を布けるやうになん咲たる。

(「更級日記」)

てふ唐夕原なり、唐夕原といふ名のいかめしきに、藤原忠房が「名にしおは、虎や伏すらむ東路にありといふなる唐夕原」と詠せられたるは、百餘里を隔てたる堀川御所にありて想像せられたる幻影なりしならめ、香渺たる郊原陰風沙を飛して草葉蕭條の色ありしや否やは今より知るところにあらずれども、「唐大和いろく」に織る錦かな撫子咲けるもろこしの原(讀人不知)にいたりては、堆き砂の中より八千呷の思ひくに生茂りたる風情、得もいはれざる眺めありけらし。

唐夕原を説けば高麗寺を説かざる可からず、高麗寺村といへるは、聖武帝の頃とか

よ、駿河甲斐相模上總下總常陸下野七ヶ國の高麗人千七百九十九人を武藏國に移し、高麗郡を置く、この地も當時その高麗人の屯居なりしと、柿本人麿の『東路のよろこしの里に織てたつ衣をや唐の衣といふらん』を以て、もろこしの地を詠したるものとなすべくは、工匠錯居して衣を織り糸を紡ぎ、一部落を成したることも推測せられざるにはあらず。

高麗寺はこの村の小丘に創建せらる。寺の縁起は之を山僧に聞け、山の廣葉は之を地理書に見よ、余は世人に紹介すへき一を有す。

山上地藏堂に虎御前か持念佛といふがあり、長さ四五尺許なる古楨札一枚、細字の中に『于時建久五年九月十一日彫工鎌倉扇ヶ谷住法橋勘解由、法虎妙惠禪尼持佛』云々と見え、更に大字にて『奉開眼地藏尊』の六字ありて稀有の珍什なり。法虎妙惠禪尼とは虎御前の法名にて堂内の位牌には、『嘉祿三年春丁亥二月十三日』とあり、入寂の月日とすれば十郎の死を距ること正に三十四年。

虎は山々寺々拜巡りけるがさすがに古里や戀しかりけん、又は十郎が在し邊やなつ

かしく思ひけん、大磯に歸り、高麗寺の山の奥を尋ね入りて柴の庵に閉籠る、(會我物語)

その庵跡は則ちこれと言ひ傳ふ。

高麗山の下を山下村といふ、虎の父山下長者が邸跡といふがある由なれど、今はつくとも辨へがたし『大磯の長者が跡今に置のかたばかり残り、むかしは關東の諸大名に媚ひて世を渡りしが、今は絶えて、窟の跡のみ云々』(『東海名所記』)又その附近に玉童明神といふ小祠あり、祐成か贈りし文を虎御前の瘞めしところにて、かの文を火燒せし跡を灰塚と唱ふるとかや。

山下を過れば即ち大磯の宿なり、鎌倉時代の以前は知らず、頼朝一たび幕府を鎌倉に開きてより、その街道に當りて繁榮を極めたりしは、猶江戸に於ける品川の如くなりけむ、目頭は柳營に衣紋かいつくろひて鹵簿警蹕いかめしき諸大名も、秋雨ほろ／＼と落つる夕、あやにくに巫山のむかしを想ひ起し、一たびこの地に遊びては、關原の衣に、まぬくのうつり香忘れす、身も魂も落けんももひに堪へ兼て、編笠面ぶ

かく包みて白馬ゆらり〜忍び通ふも戀なればこそ。『吾妻鏡』に「今夜建仁元年六月一日到大磯令止宿。召遊君等被盡歌曲。」と、左金吾中將(頼家)の豪遊を記したるを初めとして遊廓のこと、往々正史に所見あり、虎御前の如き、節を絲竹の間に持して船々たる鬢髮幾十年、今に至るまで戯曲のヒロインとして世に渴仰せられたまふ女菩薩も在はし、ぞかし、その後源氏亡び北條氏倒れ、鎌倉の霸氣銷沈して五山の樓臺烟雨冷やかに、七郷の邸閭黍荒れたるにいたり、さしも榮華を極めたりし大磯も、朱唇初めて愁しみの涙を嘗め、白馬頭白馬頭に嘶て歸るを想ふ。文明十八年聖護院准后道興巡國の日記に曰く。

大磯の宿といふところは古へ虎といふ好色の住けるところとなん、或同行に戯に申聞せける

今はまた虎臥す野邊と荒れにけり

くはむかしの大磯の里

『同國雜記』

これは古今を比して感慨の意を諷諭の言に寓したるなれども、今を今として寂ひしき風流の極致を觀したるは、俳の亞聖宗牧にして、その天文十四年大磯宿なる笠原玄蕃助が許に宿りし夜、

こゆるきの磯も近く見ゆ、今夜旅泊はこの磯枕思ひ出なるべし。旅宿は山陰の小庵、花の木植て心あるさま、殊さら咲みたれて興を添えたり

又や見ん花の波さへこゆるきの

磯のまぐらの春のわけほの

まことに忘れがたき比くひなるべし、朝飯の仕立、何をかなど主人者もどめて小よるきのいそぎありきしさま、中川の宿おもひ出られたり。

『東國紀行』

細川幽齋も亦

五月十一日鎌倉見物のため、まかりける道に大磯といふところに屢はとまりて、こゆるきの磯を在所の人に尋ねけるに、此所の由答へ侍るに、釣舟の多く浮みて見

えければ

見るがうちに磯の浪分こよるきの

沖に出てたる蟹の釣ふね

〔東國陳道記〕

と書かれたりき。今こゝに歴代の歌集より撰ひ得たるものを摘めば、『いかにして今日を暮さんこゆるきのいそぎ出ても甲斐なかりけり』(少貳命婦)ひねもす漁れども獲ものなき蟹の、いかにしてけふの烟を立てんと、沙風しみるゝと愁ひ身に染まりて、麻の衣のあさましく、柴の門に佇める心の中こそ哀れなれ。『こゆるきの蟹はあさりに獲れつゝいかなる時かなまめかるらむ』(忠見)朝露未だ乾かざる草徑を踏み分けて裾も袂もひたぬれに濡れながら、汀にさまよひて、貝を拾ひ蝦を堀る蟹の子にありては、よしや生れ得て縋々たる玉手滑膩油の如きあるも、吹すさむ沙風に染まてやあるへき。照りわたる日光に焦けてやあるへき。おもへば人知らぬ間に色のあせゆく野末の花のそれにもまして哀れなる身にこそ。『こゆるきの急ぎて逢ひしかひもなく波よ

り越すと聞くはまことか』(源顯國)郎の船は新愁を載せて遠く漕ぎ出てぬ、波濤濤岸を拍てとも妾が一行の涙を洗はず。『こゆるきの磯山櫻咲きにけり、沖津波間に泊る舟人』(隆祐)にいたりては一幅の畫趣今さら筆をつけむこと難し。今更に當時の大磯海邊と比へ見んこと猶かたし。凡そ大磯は近古の名邑なれば古人の吟詠に上りたるものを治ぬく詮索すれば五車に積むほどもありぬべし。されど是れ吾業にあらず、以上の一二首只た古代の大磯がいかに寂寥幽遠の土地なりしやを知るを得は足れり。大磯驛を去て小磯に到る、村境に鴨立庵あり、西行上人が『心なき身にも哀れは知られけり』と詠したまひしところにして、後年芭蕉翁が『捨て果てし身はなきものどもとへども雪の降る日は寒くこそあれ、花の咲く日は浮かれこそすれ』と、上人の畫像に贊しまつりしは、只たこの『心なき身にも哀れは知られけり』の一句を祖述したるにあらざるか。誰か上人を以て木石の繻衣となすものぞ、朦朧たる煙雨のうちに、消えてゆく春の姿を退うて東にさすらひ、西にさまよふ、新菰と亂れたる世を遙かに餓狗塵芥の殘骨を争うて齧めくほどにも見做して、身は一生詩國の客となり、さる年秋の末つ

かた、このほりに来たまひしとき、天も地も、松吹く風も岸打浪も、いと寂ひしきが中に、一小禽の悲鳴して飛びゆく姿の何となう心に銘して『哀れ』といふことを觀しぬ。それ天地の情をたつぬるを假に風流と名く、風流の姿は何ぞと問はばこの幽寂に在るかな、幽寂といふは静けさの極をいふ、天と地と吾身とを一つの袋に盛りて限りある人世に限りなき優遊を味ふものは畫中の趣にあらずや。芭蕉翁ならでは上人の慈顔に白毫を點せんこと太難し。その後陸奥の俳人三千風が、『鴨立て無きものを何呼子鳥』と吟して泣きけむ。汀に松はあれども、友呼ぶ千鳥はあれども、風流の姿今見るべからず、世は只丸吾肉をのみ愛することを知りぬ。

鴨立澤より少しく戻りて寺の名は今考へ得されども『虎ヶ石』といふを置きたるがあり『虎か石とて丸き石あり、よき男のあぐればあがり、あしき男の持つには、あがらずといふ、色好みの石なりと旅人は欺きかたる』(『東海道名所記』傳へいふ、十郎虎が許へ通ふをりから、仇人竊に覗ひて矢を射りかけたるに、かの石いつくともなく飛び到り、其矢空しく石に中りて折れたるより、虎女奇として歎ひ、この石を愛玩せし

なりとぞ。林道春が、

大磯に曾我十郎が妾虎が舊跡ありとて、一の石を人人集まり見て、もたけころはか
しなどして、昔より虎石と名け、今に在り。

十郎慨懐愛_二於_一菴。

血氣武人犀甲驅。

妾婦當時誓_二星_一否。

願成_二此石_一似_二盟夫_一。

(『丙辰紀行』)

を始めとして林春齋が『虎娘元是娼家人。同契_二貧郎_一捨_二此身_一。今日堪_二憐遊宴地_一。唯題_二片石_一問_二遺塵_一』など見えたり。そのころは鴨立澤の路傍に置かれて縦まに旅客の覽るに任かせたるなるべけれども、後にかの寺へ移し置かれ、今は固く錦にて包み、堂守にをふにあらざれば狼に見ることを得ず。

あさましきかな、臣の馬を肥やすに君の骨を以てし、子の刃を寄するに親の血を以てす、かゝる疎ましき世の中に、御前と十郎と、そもいかなる因縁あればこそ、鶯羽未だ嘗て孤ならず蓮頭常に自ら並びて、鎌倉の鬚武士どもに、ちのが鬚の毛を撫て上げ、襟かき合はすことを覺えさせけるぞ。さても曾我の殿原は富士の裾野なる井手の

館にて討たれたまひぬと聞きて、十郎が残し置たりし水蒸のあとを善知識と、花の袂を墨染の衣にやつして菩提の道に入りたまひしかど、秋としなれば枕に弱るきりぐすの聲さへ寢屋に通ひ来て心を傷めすと云ふことなく、霜ならばこのまゝに消えて失せなん心地して『秋風になびく草木の露よりも、はかなく消えし人そ戀しき』と、執着の絆は皮肉に刻み入りてなかく、かよわき女性の手に断つべくもあらず。せめては亡き人の跡訪はばやとて、道芝の露に濡るゝは袖か、袂か裾野々原にさすらひて、これやこの昨日までもきぬくの別れを惜みたりし人の屍を横へりしかどあもへは、白雲竊縹として富士の山もけふは涙に曇るなり。さしも冷血なる鎌倉殿も哀れとやあほしけむ、念佛田を寄進せられしかば、御前も念佛三昧に勤行して日を送りける、ある夕、庭の櫻の小枝斜に下りたるを、十郎が姿かど見て走り寄り、取り纏らんとせしに、いたづらの枝なりければ、俯向きに倒れつゝそれより病みて往生を遂げられしどか。御前は悟らんとしたまへり、自ら悟りたりとあもひたまへり、死したる日も、猶ほ迷へるを知らで在はせしならん、さもあらばあれ、この心神も知るし召せ、御前

の如くに、一生を迷ふほど、愛らしく尊きものはなし。さればこそ、『女』の『を』の字と、『お化け』の『と』の字と相通するやうに、女性を蔑すみたる江戸の儒者先生も、御前のためには讚美歌を唱ふるを敢てしたるを聞け。

大磯虎娘石

木下貞幹

一箇貞心更不開

化為片石道之隈

縱令李廣飲其羽

同

菊池東勻

守身百煉女貞堅

須是十郎情愛偏

相思他年死為石

三生猶托好因縁

同

釋智好

虎妾遺蹤東海濱

堅心固執淚沾巾

扶桑又見望夫石

長劫天衣塵不浪

余嘗て鎌倉に遊ぶ、六十餘州の總追捕使が智の力、權の力、いかばかり大なるやを

知らんと欲して得るところなかりき。血を流して買ひたる城、舌を爛らして欺き取りたる土地、いかばかり堅固なりしやを知らんと欲して又能はさりき。而して今僅に一部の『山家集』を讀めば、文字のあらむ限り、人間の存する限り、西行上人は永久に生きたまへり、恐らくは無窮に生きたまふらん。吁嗟、湘山の風雨五百年、青々たる艸は空しく金殿の暖夢を片碣荒邱に鎖し了して、宗室覆へれども香を拈るものなく、瀟瀟墳まれども涙を漉くもの稀なり、巨頭政治家の末路も亦哀むべきかな、君見すや、悠悠たる行路の客、今日將軍の全盛を説かすして獨り虎御前を吊ふを。龜は肉に克ちたり、愛は刃に克ちたり、西行上人や、虎御前や、眇たる一法師と一遊女とのみ、人は衣冠を以て重きを百世になさす。

西小磯の境を出つれば、土俗『首切地藏』とて聞え高き石地藏あり。

小磯の町はづれに小橋あり、そのさきに切通あり、右のかたに石地藏あり、そのかみ、此の地藏夜毎に化けて、往來の人をたぶらかし、なやましけり。紀州のなにかしどかや急ぎける道なりければ夜に入て、こゝを通り侍りしに、うつくしき女にな

りて立出づ。どかくするほどに、まきりにあそろしくなりければ、ぬきうち打ちけり、斫られてのちにあらはれけり、立よりて見れば、石地藏のくび、うちあそられたるにてぞ有ける、それよりこのかたは、くびきれの地藏とぞ名付ける。

〔東海道名所記〕

むかしは賽錢上りて拜みたる人もありしと聞けど、當世はいづれも佛より賢き人ばかりなれば、地藏尊より賽錢の分配もらひて、次の宿にて茶代の足しにせんものと、心悪くるぞかし。

西小磯村より國府本郷川をうちわたり、國府新宿より又宇田川といふをこえて二宮村に入り、梅澤川を過く、こゝより山西村に入りて梅澤の立場にいたる、むかし梅樹多かりし故にかく名けたりとぞ。元和八年十二月、内大臣通村が關東より歸洛の路次元和八年十二月十六日、江戸を立て登りけるに、十八日大磯のこなた梅澤といふところにて、梅の咲した、

冬かけて咲梅澤のところにて

春の隣の近きと知る

〔關東海道記〕

今も猶多く植ゆれど實の熟するを待ちて之を露くためなり、むかし茶店軒を列ねて諸大名の休憩所に充てられたるほどなれど、今はいと寂ひれて土地の人の外は行きかふさへ稀なり、大磯のそれと反比例をなして榮枯定なきは人の身の上のみかは。押切川をわたりて足柄下郡に入れば、國府津に近くなりて、大磯の名所といふはここに終れり。

幽寂

劍川先生の『日本風景論』、美と瀟洒と跌宕とを擧げらる。試に幽寂を擧げむか。

- (一) 山嵐雨を帯ひて禪房に洒く、磬聲歇む。
- (二) 畦畔地を畫して小池を作る、窪然たる一泓沍、菰蒲掩映、苔蘚參差、大サ針の

如きメダカ魚、遊ぶもの五六。

- (三) 一村の茅屋皆桃花の間に高低す、桃花を隔て微かに聞き得たり、機杼の響仰塵たるを。
- (四) 石瘦せ沙肥えて半は洲を露はし、枯蘆折葦互に扶倚狼藉す、一水杳然靜に其根を洗うて去る、『枯葦の日にく折れて流れけり』
- (五) 細木橋、碧峽に跨る、俯瞰すれば深壑窅然、蕤冬花瀾水に泛ぶ。
- (六) 孤燈燃え盡くして東窓紅已に抹す、枕を敲て聞く、鷄鳴と馬鈴と岑寂を破るを。(客舎)
- (七) 柳絮飄搖、心なくして飛んで少女の家に入るや、少女心有りて郎か新衣を纏す。
- (八) 一渚皆白蘋、偶き風吹けば則ち雪を飛ばして渡頭舟人の髮髪より曬し。
- (九) 墨田の長堤、春月微暈を帯ひて夜色蒼茫、亦鞭影衣香の花神を累はすものなし。一水溶々、嘗て木蘭舟中蛾眉を研りたる三叉江に流れ到るや、落花點するもの兩三片。

(十) 山僧巨鐘を敲くこと數杵、聲は鏗々然として、杵止むも響尚ほ伽藍の間寂に響る。

(十一) 麥壠兩三頃、澗水縱横に繞りて路迷はんどす、少女菜花を折らんとすれば、蜂蝶蕊を啣みて高く飛び去る。

(十二) 驛馬曉烟を踏みて殘月に嘶く、悠々たるかな、馬上の人、路傍白玉一峯驟として我を遶ふるを知らず。

(十三) 乾沙乾堆くして山を傲す、瘦松根を沙中に托し、孤聳して天懸に吼ゆ。

(十四) 滿野蓬絶え草枯れ、荒土一杯僅に鬪體を瘞む、『無殘やな鏡の下のきりくす』

(十五) 夜來の疎雨は四方の霞を蒸して春正に闌なり。塵事ぞ、夙起戸を推せば落花片々、清く霽かれて寸塵を留めざる庭園の、石上に點しては淡雪を布き、泥中に埋もれては白玉を包む、多趣なるかな花の姿、多情なるかな花の心。『わか奴落花に朝寝ゆるしけり』

(十六) 滑川の海に注くところ、金蛇一縷、月と蟲聲とを織せて漁戸を訪ふ。

(十七) 蒼靄比屋の上を亘りて遠く總房の山を杳渺の中に置む、網を撒せる漁翁、斜陽を脊に帯ひて、楸花揺落草空しく成長せる古刹の邊を歸る。

(十八) 虎娘墓畔、白楊露を掃ふ、これは是れ十郎曾て馬を繫きたるところ。(大磯)

(十九) 驛樹の間、芙蓉峯突兀として高聳す、夕陽嶽背に落ち、紫雲霞靄、山色變幻、碧紗となり、金蛇となり、漸くにして昏黒、一抹の輕烟地に布きて低迷するところ、微に田園人家の燈火明滅たるを認む。(沼津)

(二十) 青天數萬仞の上に立ちて長嘯す、萬里の晴霄一點の塵なくして瀾氣水の如く、珊々たる露華は高く銀河より滴り、流星幾點、天球を横斷して光芒長く曳き、肩を摩して去る、佇立之を久うすれば、下界鴻濛、夜氣森然、高寒紫府より迫り來る、仙乎、神乎、我は、塵寰を距ること一萬二千尺。(富士山頂)

南船北馬

(錄十六首)

戶塚所見

炊烟高颺晚鴉低
滿林風樹暮蟬嘶

一望青田漠漠齊

牧馬歸來夕陽路

返子

碧波瑤面水迢迢
模糊認得送歸棹

一幅明妍不易描

烟曳遠山秋色香

又

驚起沙鷗飛作雙
一曲滄浪漁子腔

晚烟縷縷出蓬窓

煙波無限清涼國

渡馬入川

江烟慘澹香無邊
西風曠野望懷然

驛樹青青日暮天

滌氣吹來人不見

三浦途上

沙汀一路晚蒼茫
少年風貌似漁郎

酸雨蕭蕭濕透裳

村老村姑笑相語

關本客舍

啼螿如雨亂清秋
松雲冥漠佛燈幽

月氣蕭蕭露氣稠

一帶蘼蘿茅屋外

又

溪流一道響前林
疏籬不動夜沈沈

墜露有聲涼氣深

一點盛光乍明滅

函山雜詩

須道斯鄉是仙境
付與函山一段雲

人間到處勝名聞

好將世上風塵跡

又

身似岫雲心自閑
臥聽泉聲起見山

詩魂清比水潺湲

靜幽此境吾堪隱

函關途上

亂蟪如雨滿空山
白雲伴我度函關

日午獨穿巖壑間

秋意凜然涼透骨

宗祇墓

閑雲野鶴想仙姿
千秋並立早雲碑

絕代風流百世師

死向青山瘞吟骨

南豆客中

孤鴻啼斷望悠悠
屢烟縈雨海南州

滿目西風水國秋

潮響驚眠半宵苦

觀魚崎

蒼烟遠罩水漫漫
大鵬薄海暮潮寒

一髮青山如夢看

帆影不搖漁笛歇

沼津望嶽

大空千丈秀奇峰
夕陽繪作紫芙蓉

冠絕群山萬萬重

八面玲瓏淨如拭

峽中雜詩

獨醉一杯懷偉風
國在青山四塞中

瀾圖已喪吊英雄

居然形勝金湯地

又

百二山河古戰場
破驛亭前立夕陽

龍驤虎視跡茫茫

亂峰仍舊青無恙

扇頭小景終

明治四十二年五月十三日印刷
明治四十二年五月十五日發行

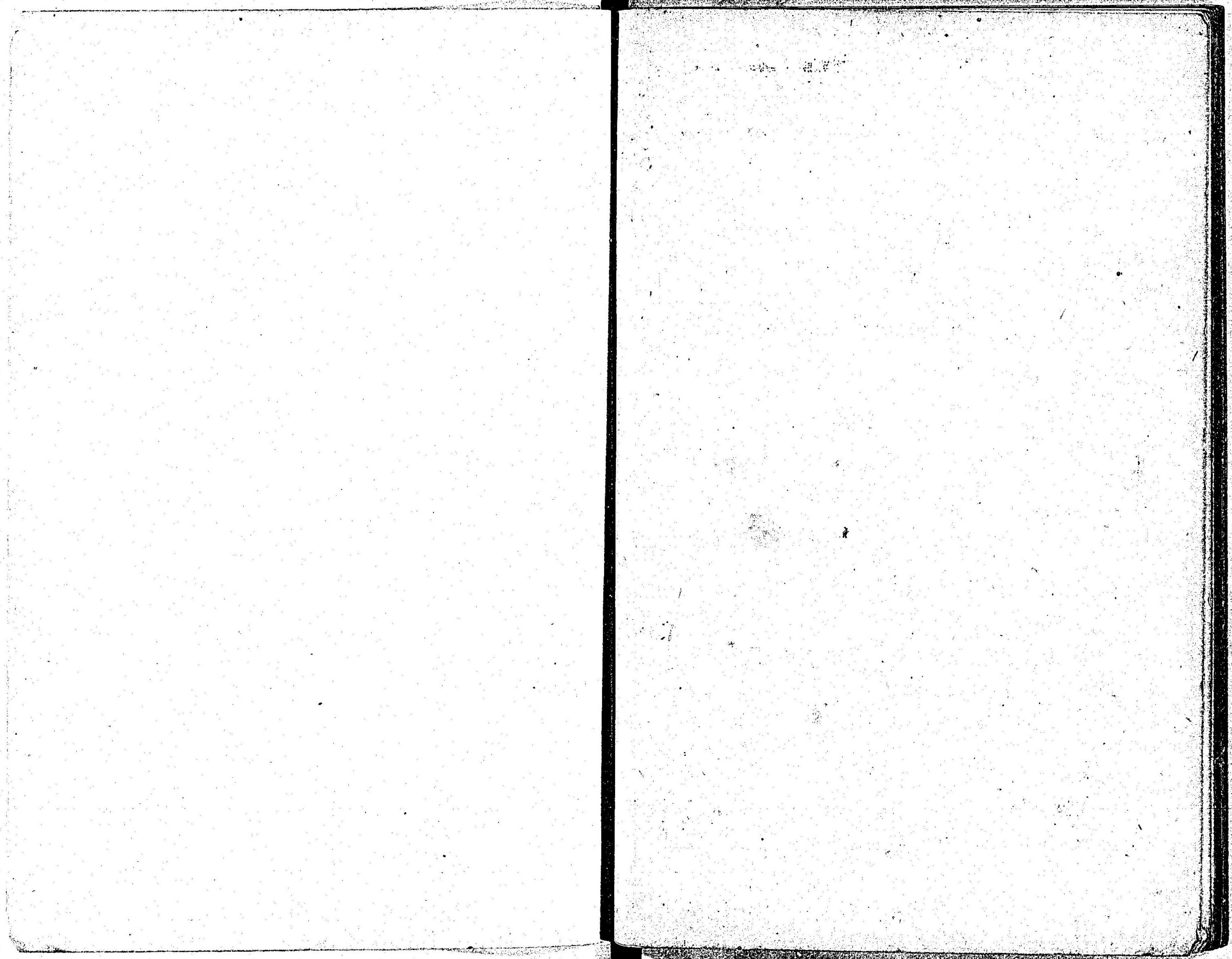
定價三十錢

著作
所有

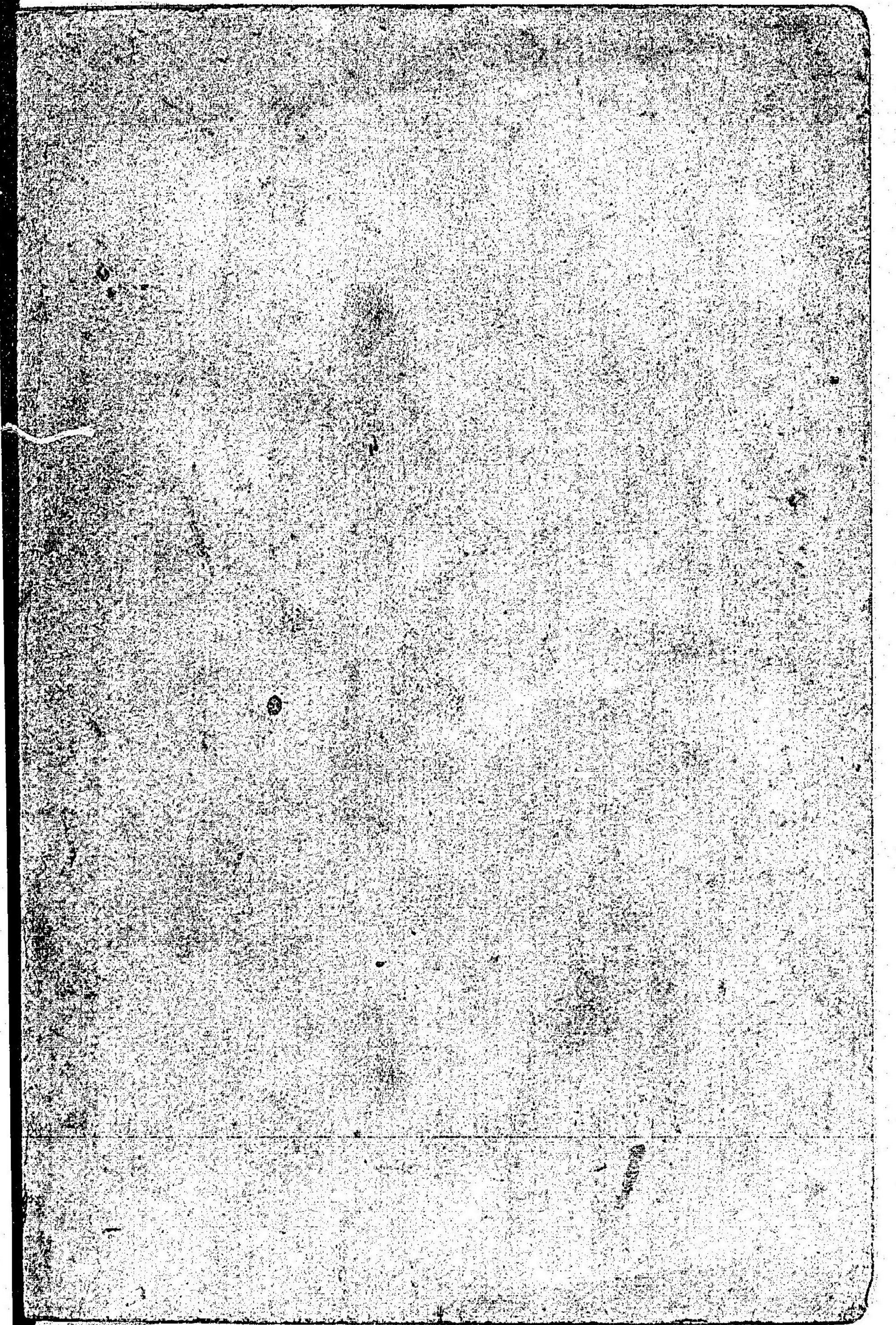
編輯兼發行 大月 隆
東京神田錦町一丁目十六番地

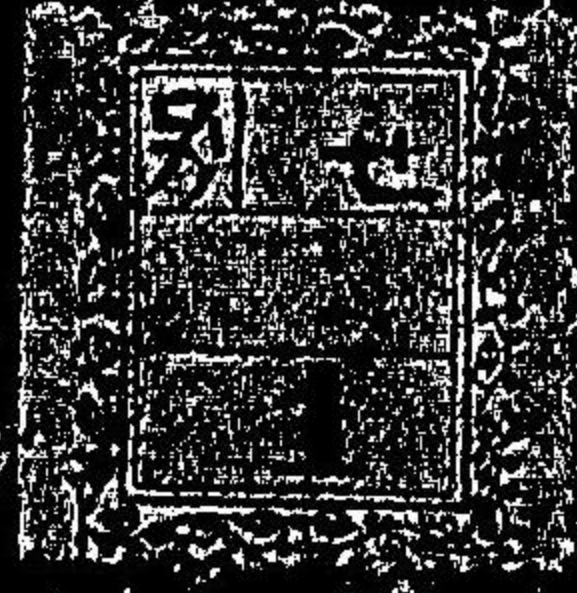
印刷者 野本藤治郎
東京神田淡路町二丁目三番地
印刷所 野本印刷所

發兌元 東京神田區錦町一丁目十六番地 文學同志會
發兌元 大阪市江戶堀上通一丁目百十九番地 文學同志會大阪支部



別世
1





301739000-0

別世-1

扇頭小景
小島 鳥水 / 著

M42

DBR- 37

